MOBILE SUIT
GUNDAM
UNICORN

PRISMATIC MOBILES

part 1

機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ

著 関西リョウジ
監修・サンライズ

KCA435-1
角川書店

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN

PRISMATIC MOBILES

機動戦士ガンダムUC プリズマティック・モビルズ

関西リョウジ 監修：サンライズ

part1



MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN

PRISMATIC MOBILES

機動戦士ガンダムUC プリズマティック・モビルズ

C O N T E N T S

Part1 ——— 003
RGM-89S PROTOTYPE ——— 005
AMX-009 ——— 009
RGZ-95 & RGZ-95C DEFENSER UNIT ——— 013
AMX-006 ——— 019
MSN-001A1 ——— 023
MS-21C ——— 029

Part2 ——— 034
RGM-96X ——— 035
AMS-129M ——— 041
RMS-179 ——— 047
RX-160 & RX-160S ——— 053
AMA-X7 ——— 059
AMX-014 ——— 065
YAMS-130 ——— 071
MSN-001 ——— 075
RX-0 BANSHEE UNICORN MODE ——— 079
RX-0 BANSHEE DESTROY MODE ——— 083

Part3 ——— 092
RAS-96 ——— 093
AMS-129 ——— 097
RGZ-95 ——— 101
RGZ-95C ——— 105
AMS-119 & AMS-119C ——— 109
D-50C ——— 113
MSN-06S ——— 117
RX-0 UNICORN MODE ——— 121
NZ-666 ——— 125
MSN-001X ——— 129
RX-0 DESTRIOY MODE ——— 133

Part4 ——— 139
UC BIBLIOGRAPHY ——— 140
PRISMATIC MOBILES ILLUSTRATIONS ——— 145
白石琴似 ——— 146
森田崇 & 石口十 ——— 148
虎哉孝征 ——— 150
本橋雄一 ——— 152
葛木ヒヨン ——— 154

対談　乾雄介×関西リョウジ ——— 156

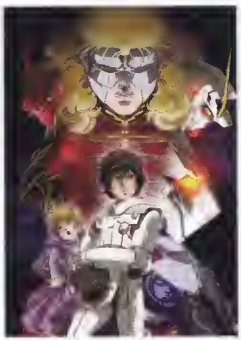
AFTERWORD ——— 158

Part1

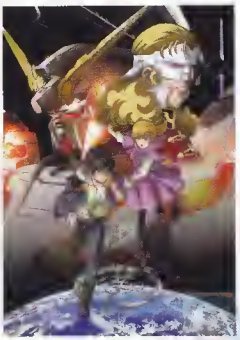
episode 3
「ラプラスの亡霊」
2011年3月5日～

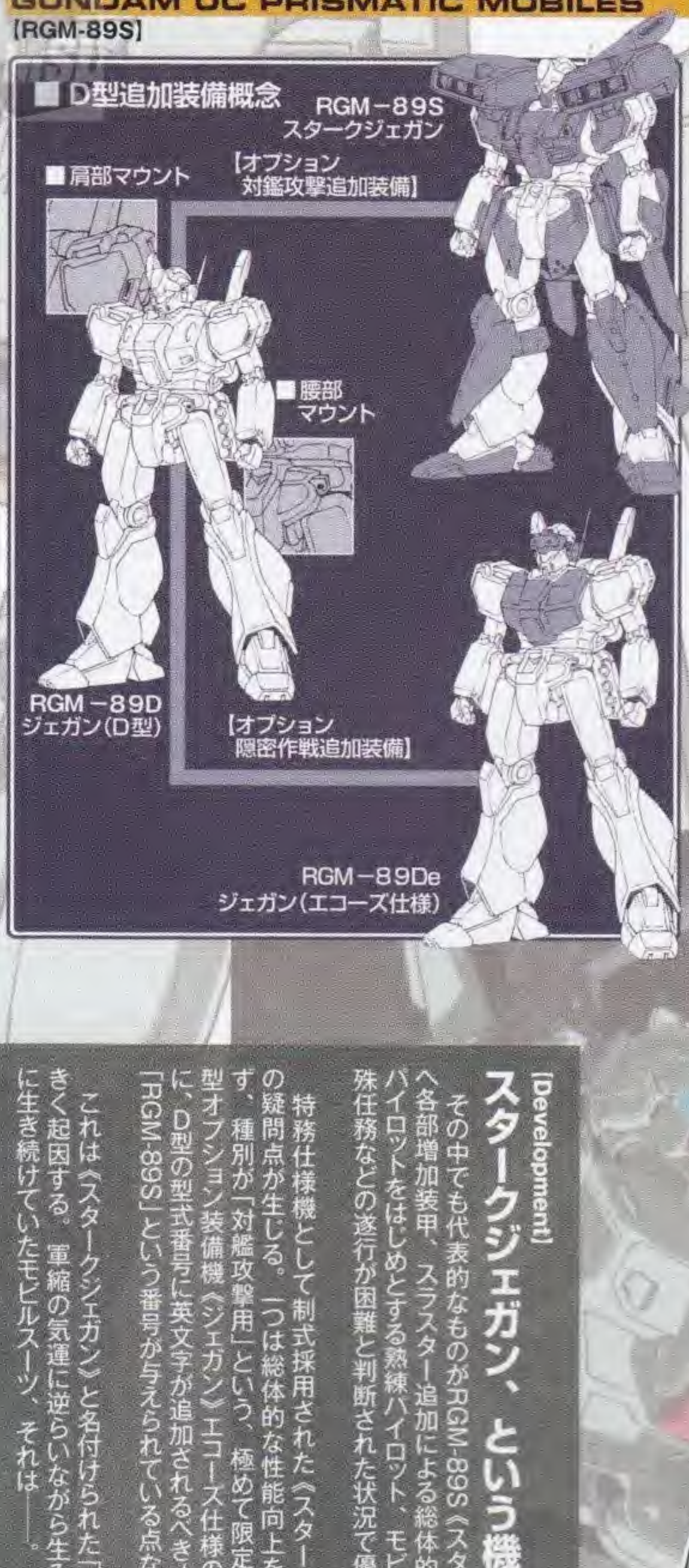


episode 2
「赤い彗星」
2010年10月30日～



episode 1
「ユニコーンの日」
2010年2月20日～







【Introduction】

ジェガンD型、という機体

軍縮の気運が高まりつつあった宇宙世紀0094年の地球連邦軍では、新型機の開発よりも既存機種へ複数のオプション装備を換装することによって、様々な運用に対応できる開発方針が採られた。

当時の連邦軍主力モビルスーツRGM-89《ジェガン》も、マイナーチェンジ版となるD型開発の際にはその方針に則り、肩部や腰部へ専用のマウント・ラッチが増設され、オプション装備の各種を容易に換装することが可能な設計に改められている。

そうして完成した《ジェガン》D型には、ペーパープランを含めて数多くのオプション装備が存在し、至る所で発生したという突発的な小規模戦闘においても、現場レベルで即時対応が可能な利便性の高さは連邦上層部で大いに評価され、その後長きに渡る主力モビルスーツの座を務める足掛かりを得たのであった。

【Development】

スタークジェガン、という機体

その中でも代表的なものがRGM-89S《スタークジェガン》である。《ジェガン》D型へ各部増加装甲、スラスター追加による総体的な性能向上が図られており、一部エースパイロットをはじめとする熟練パイロット、モビルスーツ小隊長向けの仕様機として、特殊任務などの遂行が困難と判断された状況で優先的に配備されるようになった。

特務仕様機として制式採用された《スタークジェガン》には、些細なことだが数点の疑問点が生じる。一つは総体的な性能向上を図られた強化装備であるにもかかわらず、種別が「対艦攻撃用」という、極めて限定されたものであった点。また、同様のD型オプション装備機《ジェガン》エコーズ仕様の型式番号が「RGM-89De」であるように、D型の型式番号に英文字が追加されるべきオプション装備機のルール付けから外れた「RGM-89S」という番号が与えられている点などである。

これは《スタークジェガン》と名付けられた「もう一つ」の機体が存在していた事実に大きく起因する。軍縮の気運に逆らいながら生み出され、そして雄々しく宇宙世紀の影に生き続けていたモビルスーツ、それは――。

...next【Turn】

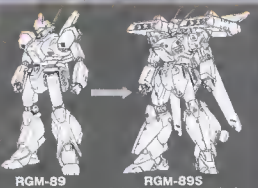
[Turn] プロト・スタークジェガン、という機体

運用試験機

純然たる対艦攻撃用の真なるRGM-89Dとして開発されたもう一つのスタークジェガン。後に《プロト・スタークジェガン》と呼ばれるモビルスーツである。

一世代前の通常型主力モビルスーツであるRGM-86R《ジムII》が示した長距離支援用としての運用実績を特化させ、あらゆる状況下での対艦攻撃を可能とすることを目的に基本設計が行われた。

本機の開発当時、機種転換が意欲的に進められていた主力モビルスーツ、RGM-89《ジェガン》の初期型をベースに量産性を度外視した大改修を行い、運用試験機が少数生産されたのであった。



RGM-89
《ジェガン》

RGM-89S
《プロト・スタークジェガン》

■CHECK
本機のコックピットシートは、ベースとなった初期型ジェガンと同様のタイプが配置されている。そのためガンダムUCの時代では廃止されたアームレイカー式のコントロールスティックを使用している

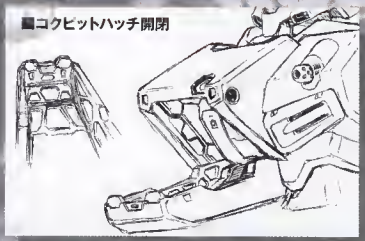


■肩部&上腕部



肩部にサイコ・ボックを取り外した状態。胸部にはマシンガンが二門備えられている

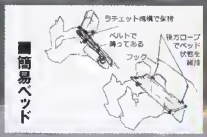
■コクピットハッチ開閉





■コクピット概念

■複座式全天周コックピット



■簡易ベッド

■CHECK
本機のコックピットシートは、ベースとなった初期型ジェガンと同様のタイプが配置されている。そのためガンダムUCの時代では廃止されたアームレイカー式のコントロールスティックを使用している

必撃の配置

確実に敵の艦船を仕留めることが求められていた〈プロト・スタークジェガン〉には、従来では珍しく異形全天周モニターによる複座式レイアウトが採用された。

左側シートを操縦席とし、右側を火器管制席とするサイド・バイ・サイドで、パイロットと砲手の2名が搭乗する。

全天周空間の上面には、攻撃、狙撃等の情報を集中表示する砲手専用の拡張モニターが設けられ、長射程攻撃の精度を限りなく高めることに成功したのである。

■UC0096時の連邦共通コックピット【レバータイプ】



■UC0093当時の連邦共通コックピット【アームレイカータイプ】





恵まれた力、だが

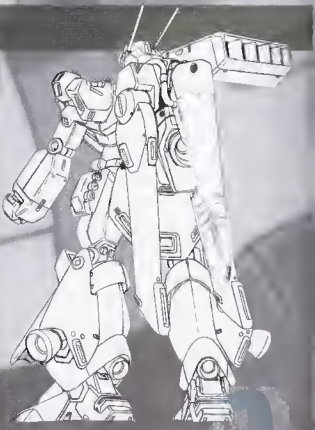
このように長射程攻撃を追求した〈プロト・スタークジェガン〉ではあったが、あくまでそれは"要素"でしかなく、全ての状況において問題なく作戦行動を遂行できるよう、装甲・機動面の強化も真摯に取り入れられた。

追加装甲ではなく、もはやベース機の原形をとどめていない胸部ブロックの大幅な改修を含めた各部装甲の更新は、軽量・高硬度素材として知られているガンダリウム合金が使用されており、シールドを必要としない堅牢な耐弾性を獲得している。

一見、肩部ミサイル・ポッドによる重量の増加をカバーするべく備えられたかのような背面のスラスターユニットは、軽量な装甲材の効果も相まってベース機以上の比推力数値を容易に叩きだし、カバーどころではなく大幅な機動性のアップに寄与している。

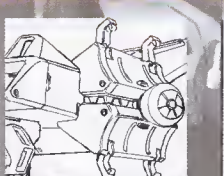
武装面でも各射程に対応した携行火器が用意されるなど、あらゆる面で誇るべき要素を持つ〈プロト・スタークジェガン〉。だが、ここにきて新たな疑問が生じるのは仕方のないところであろう。

軍縮の気運が高まりつつあった情勢の中で、試作機とはいえなぜここまでの優遇措置が与えられたのか。全ては〈プロト・スタークジェガン〉に用意されていた二つのオプション兵装が鍵となるのである。



...next [Conclusion]


■対艦ミサイル


■対艦ミサイルマウント

[Conclusion]

スタークという「意味」

《プロト・スタークジェガン》に備えられた高レベルの「射撃・耐弾・推力」。古き時代から人々に崇拝とされてきた、ある兵器を運用する前提と考えれば、全て合点がいく。そしてそれは、実際に用意されていたのだ。

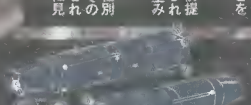
肩部3連ミサイル・ポッドの両脇に装着される、「核弾頭」を装備可能な対艦ミサイルの存在。宇宙世紀0079年の「一年戦争」時に締結された「南極条約」において禁じられた兵器である。条約の効力は失ったとされるが、未だその概念は強く残り続ける宇宙世紀0094年に、突然核兵器の運用が可能な本機の開発が進められた理由――

それは《プロト・スタークジェガン》開発の前年、宇宙世紀0093年に勃発した「第二次ネオ・ジオン戦争」において、終結のきっかけになったとも言われる、宇宙が美しく煌めいた日「アクシズ・ショック」での戦闘内容に大きく起因するというが、真実はその戦いに身を投じていた人間のみが知るところであろう。

幸い、人には過ぎた装備が使用された記録もなく、本機は一応の運用試験を完了する。その中で、偶発的に発生した小規模のジオン残党軍の掃討任務を鮮やかに完遂するなど、純粋な性能の高さを内外に示す機会も多々あったようだ。

そこで得られたデータから、核兵器を扱う前提で設計された機体とはいえ、そのために備えられていた強化のバランスが意外にも高い汎用性を生み出している事実が明らかとなった。

結果として「対艦攻撃用」という限定された種別はそのままに（D型を素体とした）新たなRGM-89Sが開発されることとなり、本機は役目を完全に終えたかに見えた。


■大型対艦ミサイル

再び、振るう力

宇宙世紀0096年、月のアナハイム・エレクトロニクス社に保管されていた《プロト・スタークジェガン》の1機は、連邦軍のとある作戦に参加するべく、補充機体の一部として「コロンブス級補給艦《アラスカ》」に積み込まれ、補充先の独立機動艦隊が待つ目的地へと向かった。

役目を終えた試験機が、連邦軍の補充機体として配備されることは極めて異例の措置であったが、《アラスカ》には本機の他にも規格外の試作変形機や、軍内でも噂のつわものしがなかった特殊部隊が実際に乗り込んでいた事実を見れば、今回の作戦が様々な事情をきんだ、いわゆる通常のものでないことがわかる。

その作戦では、目標ポイントへの迅速な到達、そして精密かつ高威力の長距離攻撃が重要となり、初撃での確実な結果を出すために用意されていた「大型対艦ミサイル」の運用が可能な本機に相応しいものであったといえよう。

なお、この作戦に参加した《プロト・スタークジェガン》の大型対艦ミサイルには、通常弾頭が備えられていたという。



SPEC
頭頂高：19.2m
本体重量：29.1t
全備重量：69.8t
ジェネレーター出力：1870kw
スラスター総推力：78500kg
センサー有効半径：20700m
装甲材質：
チタン合金セラミック複合材
十一部ガンダリウム合金
武装：ビーム・サーベル
ビーム・ライフル
ハイパー・バズーカ
60mmバルカン砲
ハンド・グレネード
マシン・キャノン
3連装ミサイル・ポッド
対艦ミサイル
大型対艦ミサイル

RGM-89S PROTOTYPE STRAK JEGAN

【Introduction】ジャイガンティズム

宇宙世紀0088年代後半から0090年代前半にかけて開発生産されたモビルスーツ達を表現するならば「恐竜的」という言葉が一番相応しいだろう。

人型機動兵器としてより強い火力、より高い機動力を求められ続けてきた結果、体躯のみならず、あらゆる面において巨大化を招いたのである。

宇宙世紀0088年に勃発した「第二次ネオ・ジオン戦争」におけるネオ・ジオン軍では、人材・資材両面の不足によって単機での性能面に比重が置かれていた事情もあり、その流れが特に顕著であった。

副産の汎用量産機は複数発によって損害な砲が最終的に旧ジオン公国軍で運用実績を残したモビルスーツの後継機が採用されたが、その機体もまた「恐竜的」進化を遂げていた。

【Development】ドライセン、という機体

重モビルスーツというカテゴライズは旧ジオン軍のMS-09《ドム》から始まった。マッシブなフォルムを持った四肢、重厚な装甲、そしてその巨躯にそぐわぬ高い機動性能。陸戦用として開発されながらも、基本設計の高さから僅かな改修によって宇宙でも対応しうる性能を誇った《ドム》は、様々なバリエーション機を産出した。

その後継機として開発が進められたのがAMX-009《ドライセン》である。名機の運用思想が色濃く取り入れられた《ドライセン》の設計案に対し、その承認に異を唱えた者はほぼ皆無であったという。

とはいえ幾分遅れての開発となった《ドライセン》は、めまぐるしく変化する戦況の中で、格闘戦能力に比重を置いた方向性へと設計変更がなされた。

当初の専用携行火器を基点とした装備案に代わる、極めて個性的な近接兵器を与えられて実戦に投入されることとなったが、対するエゥーゴにも「恐竜的」進化を遂げた機体は存在し、それを使いこなすパイロットの登場と共に戦いは修羅場を迎える。

残された牙は

宇宙世紀0089年、ネオ・ジオンの敗北によって戦争は終結したが、その後もジオンの魂は色相を変えながら、宇宙世紀にその名を刻み続けた。

モビルスーツの進化は日進月歩で加速するも、一向がう方向性は原点回帰へと徐々にシフトされていき、「恐竜的」進化の極致にあった当時のネオ・ジオンの機動兵器は人々の記憶から失われつつあったという。

だが、その時代に存在していたモビルスーツは、戦いによって全てが失われた訳ではない。残存機体は狩る時を待ち続け——そして、その時は来たのだ。

■宇宙世紀0088年
(右) AMX-009《ドライセン》
【22.0m】

■頭頂高比較

■宇宙世紀0079年〜
(左) MS-09《ドム》
(中) MS-09R-2《リック・ドムII》
【18.6m】

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume001_AMX-009

...next【Turn】

[Turn] 袖付きドライセン、という機体

彩られた「巨人」

宇宙世紀0096年、本来資源衛星であった〈バラオ〉は、「シャアの再来」と謳われたフル・フロンタルを首魁とする新たなネオ・ジオン残党軍の拠点として機能していた。

そこには様々な過去のモビルスーツ達が時代を超越して等しく制式配備されているという不思議な光景が見られ、それらには戦闘兵器らしからぬ「袖」が加えられていたのである。

〈ドライセン〉も漏れることはなく、外装には「袖」をはじめとするエングレービングと薄紫を基調とした再塗装が施され、まるで新型機種のような様相を見せては居たが、基本的には接続部のような様相を見せては居たが、基本的には接続部の更新と機体整備性の改善を図った一部小改修のみに終わっている。

これは組織内における物資不足等の理由によるものだけではなく、むしろ〈ドライセン〉の機体性能の高さから大幅な改修は不必要であると判断されたためであった。

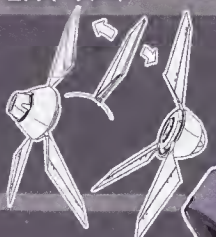
■コックピットシート



■3連装ビーム・キャノン

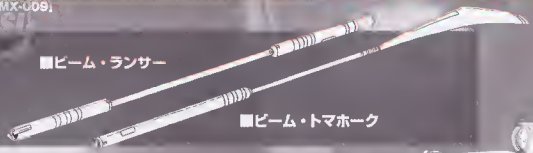
■CHECK
本体ジェネレーター直結式の固定火器である3連装ビーム・キャノンは、上腕外装部に露出していたパワーサプライヤーが戦闘による被弾時に一切の使用が不可になるという問題点を抱えており、堅牢な装甲に包まれていたドライセンの「弁慶の泣き所」とも表現できる弱点であったが、バラオでの小改修時に内装式へと改善が図られている

■トライ・ブレード





FRONT VIEW



■ビーム・ランサー

■ビーム・トマホーク



■ビーム・ライフル

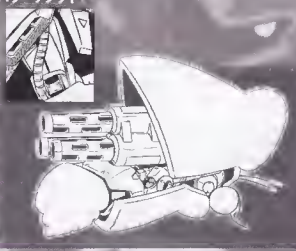
■CHECK

宇宙世紀0089年当時、専用携行火器が設定されなかったドライセンに与えられたのはAMX-107バウのビーム・ライフルであった。



REAR VIEW

U.C.0089時のパワーサプライヤー



■脚部・ラスター



彩られぬ「矜持」

宇宙世紀0089年時の〈ドライセン〉は、地球侵攻用モビルスーツとして完成を見た機体である。地上における遭遇戦を想定した近接戦闘主体の内装及び携行兵器は、今もなお変わることなく備わっていた。

斬撃・刺突用にそれぞれ用意されたビーム・トマホークとビーム・ランサーは、繋ぎ合わせることによってビーム刃の出力を倍加させることが可能な格闘用兵装である。

前腕部に内装された3連装ビーム・キャノンは高出力のビームを高速で連射し、近距離では圧倒的な制圧力を誇る。

背面に備えられたトライ・ブレードは現在においても公的に他のモビルスーツへ受け継がれることが無かった特殊な兵装であり、実験的な機体・兵装が多く見られた当時のネオ・ジオンモビルスーツである何よりの証といえた。

時代の事情によって化粧を施されながらも、個性的な兵装を生まれ持った〈ドライセン〉としての矜持に切迫らぐことなくその威容を誇っていたが、時代の事情を超えたある思惑の中で、新たな携行兵装が設定されることとなった。

それは一見して目新しさのない兵装ではあったが、〈ドライセン〉が本来向かおうとしていた道筋への回帰をもたらす「火付」となるのである。

■CHECK

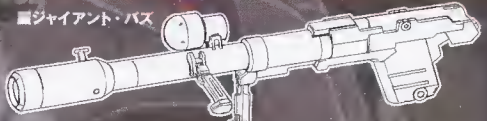
地球侵攻用の近接斬撃兵器として用意されたトライ・ブレードは、その構造上大気圏外での運用は想定されていなかった。宇宙に存在するバラオでの配備時には、戦術的に不必要であろうこの兵器に対して、頑なに装備の継続にこだわった熟練パイロットが存在したという。これは他のMSに設定されなかった特殊兵器としての愛着のみならず、兵器開発者の思惑を超えた応用的使用法が編み出されていたとも考えられよう



■足裏

...next [Conclusion]

■ジャイアント・バズ



■ヒート・サーベル



【Conclusion】 終るべき「極致」

「つは、大口径の実体弾砲である。フロンタルが駆るMSN-06S〈シナンジュ〉のバズーカをベースとして新規に開発が行われた。機構を簡略化されてはいるが、その威力は劣ることなく一撃で相手を決める。

そしてもう「つは、この時代には珍しい実体剣であった。刀身部分を白熱化させ、敵の装甲を斬撃によって溶断する、ジオン軍がビーム・サーベルを開発する以前に運用されていた旧式の近接兵器である。

それらは「ジャイアント・バズ」「ヒート・サーベル」と呼ばれていた——そう、《ドム》の代名詞とも言える両兵器が、《ドライセン》に与えられたのであった。

■CHECK
ヒート・サーベルはその性質上、基本的に使い捨てとなるが、シンプルな構造によるコストパフォーマンスの高さからドライセンの準近接装備として設定された

■AMX-009 SPEC
頭頂高：22.0m
本体重量：36.7t
全備重量：67.9t
ジェネレーター出力：2380kw
スラスター総推力：107800kg
センサー有効半径：13100m
装甲材質：ガンダリウム合金

■選択式武装ラック



■バラオに配備された旧型MS（一部）



AMS-119 〈ギラ・ドーガ〉重武装仕様
AMS-119 〈ギラ・ドーガ〉
RMS-119 〈アイザック〉
AMX-006 〈ガザD〉
AMX-003 〈ガザC〉
MS-21C 〈ドラッツェ〉

ダイノサウリア

特に《ドム》の運用思想を取り戻すために用意されたジャイアント・バズは、射程延長による戦闘可能範囲の拡大によって他機体との連携が容易となり、様々な機体が共存する〈バラオ〉での運用面において高い優位性を誇った。

だが、旧式の機体に最新鋭の装備を与える行為は《ドライセン》にとって、確かに汎用性を高める効果を示しはしたが、新たな可能性をも同時に見出していたのである。

カンダリウム合金による堅牢な装甲、過分ともいえる出力と推力。《ドライセン》は後に作られた汎用機に引けを取らぬ、もはや総体的にはそれらを超えた機体性能を持ち得ていた。

ジャイアント・バズの存在は《ドライセン》をより高みへと進化させ、正統後継機《リック・ドムⅢ》と呼んでも差し支えのない結果を残した。

《ドライセン》の「恐竜的」進化は、新たな牙を持って完結を見た。実在した獣の王者が往まう世界に、一匹の伝説の獣が降り立つのは、もう少し先の話である。

[Introduction]

リゼル、という機体

《リゼル》は地球連邦軍からの委託を受け、アナハイム・エレクトロニクス社が開発した量産型MS(可変モビルスーツ)である。

MSZ-006《Zガンダム》の量産化を目的とした本機は、開発当時の主力モビルスーツであったRGM-89《ジェガン》の部品規格を組み込むことで、MSといえども大幅なコストダウンを計上することが可能となった。

運用面においても《ジェガン》との連携を前提とした設計が行われたことによって、要求されていたコスト、運用条件を高いレベルでクリアした待望の量産型MSとして完成を見たのである。

BOX-UNIT

リゼルの標準的な箱形タイプのバックパックユニット。WR形態時の余剰推力を活かし、サブ・フライト・システムを兼用する航宙戦闘機として良好な性能を示した。また、ユニット自体の簡便な整備性は現場でも好評だったという

WING-UNIT

大気圏への突入能力と圏内での飛行能力を付加する、可変翼タイプの背面ユニット。有重力下でのSFS運用を可能とするために推力値が増加しており、宙間運用においても純粋な性能向上の目的で本ユニットを選択する熟練パイロットも存在した

[Development]

バックパックユニット

当時の地球連邦軍における MS開発は、全体に萎縮する軍事傾向の気運もあり、積極的な新規開発は行わず、基本となる機体にオプション装備を換装することによって、多角的な運用に対応する方針を優先しており、《リゼル》にも複数種のバックパックユニットが設定、開発されている。

特に代表的なのが本頁に挙げた「ボックス」と「ウイング」の2種であろう。前述したように筆頭の時代の中で、両ユニット共に搬機を運搬するSFS運用の機能が与えられ、連携を前提とした方向性のもとにようやく世に出ることを許された機体であることも表現できる。

ただが、《リゼル》にはもう1種のバックパックユニットが存在する。そのユニットは、群を個と成す連携とは違う、一個を群とする性能を《リゼル》に与えるものであった。

...next[Turn-01]

【Turn-01】

ディフェンサー、というユニット

a+b

ディフェンサーと命名されたこのバックパックユニットは、ユニット自体に備えられた兵装の違いによって更に2種（a、b装備）へと細分される。

a装備は、ディフェンサーユニット先端部に大量のマイクロ・ミサイルを格納したコンテナが接合されており、近、中距離に展開する広範囲の敵に対し、倒的な打撃を加える。背面部のパワーサプライヤージョイントをサーベルラックとしたハイパー・ビームサーベルは、通常の50%増の高出力ビーム刃を形成し、二振りで複数の敵モビルスーツを破断する。

b装備は、ユニット内に増設したシェネレーターのダイレクト・ドライブによって、両腕部のバインダーに内装するビーム・キャノンをはじめとした各ビーム兵装の稼動効率の強化が図られている。中でもボックス・ウイング両ユニットでは単装で運用されるメガビーム・ランチャーを両側に配置し、通常では不可能であった最大出力のビームを連続発射することが可能となり、中、長距離での攻撃力が大幅に向上している。

近接、中距離に特化した広域拡散型の兵装が主となるa装備と、中、長距離の一点集中型に特化したb装備。この追加兵装に加え、ユニット本体各部に増設されたスラスターがもたらす機動性は、ディフェンサーユニットが基本装備ではないスペシャルなものであると言うことが一見しておわかり頂けるだろう。

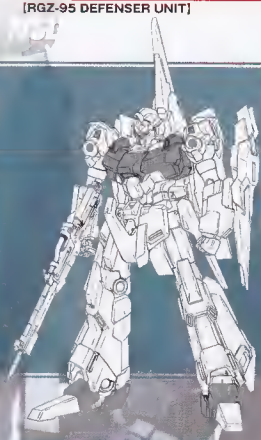
《リゼル》の開発目的に則って生み出された既存のバックパックユニットの性能は、過不足のない良好なものと言えたが、それとは比べものにならない性能向上、武装追加の全ては、ある運用目的を可能とするために与えられた、どれもかけがえのない要素であった。



■CHECK
ハイパー・ビーム・サーベルは宇宙世紀0088年に登場したMSZ-010 ZZガンダムが同名携行兵器を所持しており、a装備開発の際にもその運用データが使用された。ZZガンダムのハイパー・ビーム・サーベルはマウント時に高威力のビーム・キャノン（ダブル・キャノン）としての使用が可能であったが、a装備ではサーベル時におけるエネルギー出力の安定供給を優先したため、ビーム・キャノン機能はオミットされている

RGZ-95C ReZEL COMMANDER TYPE
(DEFENSER a-UNIT)

MS MODE



■CHECK
新兵でも扱える量産型TMSとして調整されたリゼルには、一部エース、熟練パイロット向けに小改修を行った仕様が存在する（RGZ-95C）。結果的に隊長機として運用されるケースが多く、「機動戦士ガンダムUC」においてリディ・マーセナスが一般機であったことに対し、MS隊隊長であるノーム・バシリコックが乗り込んだのはC型である。なお、C型は一般機と比較して形状の差異はなく、認識用のためにセンサー、胸部、脚部のカラーリングが変更されている

■CHECK
メガ・ビーム・ランチャーは、かつてMSZ-006 Zガンダムが運用していたハイパー・メガ・ランチャーのコンセプトを継承した、長距離支援要素を付加するリゼル専用の高出力ビーム兵装である。b装備では2門装備することによって、単純な攻撃力の増加のみならず、それぞれに備わっているターゲットセンサーが連動機能し、より精度の高い射撃・狙撃行動を可能としているのである

RGZ-95 ReZEL
[DEFENSER b-UNIT]



ER a-UNIT]

[DEFENSER b-UNIT]

WAVE RIDER MODE

[Turn-02] ディフェンサー、というユニット

前と後

《リゼル》の開発に当たり、要求された開発目的。それは宇宙空間での戦闘において、その戦術、もしくは戦略拠点に対して迅速な先制攻撃を行う「宙間迎撃用」であった。

そのためには極めて少数の機体で、最小限の燃料の元に効率的な最大火力攻撃を行う必要があり、ディフェンサーユニットを装着する際には、同ユニットを装着した《リゼル》3機によるモビルスーツ個小隊のみでの編成で作戦を実行するのである。

ユニット本体に複数装着されたスラスターは、ボックスユニットとは比較にならない大容量の推力を与えられている。加速された全スラスター推力を一方向に収束するウェイブライダー形態時では特にそれが顕著となり、大幅な高速到達時間の短縮を可能とする。

機体サイドアーマーから展開された"ミールバインダー"は、作戦宙域到達後、前面360度が戦闘となるモビルスーツ形態時での空間戦闘の際、あらゆる方向から即時対応する高次元の運動性能を《リゼル》にもたらす。

前後担当の6装備、使用頻度の少ない3機で振り分けられ、最小限の連携によって目標ポイントへの最大火力攻撃行動を終えた後、迅速に作戦区域から離脱するのである。

手綱

前述したように《リゼル》は本来、宙間の気圧が高まり、新型モビルスーツ開発が困難な時勢の中で、機体を運搬するSLS（サブフライトシステム）的機能を兼ねることによって開発承認を得たMSであったが、ディフェンサーユニットにはボックス、ウイング両ユニットに装着されているSFS用のグリップは存在

WAVE RIDE MO

[DEFENSER a-UNIT]

[DEFENSER b-UNIT]

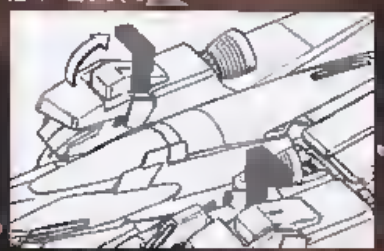
そのためには極めて少数の機体で、最小限の運航の元に運用的な最大火力改修を行う必要があり、ディフェンサーユニットを開発する際には、同ユニットを装備した《リゼル》3機によるモビルスーツ一個小隊のみでの運用で作戦を実行するのである。

ユニット本体に複数装配運されたスラスターは、ボックスユニットとは比較にならない大容量の推力を与えられている。追加された全スラスター推力を一方向に収束するウエイブライダーを形成時では特にそれが顕著となり、大幅な最高速度の獲得を可能とする。

最高サイドアーマーから換装されたテールバインダーは、作動運航時、前後360度が運航となるモビルスーツ形態時での空間戦闘の際、あらゆる方向から即時対応する第次元の機動性能を《リゼル》にもたらす。

最高出力の3割増、最低担当のb装備は小隊3機で振り分けられ、運小隊の運機にようで自機ポイントへの運大火力集中行運を可能とした後、速やかに作戦区域から離脱するのである。

運SFS用グリップ



手綱

前述したように《リゼル》は本来、量産の気運が高まり、新運モビルスーツ開発が盛んな時勢の中で、機体を運搬するSFS（サブ・フライト・システム）的運用を兼ねることによって開発承認を得たTMSであったが、ディフェンサーユニットにはボックス・ウイング両ユニットに設定されているSFS用のグリップは存在していない。

モビルスーツ一個小隊での運用に運定されたバックパックユニットには、SFS的運用は不必要であると開発側に判断されたためではあるが、本ユニットを装備した《リゼル》をSユニットの仕様と比べれば、その差は運にも歴然と現れ、野生の馬を連想させる。

その寒さと運さは、高外な局面で最運されることとなった、決められた運命に抗うように、本機は「闘んだ」のである。

next [Conclusion]



■CHECK

[右]ノーム・バシリコック少佐
ネェル・アーガマに所属するモビルスーツ部隊の隊長。部下思いの人格者であり、その信頼も厚い。コードネームはロメオ001（ワン）

[左]リディ・マーセナス少尉
ネェル・アーガマに所属するモビルスーツ隊のパイロット。政治家一族マーセナス家の嫡男だが、家の束縛を嫌い、軍に身を置く。コードネーム、ロメオ008（エイト）



RGZ-95C
[DEFENSER a-UNIT]
SPEC
頭頂高:20.5m
本体重量:28.3t
全備重量:65.1t
ジェネレーター出力:2320kw
スラスター総推力:91600kg
センサー有効半径:14920m
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:
ビーム・サーベル
ロング・ビーム・サーベル
ハイパー・ビーム・サーベル
ビーム・ライフル
マイクロミサイル
グレネード・ランチャー
60mmバルカン砲
ビーム・キャノン（シールド）
シールド

[Conclusion]

脅威への抵抗

宇宙世紀0096年、地球連邦軍の独立機動艦隊ロンド・ベルに所属する強襲揚陸艦ネェル・アーガマは、『袖付き』と仇名されたネオ・ジオン残党軍の首魁、フル・フロンタルが駆る専用機であるMSZ-006S（ノナンシュ）と交戦。

その際にディフェンサーaユニットに換装した《リゼル》2機と、ディフェンサーbユニットに換装した《リゼル》1機が、RGM-89S《スタークジェガン》の一部除装仕様機1機と共に出撃した戦闘記録が存在する。

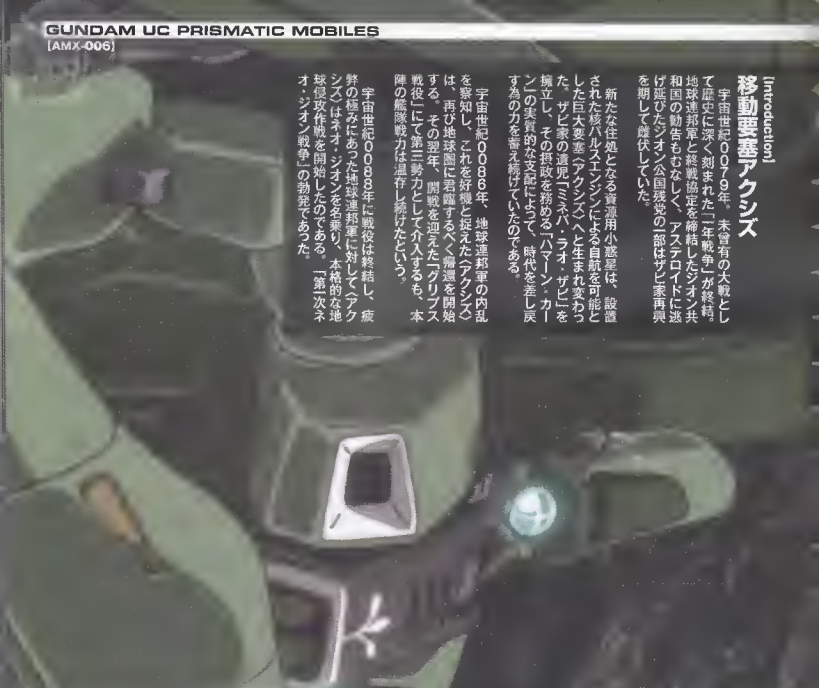


RGZ-95
[DEFENSER b-UNIT]
SPEC
頭頂高:20.5m
本体重量:29.2t
全備重量:68.3t
ジェネレーター出力:2320kw
スラスター総推力:91600kg
センサー有効半径:14920m
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:
ビーム・サーベル
メガ・ビーム・ランチャー
メガ粒子砲
グレネード・ランチャー
60mmバルカン砲
ビーム・キャノン（シールド）
シールド

本来、1個小隊で運用されるべき本ユニットが、さらに僚機を携え、運用目的とも異なる単独機への迎撃に使用されたということは極めて珍しい状況であったが迎撃すべき存在が、いわゆる重要拠点に比類する価値、脅威があったとすれば、その出撃理由も納得できよう。

詳細な戦闘内容は『ハンテンネ』と銘打たれた戦闘記録を参照していただければ幸いである。運命を変えるべく全身全霊を捧げ戦う《リゼル》そしてそれを操る彼らの勇姿を、その目に焼き付けて欲しいと強く願う。

...next [GUNDAM UC BANDE DESSINEE 帰い彗星 Act.4]



[Introduction]

移動要塞アクシズ

宇宙世紀0079年、未曾有の大戦として歴史に深く刻まれた「一年戦争」が終結、地球連邦軍と終戦協定を締結したジオン共和国の勤告もむなしく、アステロイドに逃げ延びたジオン公国残党の一部はザビ家再興を期して雌伏していた。

新たな住処となる資源用小惑星は、設置された核パルスエンジンによる自航を可能とした巨大要塞（アクシズ）へと生まれ変わった。ザビ家の遺児「ミネバ・ラオ・ザビ」を擁立し、その摂政を務める「ハマーン・カーン」の実質的な支配によって、時代を差し戻すあの力を蓄え続けていたのである。

宇宙世紀0086年、地球連邦軍の内乱を察知し、これを好機と捉えた（アクシズ）は、再び地球圏に君臨するべく（隕石）を開始する。その翌年、「関戦を迎えた」グリプス戦役」にて第三勢力として介入するも、本陣の艦隊戦力は温存し続けたという。

宇宙世紀0088年に戦役は終結し、疲弊の極みにあった地球連邦軍に対して（アクシズ）はネオ・ジオンを名乗り、本格的な地球侵攻作戦を開始したのである。「第二次ネオ・ジオン戦争」の勃発であった。

[Development]

アクシズの先兵

モビルスーツの配備数を早急に整える必要のあった（アクシズ）のネオ・ジオンでは、まず量産性に主眼をおいた機体の開発が進められた。また、自軍の生産力のみに頼らず、他勢力の機体、技術をも貪欲に自軍戦力として活用したことによって、残党組織ながら正規軍に匹敵する軍事力を誇ったという。

地球連邦軍の内紛を契機に優勢を保ったネオ・ジオンは、皮肉にも自軍の内紛による混乱の下に半ば自滅的な敗北を喫することとなる。地球連邦政府の管理下に置かれた「アクシズ」は新たなネオ・ジオンによる「第二次ネオ・ジオン戦争」において、地球に終末を与える「手段」として使用されたが、地球連邦軍所属のロンド・ベル隊によってこれを阻止される。（アクシズ）がもたらした長きにわたる戦乱は、（アクシズ）の破壊と共に終息を見た。

宇宙世紀0096年、守るべき場所を失ったその審人達は、ジオンの名の下に次なる住処（パラオ）を与えられ、世界に知られることなく守り続けていた。そこには（アクシズ）によって生み出された独自の系譜を持つMS（可変モビルスーツ）もまた、変わることなく存在していた――「袖」に彩られてはいたのだが。

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume003_AMX-006

...next[Turn]

袖付きガザD、という機体

ガザの系譜

宇宙世紀0088年における〈アクシズ〉に配備されていたモビルスーツを総じて「ガザ・シリーズ」はその代名詞と言っても過言ではない。

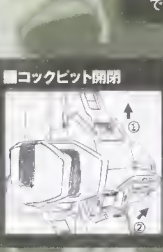
〈アクシズ〉の改造に着手する際に開発された作業用モビルスーツ《ガザA》と《ガザB》の2機を経て、それらの生産設備を流用した初の戦闘用TMS《ガザC》が完成する。

戦闘行動を想定しない作業用モビルスーツの発展型にもかかわらず、量産性のみを最優先した急造TMSは機体耐久性が極めて劣悪な物となり、敵軍の技術者が捕獲した《ガザC》を調査した結果「3回戦闘すれば空中分解する」と皮肉を言われる程であった。

だが、あくまで《ガザC》を場つなぎのTMSと規定していたネオ・ジオンは、並行して後継機の開発を進めていたのである。グリプス戦役に投入された《ガザC》の運用記録は、開発用データとしてリアルタイムに後継試作機へフィードバックされ、実戦こそ最良のテスト、と言わんばかりの開発体制が敷かれた。

こうして完成した《ガザD》は総合的な性能向上を果たし、「ガザ・シリーズ」はようやく戦闘兵器としてのスタートラインに立ったのである。

■コックピット開閉

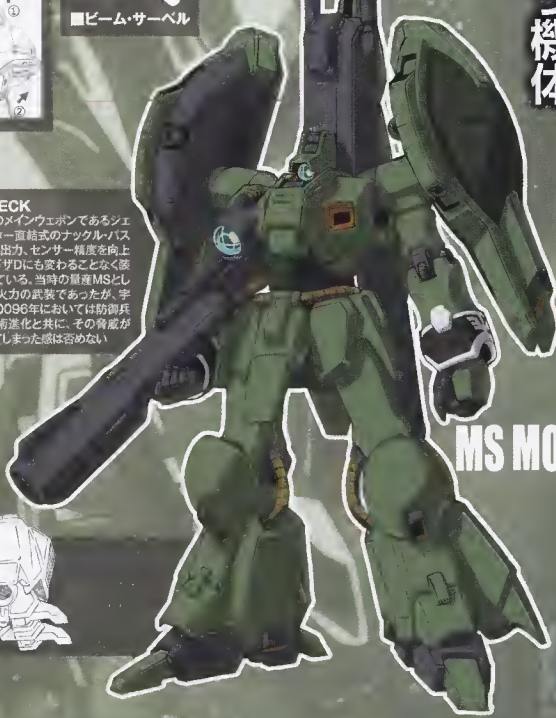


■ビーム・サーベル



■CHECK

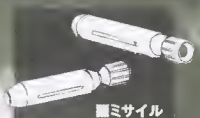
ガザCのメインウェポンであるシェネレーター直結式のナックル・バスターは、出力、センサー精度を向上させ、ガザDにも変わることなく装備されている。当時の量産MSとしては高火力の武装であったが、宇宙世紀0096年においては防御兵装の技術進化と共に、その脅威が薄まってしまった感は否めない



MS MODE

■足裏





■ミサイル

■CHECK
ガザCと同様の変形パターンを持つガザDのMA形態は、両椀に脚部が格闘用兵装のクローとして使用される。機体構造の脆弱さを克服したことによりその破壊力も増し、あらゆる装甲を圧潰するのだ。

MA MODE

刻がもたらした「利点」

作業用モビルスーツを基礎設計としたことにより、その範疇での機体追従性をも受け継いでしまった《ガザC》は、砲撃による集団戦術を想定した、いわゆる数で戦う機体であった。いかに手練れであってもその操縦技術を《ガザC》では示すことが出来ず、グリプス戦役では貴重な人材が散っていったという。

そういう意味では打てば響く機体追従性を獲得した《ガザD》は、パイロット次第で一個小隊でも十分に戦力計算が可能であり、第二次ネオ・ジオン戦争におけるネオ・ジオン側の主力量産機として多数が生産、戦線に投入された。

宇宙世紀0096年。これらの残存機体は濃緑色のジオンカラーへと機体色が変わりながら、"袖付き"と仇名されたネオ・ジオン残党軍の拠点「バラオ」でも同様にその姿を見ることが出来る。量産機であることにその意義があった《ガザ・シリーズ》は、この時代において既に旧式感は拭えなかった。

だが、先の大戦において備蓄されていた大量の予備パーツを"袖付き"が有していたことにより、時代が変わってもなお、「定数の《ガザ・シリーズ》を当時の供給レベルのままで運用することが可能だった」のである。これは各所軍備の縮小残党組織にとって重要な利点となり、TMSとしても一定の性能を誇った《ガザD》は、ある意味主力量産機以上に重宝されていたというよう。

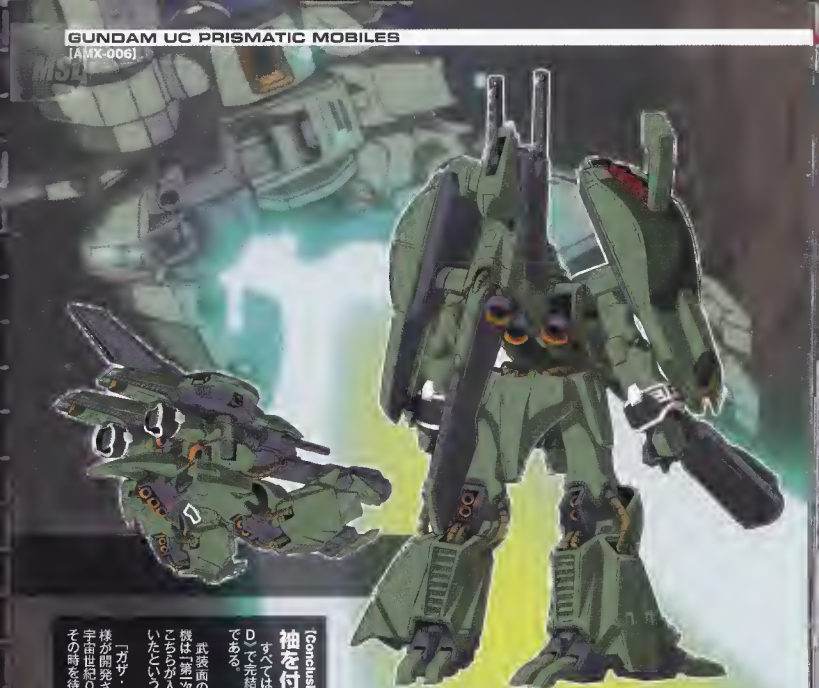


AMX-003 GAZA C (THE SLEEVES)

SPEC
頭頂高18.3m
本体重量40.8t
全備重量72.5t
ジェネレーター出力1720kw
スラスター総推力79200kg
センサー有効半径10600m
装甲材質ガンダリウム合金

■CHECK
ガザDの前身となった本機はバラオにおいても残存機体が変わらず配備されている。ただしMSとしての戦力は期待されていないようで、バラオ港湾部付近の地表に設置されたデブリ迎撃用ミサイルランチャーと連携し、移動砲台代わりに配備されているのが実情のようだ。

...next [Conclusion]



AMX-006 GAZA D (THE SLEEVES)



SPEC
頭頂高(MS):17.0m
全長(MA):16.1m
本体重量:28.7t
全備重量:68.4t
ジェネレーター出力:2140kw
スラスター総推力:98200kg
センサー有効半径:10800m
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ビーム・サーベル
ナックル・バスター
ビーム・ガン
(MA)メガ粒子砲
ミサイル・ランチャー

[Conclusion]
神を付けた後継機

すべては作業用モビルスーツから始まった「ガザ・シリーズ」。その系譜は《ガザD》で完結した訳ではない。その後継機もまた、並行して開発が行われていたのである。

武装面の強化をメインに、変形システムの再設計が図られた《ガザD》の後継機は「第二次ネオ・ジオン戦争」の中期に登場し、戦争終結まで活躍したとされる。こちらが入手した記録では、現時点においてその後継機が《バラオ》で配備されていたという事実は確認できていないが、まず存在したとして間違いはないだろう。

「ガザ・シリーズ」の究極点と評され、ウェポンユニットの換装により様々な仕様が開発されたといわれるTMS。当分先の話ではあるが、一体どのような姿で宇宙世紀0096年の戦場を彩るのか。まずは先人達の記録を再び紐解きながら、その時を待つことにしたい。

...next [GUNDAM UC episode 3 "The Ghost Laplace"]

■百式のバリエーション機(一部)



MSR-00100
■百式改
文字通り百式の改良型。フレームを量産向けに改良を施して生産性を高めつつ、センサー機能の向上、肩部にはウェポンマウントが増設され、総合的な性能強化が図られている

MSK-00100S
■陸戦用百式改
百式改の陸戦仕[illegible]気圏内用に再[illegible]され、各所に防塵[illegible]処理が施されており、沼地や砂漠のみならず[illegible]時ならば水中[illegible]良能を発揮した

FA-00100S
■フルアーマー百式
百式改に増加装甲をさせた仕様機。折[illegible]トをはじめとする内[illegible]差の他にもロング・バスターと呼ばれる大型携行ビーム[illegible]的火力を誇る超攻撃機

[Introduction]

百式、という機体

かつて「α(アルタ)」のギリシャ文字が冠されたガンダムが生まれようとしていた。

その機体は自らの翼を広げ、大空を自由に飛ぶ力が与えられるはずだった。だが、その時代では実現不可能な技術を求められた機体は違う姿と名前を与えられ、ある意味"不完全な形で世に出ることとなった——

技術者から「百年保つモビルスーツ」との願いを込めて命名された機体、MSN-00100《百式》。TMS(Transfor Die Mobile Suit=可変モビルスーツ)の流れを[illegible]て、非変形型の機体として[illegible]高性能機である。



MSN-00100 SPEC
頭頂高:18.5m
本体重量:31.5t
全備重量:54.5t
ジェネレーター出力:1850kw
スラスター総推力:74800kg
センサー有効半径:11200m
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ビーム・サーベル
ビーム・ライフル
グレイ・バズーカ
メガ・バズーカ ランチャー
バルカン砲

「Revoltech」δの鼓動、再び

高機動戦闘用モビルスーツとして多大なる戦果を残した《百式》は、その後も同計画の進化とはならずに、基本設計を踏襲した《MSR-00100 百式改》をはじめとするバリエーション機が複数開発され、モビルスーツ史に深く刻まれる名機となった。

アニメ第1話『UC0096 ラプラスの天使』をもう1つの到達点としてもなお、量産型MSをはじめとする戦場のアプローチをもって、同系統の生産モデルの開発は継続されることとなる。

その次に、本来《百式》が目指していたTMS、MSZ-001《ディルタガンダム》の開発プランを基に、既存7系モビルスーツの技術を再投入したことによって、改めて完成を見たTMSがあった。

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
フリズマティック・モビルズ
volume004 MSN-001A1

【TURN-01】

デルタプラス、という機体

δの具現

宇宙世紀0090年、地球連邦軍からの委託を受け、AE(アナハイム・エレクトロニクス)社が開発した試作MS、それがRGZ-001A1〈デルタプラス〉である。

単機で大気圏内外の運用が可能な万能攻撃機として開発が進められた本機は、〈百式〉の運用データを活用し、問題点などを洗い直した上でフィードバックされている。

さらには各部門において独自規格による挑戦的な設計が行われており、単純に変形機構が備えられたアップデート版〈百式〉という表現だけでは留まらず、もはや技術試験機の様相を呈していたという。

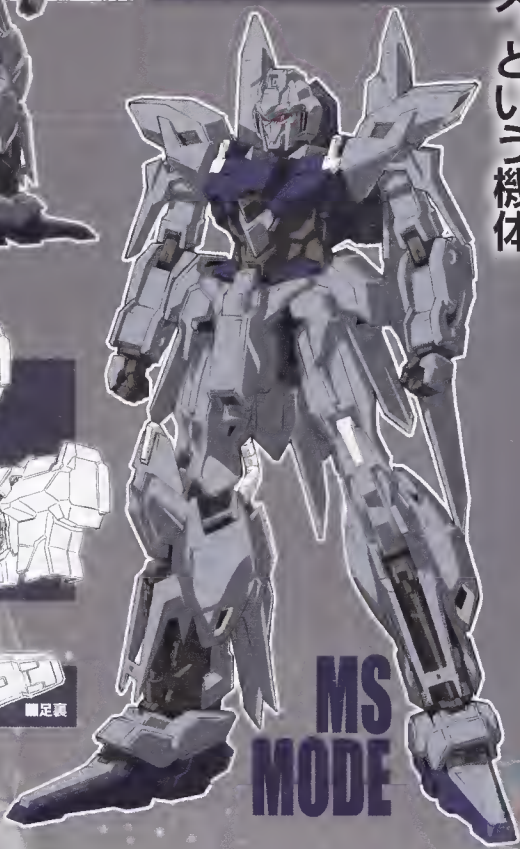




■コックピット
ハッチ開閉

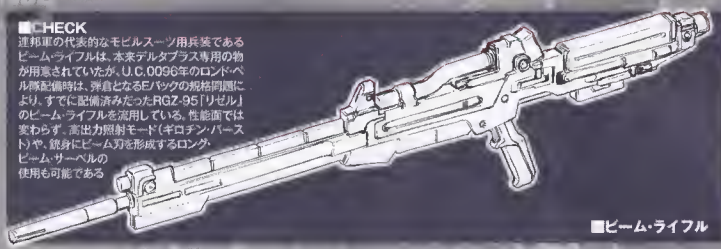


■足裏



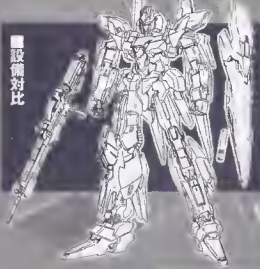
MS MODE

■CHECK
連邦軍の代表的なモビルスーツ用兵装であるビーム・ライフルは、本来デルタプラス専用の物が用意されていたが、U.C.0096年のロンド・ベル隊配備時は、弾倉となるEパックの規格問題により、すでに配備済みだったRGZ-95「リゼル」のビーム・ライフルを流用している。性能面では変わらず、高出力照射モード(ギロチン・バースト)や、銃身にビーム刃を形成するロング・ビーム・サーベルの使用も可能である

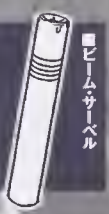


■ビーム・ライフル

■設備対比



■ビーム・サーベル



■ビーム・サーベル展開状態



■シールド



■CHECK
本機のシールドは、防御兵装と言うよりも複合型変形用サブユニットの意味合いが強く、ウェイブライダー形態時のセンサーや、多数の内装兵器を備えている。先端部分には固定式のビーム・キャノンが一門、複数種の弾頭に対応した2連装グレネード・ランチャーとビーム・サーベルが収納されている。サーベルに内蔵されている発振器は照射角可変機構を採用しており、シールド収納状態時はビーム・ガンとして、又は直接二本のビーム刃を発振させることも可能



【裏面】



【表面】

[Turn-02]

デルタプラス、という機体

ウェイブライダー

宇宙世紀0087年、モビルスーツ史において戦略、戦術上大きな意味を持つ「宇宙空間から重力下までの連続運用」という究極の汎用性を叶える革新的技術が誕生した。

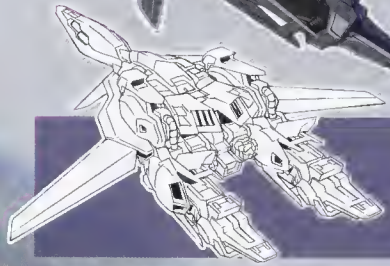
大気圏再突入という文字通り巨大な壁を越えるため、人型からそれに即した形態に変形することによって、専用装備を必要としない標準兵装での再突入を可能とした形態、それがウェイブライダーである。

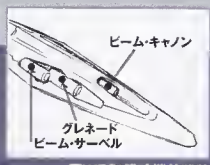
《Zガンダム》で初めて備わったこの機能は、同様の道筋を目指していた《デルタプラス》の可変形態としても実装された。

本機のウェイブライダー形態時では携行火器が機体下部にマウントされ、機首ユニットに内装されたビーム・キャノンを主とする各種兵装と共に、モビルスーツ形態時となんら変わらぬ火力を維持している。

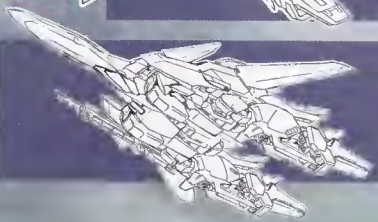
更に背面のプレキシブルバインダーが可変翼として機能することにより、航宙、航空を問わぬ圧倒的な空戦能力が付加されているのである。







■WR形態時機首武装



■WR形態時ライフル位置

MSN-04-1A1



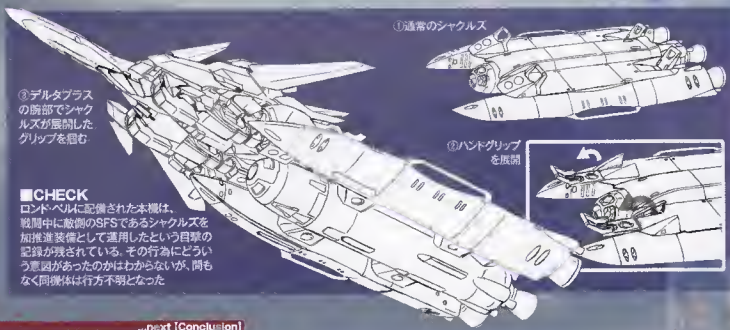
■変形シークエンス

■CHECK

胸部、脚部と呼ばれるべき箇所が、機械的に形を変え、新たな役割を持つ。やがてそのシルエットは、かつて人型であったことを完全に忘れた新たな形態となる。本機は完全な姿で世に出ることが叶わなかった不遇のTMSの機体設計を基本としており、変形パターンもほぼ変わることなく踏襲されている。腰部モジュールが無駄なく体内に納められ、脚部モジュールは爆発的な直線機動を生み出すメインスラスターへと切り替わり、背面部に備えられたフレキシブルバインダーは空力性能に優れた可変翼へと変化する。このシークエンスは、全身を構成するムーバブル・フレーム部材の進歩と、Zガンダムをはじめとする既存Z系TMSの実戦運用から得られた可変機構データの蓄積が溶け合うことにより、「技術の壁」という名の呪いに縛られていた百式のメカニズムは全て解放され、その姿と機構を受け継いだデルタプラスは極めて瞬間的かつ滑らかな変形駆動を得たのである



WAVE RIDER MODE



■CHECK

ロンド・ベルに配備された本機は、戦闘中に敵側のSFSであるシャクルズを加速推進装備として運用したという目撃の記録が残されている。その行為にどういう意図があったのかはわからないが、間もなく同機体は行方不明となった

...next [Conclusion]

[Conclusion] δプラン

《デルタガンダム》が目指した全領域型MSという運用概念は、時を経て《デルタプラス》として具現化した。それを可能としたのは、過去のZ系MSが確立させた数々の技術であった。

その中には《デルタガンダム》設計時には想定されていなかった、また全領域型MSに必要とされないであろう「ある」技術も含まれていた。

パイロットの脳波制御によって操縦系のサポートを行い、機体の追従性能を高める効果を与える革新的技術。簡易サイコミュ装置「バイオセンサー」である。

だが、過去に本装置を搭載した機体の運用記録によれば、「ニュータイプと呼ばれる特殊なパイロットが運用することによってのみ効果を示したとあり、その効果も非科学的かつ再検証不可能な記録しか残されていない。

改良が重ねられたとはいえ、結果的に通常のパイロットでは実効性が低く、技術的見地からして明らかに「確立されていない」ものであった。

ただでさえネオ・ジオンと比較しサイコミュ技術に優れを取っていた当時の連邦軍が、本装置の採用指示をどのような意図を持ってAE社に発注していたのか現時点において定かではないが、復活したδプランの全容にその香えが隠されているのかもしれない。

本機は少数を生産し、その内の一機は宇宙世紀0096年、地球連邦宇宙軍の独立機動艦隊ロンド・ベルに補充機体として配備された記録が残っている。配備当時の主力量産機とは一切の互換性を持たない規格外の機体ではあったが、その性能もまた規格外の高さを示したという。

「δ」の名は《デルタプラス》の完成をもって始めた。そして「δ」の名はこれを突破として、新たな道筋を示していく。そう、本来の力を取り戻した翼は「δ」の名の下に、誰にも想像が付かない進化を遂げていくのである。

■CHECK
本機のコックピット・シートは連邦モビルスーツに準じた最新規格が与えられてはいるが、そのレイアウトはU.C.0086年頃のものを採用しており、本機の設計がデルタガンダムを元に行われていることがよくわかる外観となっている。

■ヘッド・ユニット

MSN-001A1 DELTA PLUS

SPEC
頭頂高:19.6m
本体重量:27.2t
全備重量:60.8t
ジェネレーター出力:2360kw
スラスター総推力:92400kg
センサー有効半径:16200m
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ビーム・サーベル
ビーム・ライフル
グレネード・ランチャー
60mmバルカン砲
ビーム・キャノン
シールド

迎撃用ミサイル・ランチャー



■CHECK

バラオ表層の各所に設置された迎撃用ミサイルランチャーは、対艦ミサイルクラスの破壊力を持った大型ミサイルを計16基格納する。主に隕石デブリなどの処理目的に使用されているが、緊急時にはMSが携行兵器として使用できるよう、MS用グリップが備わっているのが大きな特徴だ。

[Introduction]

バラオの目

ネオ・ジオン残党軍の本拠地〈バラオ〉。資源衛星を基地化した全長二十数キロに及ぶ岩塊の集合体は、広大な宇宙からすれば塵のようにしか過ぎず、連邦による残党の摘発が強化された中にあってもその存在を隠し続けてきた。

居住ブロックが埋め込まれた三角錐状の岩塊「カリクス」に、不揃いな形状の岩塊「カロー」が三個、複数の連結シャフトで繋ぎ合わせた〈バラオ〉の構造。

岩肌を埋め尽くす無数のスペースゲートが密集する周辺には監視施設が設けられており、外敵を察知するため休むことなく稼動している。



■CHECK

レーダーを阻害するミノフスキー効果を考慮し、通常のレーダーシステムを補助するモノアイ式の光学センサーが導入されている。巨大な単眼が動く様は、この〈バラオ〉レーダータワーがジオン製であることにもしんら異論を挟めぬ威厳力を与える。

[Development]

旧き技術

全長20mの〈モビルスーツ〉と比較しても一回りは大きいミサイルランチャーが設置された監視施設の中心部には、それらよりはるかに巨大な塔、レーダータワーが屹立している。

共に〈バラオ〉で運用するための新規開発が行われた防衛設備ではあるのだが、その設計にはジオンの旧式技術がほぼそのまま転用されており、重要拠点に配備されるには幾分の性能不足と評されるレベルだったという。

この事実は拠点防衛用設備に重点をおけないほど困窮していたネオ・ジオン残党軍の実情を垣間見ることが出来るのだが、それは〈バラオ〉の周辺宙域に配備された偵察任務用モビルスーツも同様であった。



...next[Turn]

[Turn] 袖付きドラッツェ、という機体





■袖（左腕のみ）

■CHECK
MSの機体色としては比較的珍しい部類に入る「桃」と「紫」の組み合わせを持ち、その異彩をさらに際立たせている。これはガザCの初期機体色と同一だが、『袖付き』配備時のガザCが「緑」に再塗装されたにもかかわらず、本機で採用した理由については、哨戒任務時の機体認識、或いは一部の整備兵による熱烈な要望によるものなど諸説存在する。

宇宙を泳ぐ

宇宙世紀0083年に地球連邦軍へ宣戦（デラーズ紛争）を布告したジオン公国軍残党勢力、デラーズ・フリートが独自に開発したモビルスーツは、その経緯、そして外見共に極めて異端と表現せざるを得ないものであった。後期生産型（ver.2）とはいえ、当時ですら旧式の感が拭えなかったジオン公国軍の主力量産機《ザクII》と、同様に一年戦争時に運用された戦闘爆撃機《ガトル》を組み合わせた簡易モビルスーツ、それが《ドラッツェ》である。

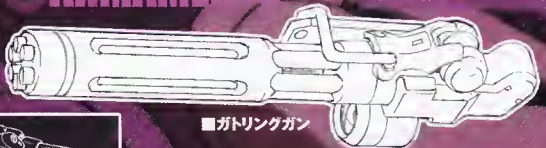
通常のモビルスーツでは足にあたる部分が長尺のスラスターユニットへ変更されており、両脚部に関節部分を有さないヒレが生えたような珍しい外観を持つ。その結果、可動肢が生み出す反作用を姿勢制御に利用するAMBAC効率は大幅に低減しており、機体運動性に問題を抱えたものの、一方向に収束された推力は爆発的な加速性能を獲得し、むしろモビルアーマーに近い（撃墜説型の兵器となった。通常の機体に慣れたパイロットにとっては癖のあるモビルスーツではあったが、戦力に乏しかった当時のデラーズ・フリートでは貴重な機体であり、哨戒・偵察及び攪乱任務で効果的に運用されたという。

流用パーツによる錯綜な生産方式を採用した本機は配備数もごく少数であり、デラーズ紛争においてその姿が大きく失われた。僅かな残存機体は《アクシズ》のネオ・ジオンへと渡り、連邦から接収した偵察用機体《アイザック》と共に配備され、その連携は宇宙世紀0096年でのネオ・ジオン残党軍にあっても変わることなく、拠点《バラオ》の双眼として機能していたのである。

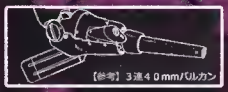
ARMAMENTS



■CHECK
「袖付き」で運用されるにあたって、3連40mmバルカンに代わり新たに備えられた右腕部の実体弾連射式兵装。攻撃力の強化というより本体連動型のセンサーシステムを追加した「哨戒偵察任務に適するセンサーユニット」の意味合いが極めて強い。開発にはアクシズで培われた技術が多数投入されており、センサー部分は当時の主力MSであったガザシリーズのシステムを流用発展し、起動時は大幅なセンサー有効半径数値の向上を可能とする

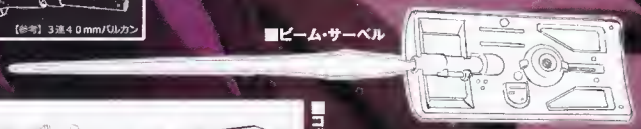


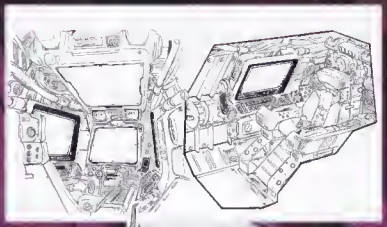
■ガトリングガン



【参考】3連40mmバルカン

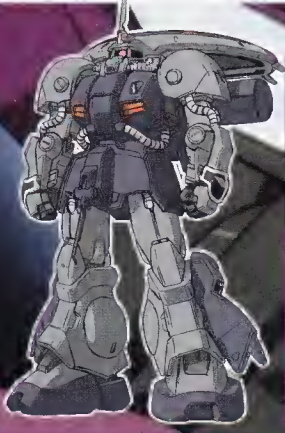
■ビーム・サーベル





■コックピット

■CHECK
コックピットブロックは旧式のままで使用されてはいるが、老朽化による電子機器の更新などは定期的に行われており、複雑な全天周モニターと比較して優れた耐久安定性を維持する



RMS-119 EWAC ZAKU
(THE SLEEVES)

SPEC
頭頂高:19.2m
本体重量:41.6t
全備重量:73.5t
ジェネレーター出力:1430kw
スラスター総推力:64800kg
センサー有効半径:26000m
装甲材質:チタン合金セラミック複合材

■CHECK
地球連邦軍が開発したハイザックをベースに、偵察用MSとして改造し、電子戦に特化した機体。アクシズのネオ・ジオンによるダカール侵攻の際に入手し、残党軍の「袖付き」でも同様に配備されている。ジオンの名機ザクの単部を与えられた連邦製の機体は、ネオ・ジオンの技術によって本来あるべき所に帰ったとも表現できる。パラすでも変わることなくドラッツと連携して哨戒偵察任務に就くアイザックの姿はネオ・ジオン残党軍「袖付き」の機体として完全なる調和を見せるのだ

...next [Conclusion]

MS-21C



■バックパック、右腕、右足省略



■右腕、右羽省略

■CHECK

宇宙世紀0079年に運用された宙間戦闘爆撃機ガトル。その機体を流用したバックパックは破格の直線機動を生み出す。構造は至ってシンプルであり、専用部品を必要としないメンテナンスが可能であったとされる。劣化の激しい推進機関の整備性が簡便だったからこそ、本機はこの時代まで現役で使用できたと言えるだろう

[Conclusion] 片袖の役目

本機が待望としたた突撃戦法は、見方を変えれば特攻に近しい物と表現できた。先の戦いでの損耗理由からこれを憂慮したネオ・ジオン残党軍は、本機の任務を〈バラオ〉周辺宙域での哨戒・偵察行動に限定し、それに準じたセンサー性能の強化を施した上で配備を行ったという。

旧式機格による予備パーツの調達が極めて難しい状況にあった〈ドラッツェ〉は、奇しくも同軍の最新型モビルスーツ〈クシャトリヤ〉と同様、ワンオフ機に近しい扱いを受けていたのである。

日進月歩のモビルスーツ開発史にあって、制式採用された宇宙世紀0083年頃から優に10年を超す活躍を見せる〈ドラッツェ〉。それを可能としたのは、かつて本機を保有してきたジオンを source する組織による、適切なメンテナンスと改修がもたらした結果であったことは間違いのない事実であろう。

左前腕部に一袖が巻かれ、新たな機体色をまとった本機の姿は、最新機体と変わらぬ驚愕を受けている証なのだ。〈ドラッツェ〉はそれに応え、この先も形ある限り、与えられた力を示し続けていく。



MS-21C DRA-C [THE SLEEVES]

SPEC

頭頂高:29.8m
本体重量:23.9t
全備重量:49.0t
ジェネレーター出力:596Kw
スラスター総推力:117500Kg
センサー有効半径:10900m
(システム起動時)18800m
装甲材質:超鋼スチール合金
武装:ビーム・サーベル
ガトリングガン
シールド





RGM-89D　ジェガン(D型)

宇宙世紀0090年代初頭より連邦軍で運用されている主力量産機のマイナーチェンジ版。地球連邦軍のジム系MSのノウハウと、AE社の優れた開発技術が融合した傑作機であり、D型とも呼称される本機はオプションパーツの換装機能に特化している

頭頂高:19.0m
本体重量:21.3t
全備重量:47.3t
ジェネレーター出力:1870kw
スラスター総推力:62000kg
センサー有効半径:16800m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材





RGM-89S　スタークジェガン

D型ジェガンの換装バリエーション機体の一つ。増加装甲とスラスターの追加によって総体的な性能向上が図られているほか、ジムⅢの運用思想を引き継ぎ、両肩にバージ可能なミサイル・ランチャー・ユニットを装備している

頭頂高:19.2m
本体重量:28.4t
全備重量:68.1t
ジェネレーター出力:1870kw
スラスター総推力:76600kg
センサー有効半径:16800m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材





RGM-89De　ジェガン(エコーズ仕様機)

エコーズの特殊任務において、MSとの直接戦闘が想定される際に用意されたD型ジェガンの特別仕様機。追加センサーと胸部増加装甲により、サバイバビリティが高められている

頭頂高:19.0m
本体重量:22.8t
全備重量:49.5t
ジェネレーター出力:1870kw
スラスター総推力:62000kg
センサー有効半径:20160m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材

episode 4

「重力の井戸の底で」

2011年11月12日～



[Introduction]

計画の中核

「第二次ネオ・ジオン戦争」以後、地球連邦宇宙軍再編の一環として進められていた「UC計画」その「中核」としてアナハイム・エレクトロニクス(AE)社が極秘裏に開発していた試作モビルスーツ、RX-0(ユニコーンガンダム)は、一般性ゼロのモビルスーツの撃破を目的とした機体であった。

圧倒的な機体性能の向上をもたらせる、5分の稼動限界時間をもつNT-Dシステム、そして絶大な攻撃力を持ちながら、カートリッジ装弾数が5発のみというビーム・マグナムの仕様を見ても、決して継戦能力が高い機体とは世辞にも評価できず、(ユニコーンガンダム)は「対一での制圧」の最大戦力を行使する設計がなされていたのである。

確実な目的達成のために重要となった要素、それをサポートする機体が必要となるのは自明の理であり、同計画の「要」となる支援用モビルスーツの開発も進められていたのだ。

▼RGM-89D(ジェガン(D型))

▼RGM-89De(ジェガン(ECOーズ仕様))

▼RGM-89S(スタークジェガン)

▼RGM-89C(ジェガン(C型))

■ジェガンのバリエーション(1/48)

[Development]

要(かなめ)の選定

(ユニコーンガンダム)支援用モビルスーツの開発にあたり、ベースとなる基礎技術は生産性、そして拡張性の高いスタンダード(標準的)な量産機体が求められたという。

この年代において該当する機体は当時の連邦軍主力量産モビルスーツ、RGM-89(ジェガン)以外には考えられず、オプションパーツによって様々な仕様機が存在する(ジェガン)の運用データは支援機の開発に極めて効果的に作用したとされる。

そうして宇宙世紀0096年に完成した支援機体は、当初の予定通り(ユニコーンガンダム)に追随し、あらゆる局面において完璧な支援行動を可能とする「スペシャル・スタンダード」なモビルスーツとなった。

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume006_RGM-96X

[Turn-01]

ジェスタ、という機体

恵まれた体躯

RGM-96Xの型式番号を与えられた本機は、細身が身上のジェガン系機体とは思えぬマッシブなスタイルを形成しており、肩や脚部に配された重厚な装甲は見た目通りの堅牢さを誇っている。

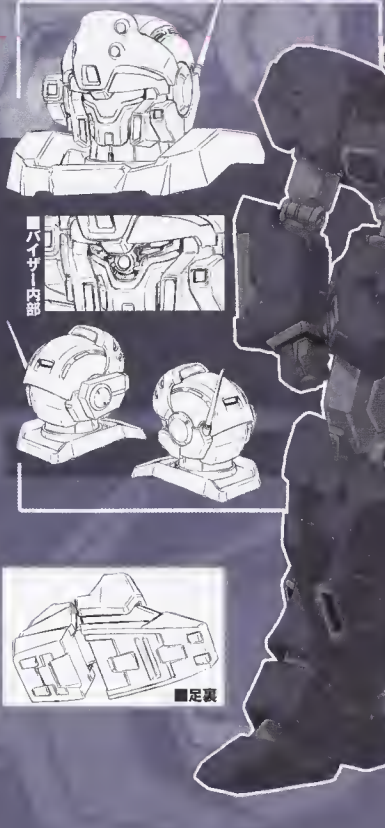
一般兵士と言うより専用装備に包まれた特殊部隊の『員』を想起させるその体躯は《ジェガン》に比べて一見鈍重な印象を受けるが、発生した増加重量を容易にうち消す推力機関と機動性によって、実際の特殊部隊のように一般兵士の先をゆく合理的且つ迅速な行動を体現する。

専用開発された本機の携行火器は、破壊力よりも手数を重視しており、加速／偏向装置による連射バースト機能が特徴的なアサルトカービンタイプが採用された。

ビーム・サーベルに関しても機構の耐久力、エネルギー効率に重点がおかれ、従来の同兵器より出力は多少劣るものの、極めて長時間の使用が可能となった。



■武装対比



RGM-96X FRONT VIEW

■バイザー内部

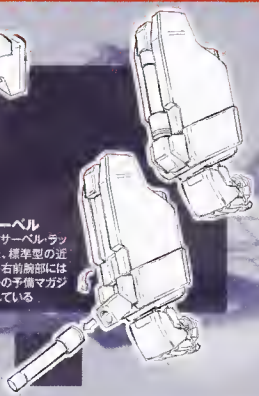
■足裏

■専用ビーム・ライフル

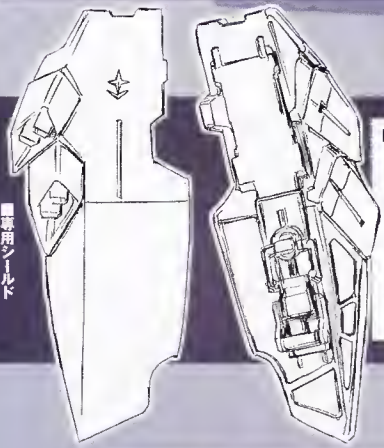


■CHECK
宇宙世紀0096年における連邦軍側のMSが使用する携行火器は、容量の違いはあれど、基本的にマガジンコネクターの規格統一が図られている。ジェスタも例外ではなく、ジェガンやリゼルと共通規格のマガジンを使用する。

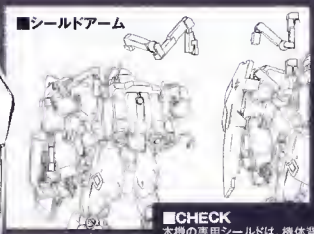
■ビーム・サーベル
機体左前腕部のサーベル・ラックに収納された、標準型の近接用装備。なお、右前腕部にはビーム・ライフルの予備マガジンがマウントされている。



■専用シールド

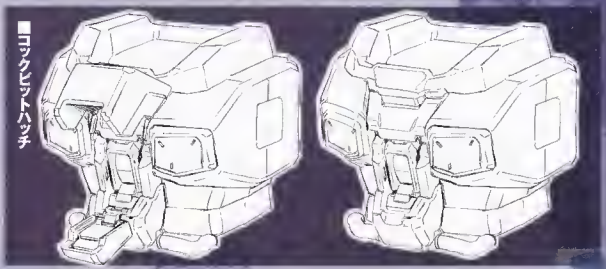


■シールドアーム



■CHECK
本機の専用シールドは、機体背面部のバックパックにアームユニットを介して接続される珍しい機構を持つ。側面部にはジェガンのシールドにも設定される連装ミサイルランチャーと同等の補助内装兵器が組み込まれている。

■コックピットハッチ



[Turn-02]

ジェスタ、という機体

特別な標準

代表的な連邦系モビルスーツの武装であり、無論《ジェスタ》にも標準装備されたビーム・ライフル、ビーム・サーベルという種がどのような仕様で設計が行われたことに関しては、本機が《ユニコーンガンダム》をサポートする機体である何よりの証左といえた。

作戦域に不特定多数存在する通常敵戦力の制圧を複数の《ジェスタ》が速やかに行うことによって、はじめて《ユニコーンガンダム》は最小限の消耗で敵の中核戦力と直接対峙することが出来る。

つまり連邦軍による「ユータイプ狩りの舞台を整える露払い的な役割を持った本機は、あらゆる戦況に対応可能な運用を求められながらも、不特定多数の敵戦力に対して「確実にかわし、当てる」技量を示せるパイロットの操縦を前提とした機体となった。

UC計画が《ジェスタ》へ要求した標準は、あくまでも「特別な標準スペシャル・スタンダード」だったのである。

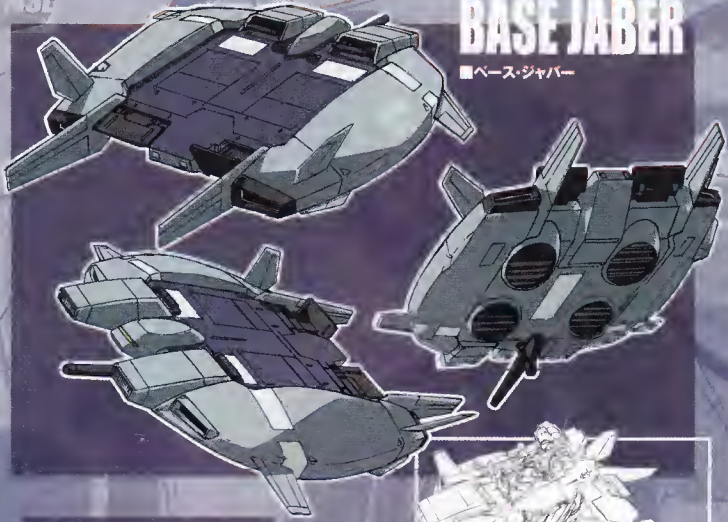


■バックパック省略

バックパックは本機自身の要として完全新規に開発が行われた。備わったスラスター総数は2基という極めてシンプルなレイアウトが採用されているが、ユニコーンガンダムに追従しうる極大な推力が秘められているのだ

BASE JABER

■ベース・ジャバー

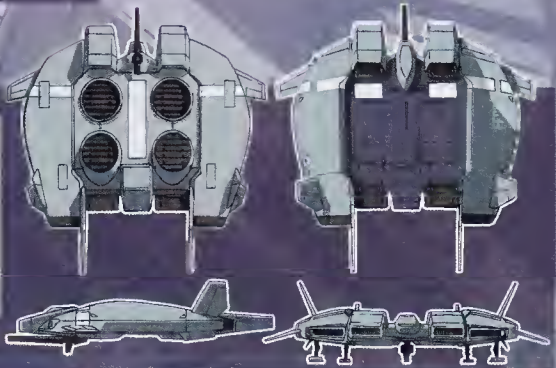




■対比

■CHECK

古くは宇宙世紀0087年の『グリプス戦役』からその存在を確認できるSFS（サブ・フライト・システム）、ベース・ジャバー。大気圏内用としての完成度は高く評価され、宇宙世紀0096年においても微少な改修をうけつつ生産は継続されている。MS2機の運搬を前提とした設計ではあったが、SFSによる戦闘機動技術が確立した現在にあっては、単機で運用するケースが主流となった



■CHECK

通常クラスのビーム・ライフルと同等の威力を持ったメガ粒子砲を装備したベース・ジャバーは、単機でも十分に戦力計算が可能であったという。その性能に目を付けたアクシズのネオ・ジオンでも鹵獲した同機を貴重な自軍戦力として運用しており、現在もなお多くの、そして様々な所属のベース・ジャバーが宇宙世紀の大空を飛翔しているのである

...next [Conclusion]



■CHECK

強化人間が搭乗することを前提としていたユニコーンガンダムのテストパイロット候補、トライスターの面々。#1の最終調整で搭乗していたAE社パイロットは別として、様々な状況下でのテストを行う必要があった中、技量はあれども強化されていない彼らでも身共に対応できたのだろうか？ もしかすると、何らかの形で彼らを強化する手筈が準備されていたのかもしれない。そうそえれば、ジェスタのパイロットとして採用されたことは彼らにとって何物にも代え難い幸せだったと言える

■トライスター

中央:ナイジェル・ギャレット
トライスターのリーダー。クールな風貌の優男を自認しつつ、顔面もなく上官を批評する実力の持ち主。コードネーム、U007（ユニフォーム:セブン）。27歳、大尉。

左:ダリル・マッギネス
コードネーム、U008（ユニフォーム:エイト）。ラテン系で浅黒い顔に覗いた影の男性。飄々とした表側気だが、油断ならない剣呑さも持ち合わせている。27歳、中尉。

右:ワッツ・ステップニー
コードネーム、U009（ユニフォーム:ナイン）。直情径行の飾らない性格の威丈夫で、血の気の多さは一番。26歳、中尉。

[Conclusion] 猟犬を駆る者達

宇宙世紀0096年に12機が生産された《ジェスタ》は、新型評価試験の名目で地球連邦軍のロンド・ベル隊旗艦《ラー・カイラム》へその全てが配備された。テストパイロットは基本的に《ラー・カイラム》に所属するロンド・ベル隊員が担当予定でありながら、想定外の試験中断により《ユニコーンガンダム》の担当予定でありながら、その中には《ユニコーンガンダム》の担当予定でありながら、想定外の試験中断によりロンド・ベル隊へ異動となった「UC計画」本来のテスト・パイロットも存在した。

チーム名を「トライスター」とする3名のパイロット達は、個々の操縦技能もさることながら、モビルスーツ一個小隊での連携においてその真価を発揮し、奇しくも《ジェスタ》を駆る者達として素晴らしい適応を見せたという。

「UC計画」の中断によって、「中核」と「要」は本来の役割を果たすことなくそれぞれの道を歩むこととなった。だが、彼らのパイロットとして失ったとて、その牙が錆びることはない。いかなる刻の連命にあっても猟の総牙は、ただ確実にジオンを噛み砕くのである。



RGM-96X JESTA

SPEC
頭頂高:19.3m
本体重量:24.8t
全備重量:57.2t
ジェネレーター出力:2710kw
スラスター総推力:89030kg
センサー有効半径:14200m
装甲材質:チタン合金セラミック複合材
十一部ガンダリウム合金
武装:ビームサーベル
ビームライフル
バルカンハンドシステム
シールド

[Introduction]

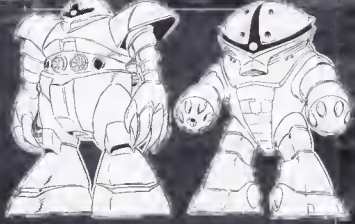
水陸両用型

宇宙世紀0079年、人類が住まう地全てが人型兵器、モビルスーツによる戦場となりえた未曾有の大戦「一年戦争」では、両軍とも様々な環境に特化した機体の開発が求められた。

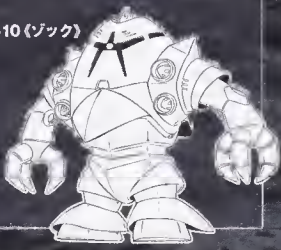
当時がモビルスーツ技術史の黎明期ということもあって、試験的運用も含めて実に多種多様な機体が戦場を彩ることになったのである。

特に宇宙から地球へと侵攻する必要のあったジオン公国軍では、地表の70%を占める海中環境に適応する水陸両用型モビルスーツの開発が急務であり、驚くほど僅かな期間で数多くの機体が戦線に投入されたという。

その後モビルスーツの技術・戦術革新が進んでいく中で、水陸両用機の重要性は次第に低下していき、個性豊かな水陸両用機の姿を戦場で見かけることは少なくなっていった。



MSM-03《ゴッグ》　MSM-04《アッガイ》



MSM-10《ゾック》

■ジオン公国軍の水陸両用MS（一部）



[Development]

袖付きの例外

宇宙世紀0093年の「第二次ネオ・ジオン戦争」以後、モビルスーツ開発は多様な環境に則した専用機の開発に関して消極的であり、汎用機のみで対応しうる方策が採られていた。

フル・フロンタル大佐を首魁としたネオ・ジオン残党軍ではその傾向が著しく、大型を抱きつつ開発された贅沢機体に身を潜めていた彼らは、「制約の鎖に縛られた中で自星戦力を拡充せざるを得なかった」のである。

とは言え連邦軍に彼らを「神付き」と広く仇名せしめる因となった主力量産型モビルスーツ、AMS-129《キラ・ズール》の総合性能は極めて良好であり、その機体コンセプトがジオン公国の名機《ザクII》に近しいものであったことから、《キラ・ズール》をベースとした局地専用機の開発案が複数提示されたという。

...next[Turn-01]

[TURN-01]

ゼー・ズール、という機体

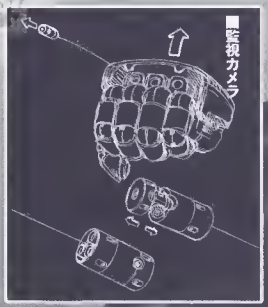
古き運用データ

AMS-129M「ゼー・ズール」は「袖付き」が地球侵攻任務に備えてAEIアナハイム・エレクトロニクス）社へ委託開発させた水陸両用モビルスーツである。

基本フレームでベース機体の「ギラ・ズール」と同一だが、内装部品は大気圏内での運用に限定した、いわば地上での重力に対応したものに改められている。

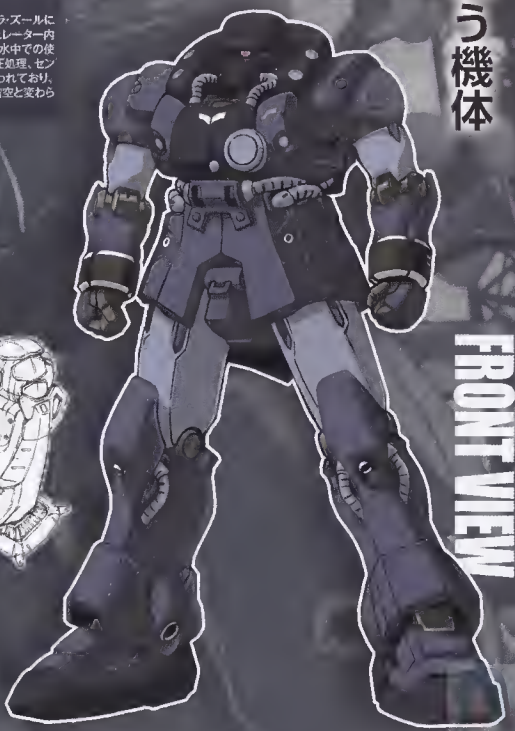
また、本機の開発に欠かせないものとして、ジオン公国軍で培われた水陸両用モビルスーツの運用データが大いに活かされたという。

「一年戦争」から17年もの月日を経た古きデータ、革新の速度が他部門とは比べものにならないモビルスーツ技術にあって、何故重要視されたのであろうか。



■監視カメラ

■CHECK
ベース機であるギラ・ズールに標準装備のマニピュレーター内装式監視カメラは、水中での使用にあわせて防水圧処理、センサー部の改修が行われており、いかなる深海でも宙空と変わらぬ性能を発揮する



FRONT VIEW



■コックピットシート

【AMS-129M】

AMS-129 GEARA ZULU



■CHECK

AMS-119ギラ・ドーガに代わるネオ・ジオン軍の次期主力MSとして、アナハイム・エレクトロニクス社で開発が進められていた量産型MS。オーソドックスなジオン・スタイルでまとめられている他、手首や胸部に「袖付き」の由来であるマーキングが施されている。また運用される部隊や搭乗者の階級によって、袖飾りの模様やスパイクの形状などが異なる

SPEC

頭頂高:20.0m
本体重量:21.8t
全備重量:55.2t
ジェネレーター出力:2470kw
スラスター総推力:62100kg
センサー有効半径:18200m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材
武装:ビーム・ホーク
ビーム・マシンガン
シュツルム・ファウスト
ハンド・グレネード
シールド

■CHECK

大気圏内に限定した運用に背面のハイドロジェット推進器の装着を前提とした設計のため、本機のバックパックはよりシンプルな仕様に改められている。その形状はどことなくザクIIを連想させる

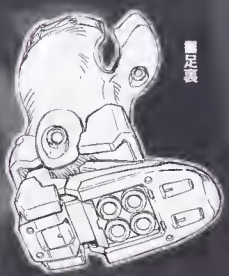


■CHECK

ゼー・ズールにとって水中用装備を除装したこの素体は、同時に上陸後の戦闘状態でもある。デッドウェイトを廃したことにより得られる恩恵は計り知れなく、ベース機体のギラ・ズールをはるかに超えた陸戦性能を発揮する

REAR VIEW





■足裏

...next [Turn-02]

[Turn-02]

ゼー・ズール、という機体

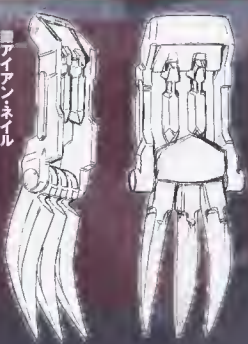
重力に勝る水圧

いくら高い技術を持ち得ようが、それを活かす運用データが無ければ何ら意味はない。現実の「海」は人間の想像を超える過酷な環境だった。

宇宙での水陸両用機の発展開発。明らかに矛盾するこの要求を満たすには、実際に海中運用を行った旧型機体達の記憶は何物にも代え難く、《ゼー・ズール》の水中用装備を誕生させる貴重な力となったのである。

上陸後は速やかにパージ出来るよう最小限の増加装備は、水中での長時間行動と、高い機動性能を付加させた。

武装類は、その独特な携行方法から本機のシルエットを人型から異形へと変質させ、個性的なフォルムを主とした水陸両用機の正統な後継機種であるかのような錯覚を引き起こすのだ。



アイアン・ネイル

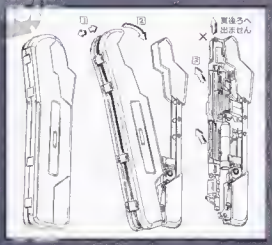


クロー展開

FRONT VIEW

■CHECK

本機の象徴ともいえるアイアン・ネイルとヒート・ナイフは、共にセラミックス高分子化合物で形成されたヒート系携行装備である。ブレード部分が全体的に赤熱化する旧来の方式とは異なり、戦闘時は刃部分のみが赤熱し、最小効率で最大の効果を発揮することが可能となった



■ガンケース展開ギミック

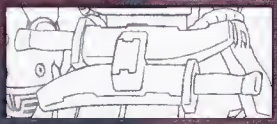


■ビーム・マシンガン

■CHECK
シーリングされた武器コンテナに収納された専用携行火器。銃身下部にアドオン方式のグレネード・ランチャーユニットを装着している。水中でのビーム収束率を高めた偏向射撃モードへと切り替えることが可能

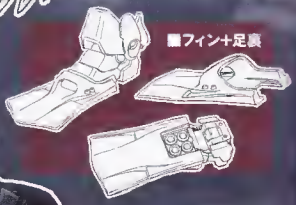


■ヒート・ナイフ



■シース（鞘）

REAR VIEW

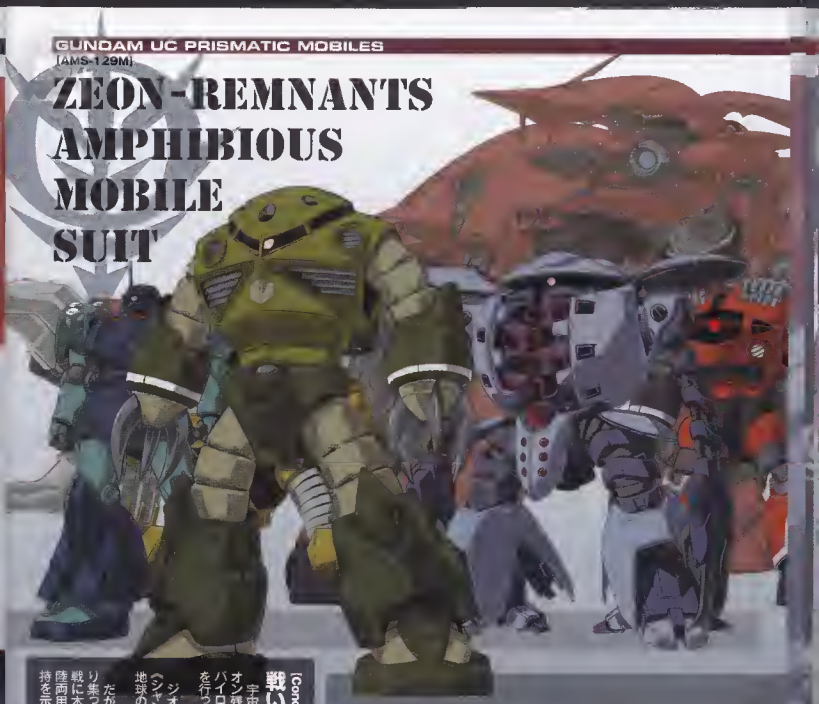


■フィン+足裏

...next [Conclusion]

【AMS-129M】

ZEON-REMNANTS AMPHIBIOUS MOBILE SUIT



AMS-129M ZEE ZULU

SPEC
頭頂高:20.3m
本体重量:28.9t
全備重量:42.8t
ジェネレーター出力:2470kw
センサー有効半径:18200m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材
武装:アイアン・ネイル
ヒート・ナイフ
ビーム・マシンガン
グレネード・ランチャー

【Conclusion】

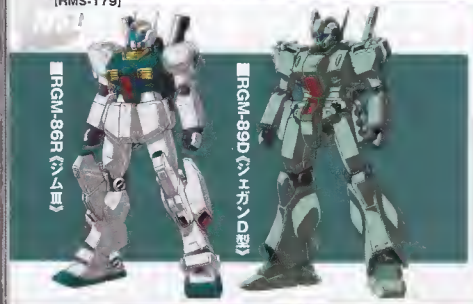
戦いの無くなった海で

宇宙世紀0096年、『バラオ』のネオ・ジオンは、地球上で活動するジオン残党軍人《ゼー・ズール》2機と補充用の《キラ・ズール》1機、そしてパイロットを含む少数の人員を派遣し、地上に不時着した友軍の救援依頼を行った。

ジオン残党軍はこれを受け、連邦首都に対し大型モビルアーマーMA-X7《ジャンプロ》を用いた陽動作戦を決行。《ゼー・ズール》も早々に投入され、地球の海に再び戦いの渦を巻き起こしたのだ。

だがそれはあくまで前哨戦でしかなく、運命の導きによって世界各地より集った他のジオン残党と共に、この時代からすれば極めて大規模な上陸戦に本機が参加した記録も残されている。時代を見失うほどの新旧の水陸両用機体達によって彩られた戦場で、《ゼー・ズール》は最新鋭機体の矜持を示しつつ、彼らよりも一際大きく違っていたという。

...next【GUNDAM UC episode 4 &「袖付き」の腕付長は時詠う #3】



■RGM-89D《ジェガンD型》

■RGM-86R《ジムIII》

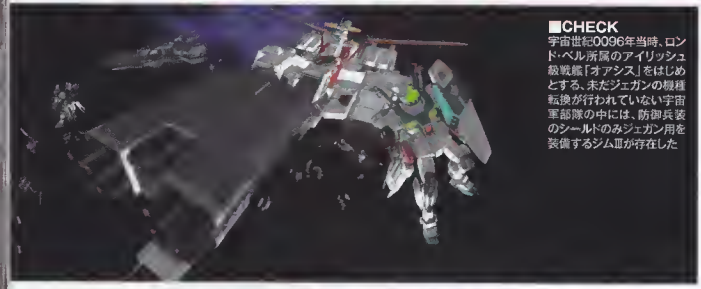
[Introduction]

宇宙が煌めいた果てに

「一年戦争以来の対ジオニズム闘争は掃討戦に移行した」宇宙世紀0094年、国防支出計画において地球連邦軍参謀本部はこのような見解を発表した。

事実、第二次ネオ・ジオン戦争が終結して以来、反地球連邦政府運動は衰退の途をたどり、連邦軍の敵は潜伏したネオ・ジオンの残党くらいのものであった。

翌年の0095年に発足した地球連邦政府新内閣では、軍事予算の大幅な下方修正を実施する運びとなり、これが連邦軍全体に気運が高まりつつあった軍事縮小への決定打となったのである。



■CHECK

宇宙世紀0096年当時、ロンド・ベル所属のアイリッシュ級戦艦「オアシス」をはじめとする、未だジェガンの機種転換が行われていない宇宙軍部隊の中には、防御兵装のシールドのみジェガン用を装備するジムIIIが存在した

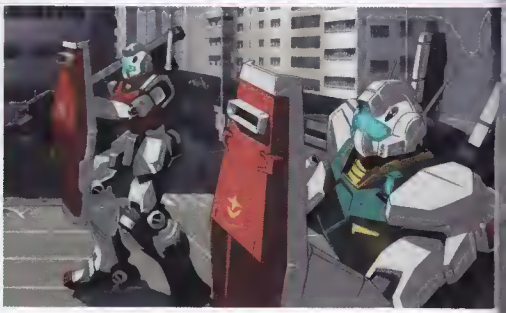
[Development]

宇宙と地球の守り

当時の主力量産モビルスーツ、RGM-89《ジェガン》の配備状況も影響を大いに受けていたといえる。

ネオ・ジオン残党の潜伏が想定される「部宇宙軍では優先的に更新が終了していたものの、可能性が低いと判断された各「コロ」駐留軍をはじめとする他部隊への配備は大幅に遅れ、旧式機種を運用せざるを得ない部隊も少なからずあったという。

特に地球上に存在する連邦地上軍においては、《ジェガン》より一世代前の旧式機種、RGM-86R《GMIII》が未だに大多数を占めている状況であり、その中でも特に戦略価値の低い連邦軍事施設では、もはや「ロートル」としか表現できないモビルスーツが現役で運用されていたのである。



MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN

PRISMATIC MOBILES

機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ

volume008_RMS-179

...next[Turn-01]

[Turn-01]

ジムII、という機体

複数の型式

宇宙世紀0096年の地上で運用されていたロートル機。そのモビルスーツは17年前の大戦を支えた傑作機の面影を色濃く残した機体であった。

地球連邦軍初の主力量産機、RGM-79〈ジム〉、いわゆるジム・タイプのモビルスーツはあらゆるバリエーション機体が生み出されたが、中でも〈ジム〉の正統な後継機種といえるのが〈ジムII〉である。

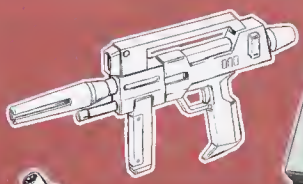
本機は生産時期の違いによって型式番号が異なる、大別するとV〈ジム〉を素体とした近代化改修機（RGM-79R）、完全新造パーツによる後期生産型（RMS-179）の2種が存在する。

両機種にまたがったスペック上の違いはないが、新造生産がもたらせるパーツ間の優れたマッチングや、改修機の運用と同系機種による試験で蓄積されたデータを投入した後期生産型の信頼性は圧倒的に高いものであったという。

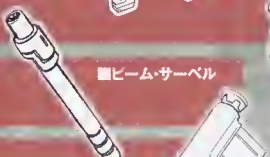
■CHECK
守備隊に属するMSは、基地周辺の環境に則した携行火器を装備している場合も多々あった。海に面した湾岸基地の場合、海中の敵に効果的なハープーン・ガンを選択するなどが良い例である



■ビーム・ライフル

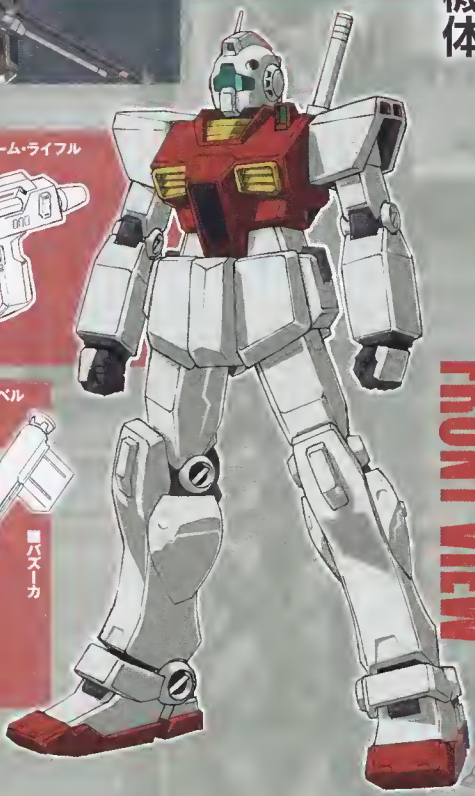


■ビーム・サーベル

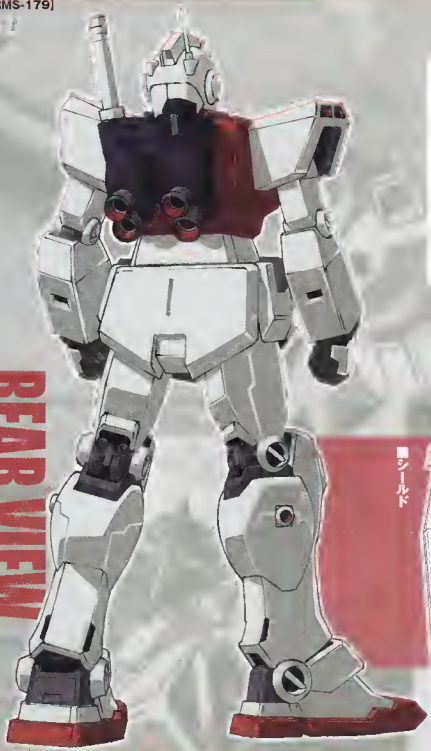


■バズーカ

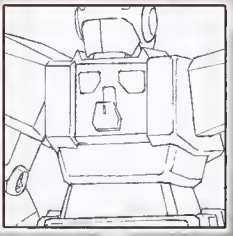




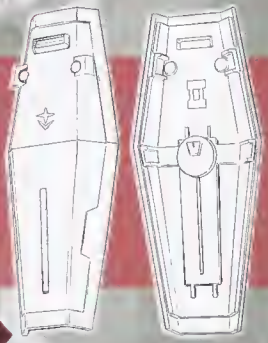
FRONT VIEW



REAR VIEW



■シールド



[Desert Type Color]

旧型の役割

近代改修による全天周リニアシートへの換装、メインジェネレーターの更新、センサー部の増設など、《ジム》と比較してめざましい性能向上を遂げた本機だが、所詮は旧式のマイナーチェンジ版でしかないという感もあり、第二世代モビルスーツの台頭により技術革新の渦中にあった宇宙世紀0090年代後半では、後不足といった感は否めないものであった。

制式採用当時の評価がこれでは、宇宙世紀0096年までの《ジムII》における総合性能評価に併解の余地がないことは想像に難くない。

だが言い方を変えれば、小規模な戦闘記録が極めて貴重なデータとなり得た"戦いの無い"時代において、連邦軍からすれば本機のような旧式機体は教合わせとしての存在意義で十分だったのである。

モビルスーツは、人が乗る兵器である。たとえ上層部にとってそのような存在であっても、機体に命を預ける現場のパイロット達にはそんな道理が通用する筈もなく、皆らは彼らなりに性能の限界を超えるために……戦っていた。

RMS-179 GM2



SPEC
頭頂高:18.1m
本体重量:40.5t
全備重量:58.7t
ジェネレーター出力:1518kw
スラスター総推力:62000kg
センサー有効半径:8900m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材
武装:ビーム・サーベル
ビーム・ライフル
60mmバルカン砲
シールド　他

[Turn-02]

ジムII・セミストライカー、という機体

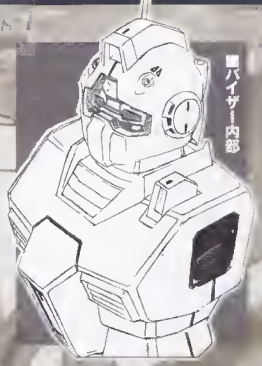
攻の志を継ぐ

その《ジムII》の肩には、左前腕には、追加装甲が備えられ、右脚は長い得物を携えていた。

シルエットを崩さない程度の必要最小限の追加装甲ではあったが、あるモビルスーツを想起させるその姿から、機体に関わった人々からは親しみを込めて《ジムII・セミストライカー》と呼ばれたという。

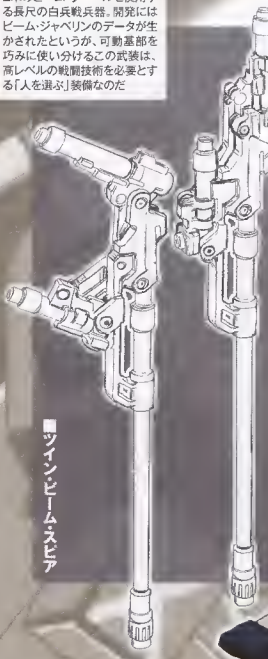
あくまで《ジムII》の後期生産型に既存機体の補充パーツ等を再利用した仕様機でしかなく、機体型式番号に変更はないものの、このモビルスーツには現地改修ならではの特筆すべき点があった。

モビルスーツの性能は『最新』の技術によって更新されてきたが、たとえ設計が旧式でも、適切なメンテナンスのもとに『新たな』アイデアを加えれば、正常な機構はそれに応えるのだ。



■バイザー内部

■CHECK
2本のビーム・サーベルを使用する長尺の白兵戦兵器。開発にはビーム・ジャベリンのデータが生かされたというが、可動基部を巧みに使い分けるこの武装は、高レベルの戦闘技術を必要とする「人を選ぶ」装備なのだ



■ツイン・ビーム・スピア

FRONT VIEW

REAR VIEW

■CHECK
この肩部装甲とツイン・ビーム・スピアの存在が、本機に「セミストライカー」という愛称を与えられた所以となったのは言うまでもない。だが、本機の肩部装甲はレプリカ品であり、対衝撃性能を持つウェラブル・アーマーの機能は含まれていない。とはいえ、本機にとって重要な腕部を守る増加装甲として作用していることにはなんら間違いがないのである



■肩部アーマー





■簡易小型シールド

完全なる専用機

本機は一定の近接戦闘モーションのみに特化したOSの書き換えが施され、一定の動作に限定して優れた瞬発力、機体追従性能を示す。要は搭乗するパイロット個人の操縦技術、いわば"動きのクセ"に合わせて、そのパイロットのためだけに調整された《ジムII》なのである。

過去のモビルスーツにも、搭乗するパイロット向けのチューニングが施された専用機はというものは存在していたが、《ジムII・セミストライカー》はその域をはるかに超え、独特な操作性と挙動により通常のパイロットでは普通に立ち上がらせることすら困難を極めた。

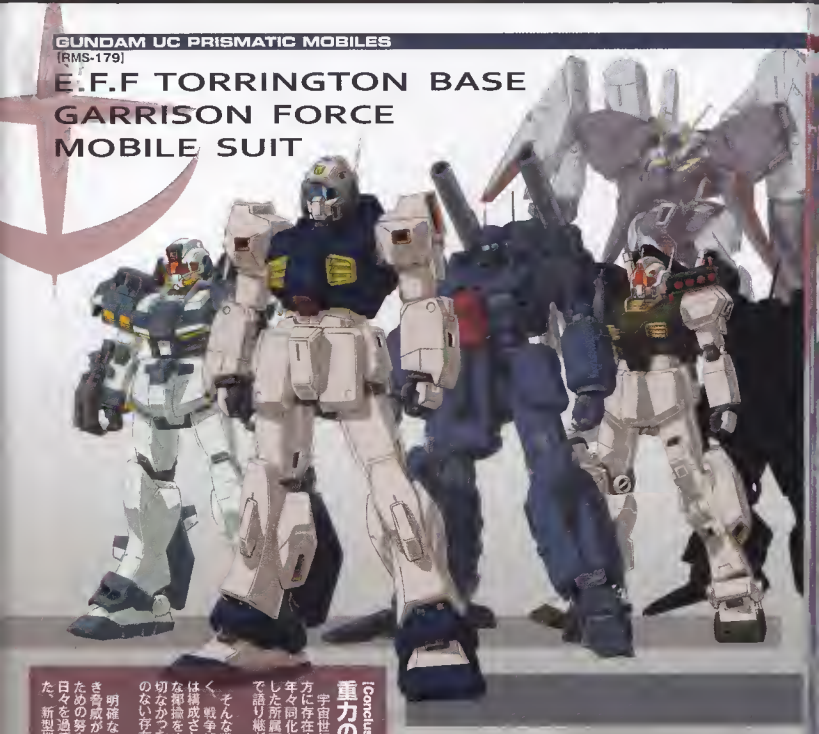
なお、通常の駆動数値と比較して、この特殊な調整によって得られたアトバンテージは「18秒」だったという。日常の生活においてほんの一瞬ではあるが、その一瞬が勝敗を、生死を分かつ対モビルスーツ戦闘では、かけがえのない貴重な時間といえるだろう。

■CHECK
このシールドが現存するということは、MS史において長年議論が交わされ続けてきた、あるMSの存在の確定を意味する。だがこのパーツが新規で作り上げられたレプリカなのか、それとも実際に予備パーツから流用したものかどうかは、現時点において定かではない。ただ一つだけ確かなのは、このシールドの装甲材が、ガンダリウム合金によって形成されているということである

...next [Conclusion]

[RMS-179]

E.F.F TORRINGTON BASE GARRISON FORCE MOBILE SUIT



RMS-179 GM2 SEMI STRIKER

SPEC
頭頂高:18.1m
本体重量:43.5t
全備重量:57.5t
ジェネレーター出力:1518kw
センサー有効半径:8800m
スラスター総推力:62000kg
装甲材質:
チタン合金セラミック複合材
+一部ガンダリウム合金
武装:ビームサーベル
ツインビームスピア
60mmバルカン砲
小型シールド

[Conclusion]

重力の井戸を護る者達

宇宙世紀0096年、オーストラリア東部、シドニー新湾より20キロ北方に存在する連邦軍トリントン基地。周囲を取り囲む荒涼とした大地に年々同化していく印象を受けざるを得ない軍事施設では、数年前に発生した所属不明機による賊との小規模な遭遇戦が奇跡的事例として基地内で語り継がれるほどであったという。

そんな戦略的価値の低い軍事施設に最新機体などが与えられるはずもなく、戦争博物館かと見紛うほどの旧世代のモビルスーツ達によって守備隊は編成されていた。しかしトリントン基地の人々からすれば、時に自嘲的な視線を感じることはあっても、この機体達に対して「旧式」という感情は切なかった。むしろ長年付き合うことで、自らにフィットしたかけがえのない存在なのである。

明確な敵が存在せず、軍属である意義が薄れてしまっても、一旦封つべき脅威が現れれば自らの持てる力を全て発揮して即時行動に移る。そのための緊力は一切怠りません。彼らはそれぞれの想いを持って後悔のない日々を過ごしている。それに応えるように、守備隊のモビルスーツ達もまた、新型機種では到底発せない輝きを放ち続けているのである。

TITANS



【Introduction】
大地の子ら

宇宙世紀0083年。ジオン公国軍の残党狩りを主任務とした地球連邦軍の特務部隊「ティターンズ」が結成される。

地球出身者が多数を占めるエリート部隊として急速に権勢を強めていったティターンズは、地球圏の平和維持という名目のもと、次第に人類の行く末すら左右する危険な本質をさらけ出していった。

独自戦力を生産する工廠を擁するなど、一部隊の枠を逸脱し、もはや連邦軍全体を掌握しつつあったティターンズに対し、それを阻止せんとする連邦軍閥の一つ、「反ティターンズ勢力」エゥーゴ」が行動開始。宇宙世紀0087年、ここに連邦軍の内乱を発端とした「グリプス戦役」が開戦する。

ティターンズで開発されていたモビルスーツは、いわゆる連邦デザインとはかけ離れた独特なシルエットが多く見られ、中には運用自体が独特なコンセプトを採用した試作機もあったという。彼らが至上とする、地球上の制空権を確固たるものとすべく生み出された機体とは――





MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume【EX】_RX-160S



[Development]

バイアラン、という機体

重力に勝つために

飛行性能に重点を置いた試作型モビルスーツは、ドダイやベース・ジャバ等のSFSを使用する訳でもなく、また当時のトレンドであった自らの体躯を飛行に即した形態へ変形する方式を採ることもなかった。

その試作機はモビルスーツ単独且つ人型の姿を保ったままであることを選択したのである。それがRX-160〈バイアラン〉なのだ。

本機は完全な飛行性能を獲得するべく、大気圏内用熟核ジェット・エンジンの搭載比率を大幅に高め、当時の最新技術による機体の軽量化と空力特性を徹底的に追求し、不可能を可能としたのである。

武装総数や航続距離など、そのために犠牲となった要素はあったものの、〈バイアラン〉はモビルスーツ技術史に大きな歩を踏み出したことは間違いなく、新たな系譜の先陣としてその発展を大いに期待されていた。



■頭部ユニット



SPEC
頂頭高：18.6m
本体重量：34.2t
全備重量：54.7t
ジェネレーター出力：1760kw
センサー有効半径：9890m
装甲材質：カンダリウム合金
武装：ビーム・サーベル
メガ粒子砲

FRONT VIEW

■足裏

■CHECK
過去ジオン公国軍が同様のコンセプトで開発を行った飛行試験機は、幾多の改装を経て飛行自体には成功したものの、そのレベルはあくまで「浮く」ものでしかなかった。空中において鋭敏な戦闘機動をこなせるほどの性能を獲得するには、さらなる技術が必要だった





■コックピットハッチ開閉

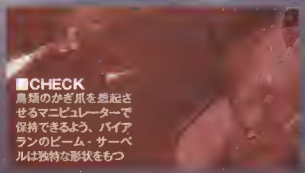


■CHECK
大気圏内での運用を主として開発されたバイアランは、僅かな調整によって宇宙空間での運用も可能であり、グリプス戦役終盤には複数のバイアランが宇宙に上がったとされる

REAR VIEW



■メガ粒子砲



■CHECK
鳥類のかぎ爪を想起させるマニピュレーターで保持できるよう、バイアランのビーム・サーベルは独特な形状をもつ

■ビーム・サーベル



歪む価値

勝利した エゥーゴ は休む間もなく、連邦正規軍としてネオ・ジオンとの次なる戦いに向かい、本来正規軍の立場にあったティターンズは恥すべき過去として、その存在も公に語られることなく闇に葬られていった。

同軍で開発運用されていたビルスーツも忌むべき象徴として扱われ、正統な後継機種の登場は絶望的な状況にあったのである。

世にある万物の事象、その真なる価値は人が見出す、時代によって歪められようとしていた価値は、歪な拘りを持たない人によって拘い上げられ、そして……

後にハマーン・カーン率いるネオ・ジオンも介入した三つ巴の紛争は、ティターンズの敗北をもって終結する。

...next [Turn]

[Turn] バイアラン・カスタム、という機体

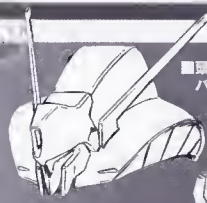
カスタマイズ

「グリプス戦役」において、ティターンズが開発した〈バイアラン〉の残存機体を改良した技術試験機、それが〈バイアラン・カスタム〉である。

熱核ジェット・エンジンの強化とプロペラントタンク増設が行われ、大気圏内飛行能力が向上、武装面ではメイン・ウェポンとなる腕部ユニットが大幅に改良されており、カスタムの名に恥じない総合的なレベルアップを果たした。

特筆すべきは、本機の技術試験計画の発案、進行の全てが、ある連邦軍基地の陥られた人員によって行われたと言う事実だ。

この機体は開発機関からもたらされた最新技術で造られてはいない。人が培った経験のみによって「カスタマイズ」されたのである。



■頭部&バイザー内部





■CHECK

センサーユニットはモノアイ方式が廃され、連邦MSがおよそ採用してきた単一の必須事項であったとされる

FRONT VIEW



■CHECK

かかと部分の新造ユニットは、ハイヒールのような効果をシルエットに与え、バイアラン・カスタムの頭頂高を高めた。その真価は360度が攻撃範囲となる空中戦闘時に格闘兵器として発揮される

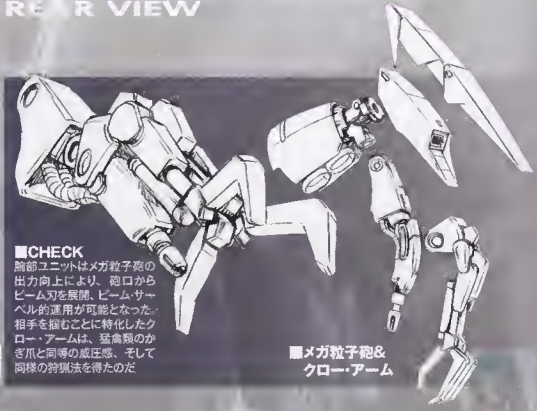
■足裏



REAR VIEW

■フロベラントタンク&
燃焼スラスター





■CHECK
脚部ユニットはメガ粒子砲の出力向上により、砲口からビーム刃を展開、ビーム・サーベル的運用が可能となった。相手を掴むことに特化したクロー・アームは、猛禽類のかぎ爪と同等の威圧感、そして同様の狩猟法を得たのだ

■メガ粒子砲&
クロー・アーム

...next [Conclusion]

[RX-160S]

■CHECK

バイアラン・カスタムは2機存在する。1号機は増設ユニットを含んだ改修箇所の適応、検証用。2号機は更に背面部スラスターの大幅な差し替えが予定されており、それこそが本機の完成形と呼べるものだという。1号機にも備わった腕部の増設ユニット、そして2号機の背面に使用されるスラスターユニットは、バイアランと共通項を持つティターンズMS達の面影があったとされている。生み出された環境が歪であっても、MS自身になんら罪は無いのだ。いつかこの2機が一切のわだかまり無く、共に大空を機動できる日が来ることを心から期待したい

...UNKNOWN MOBILE?

[Conclusion]

守るための飛翔

宇宙世紀0093年、トリントンに位置する湾岸基地。連邦軍から忘れられた軍事施設、という表現に少しの誇張すら感じさせぬ僻地。もはや明確な敵が存在しないまま、軍属であることの意義が薄れてしまった人々が務める場所で、2体の《バイアラン》は改修を施されていた。

本部からの一切の援助が行われない技術試験計画は、様々なルートから入手した余剰、廃棄寸前のパーツだけが頼りという様な不安定なものだったという。だが、そこにはモビルスーツを戦闘兵器ではなく、純粋に人型機械として接する人々が支え合う場所でもあり、緩やかではあったが開発は着実に進行していった。

そうして戦いの過去を振り切って前を進む人間がいれば、戦いの過去に囚われた人間も存在する。翌、宇宙世紀0096年、未だ亡国の名にすがりつつ地球に埋伏していたジオン残党軍は、些細なきっかけでその牙を力に変え、矛先をトリントン基地へと向けた。

敵だったという過去だけで、もはや縁故もない人々に振るわれる理不尽な刃に対して、《バイアラン・カスタム》は地球の空を翼うのだ。純粋に人を、そして自らの存在意義を守るために。



RX-160S
BYARLANT CUSTOM

SPEC

頭頂高：20.6m
本体重量：38.9t
全備重量：60.3t
ジェネレーター出力：1840kw
センサー有効半径：11200m
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：ビ[illegible]ーベル
メガ粒子砲
ク[illegible]ーアーム

...next [GUNDAM UC episode 4 & 星月の欠片 #3]

AMX-002 NEUE ZIEL

[Introduction] 機動の鎧

宇宙世紀において、既存の兵器概念を覆した存在であるモビルスーツ。一年戦争から登場したこの人型兵器は、人の姿を模したことにより圧倒的な汎用性を獲得し、瞬く間に戦場の主力兵器となった。

その開発過程の中で、人型に縛られぬコンセプトを持って提示されていた兵器案があった。汎用性よりも攻撃力、重装甲に特化した巨大機動兵器もまた、その有用性を見出されて戦線に投入されることになったのである。

人型のモビルスーツに対し、モビルアーマーと呼ばれたこれらは、単機で戦域を支配するほどの強大な力を示し、その姿は数々の逸話を残したという。

AMA-100 ZOD'-IACOK

AMA-01X JAMRU-FIN

[Development] ハマーンの遺産

モビルアーマーの構想はジオン公国軍によって生み出され、連邦軍で実験的に開発された一部の例外を除いて独自の進化を遂げていった。

資源用小惑星（アクシズ）に逃げ延びたジオン公国軍の残党（後のネオ・ジオン）でも継続してモビルアーマーの開発は行われ、完成した宇宙運用型の複数機種が実戦にて使用された記録が残っている。

来るべき本格的な地球侵攻を主眼に置いた水陸両用型のモビルアーマーの設計も進められていたが、ネオ・ジオンの壊滅をもってザビ家再興の夢は潰え、試作機すら生み出されることなく開発計画は頓挫した。

だがその設計案は連邦の手に渡ることとなり、新たなジオンの系志を持つ者達に受け継がれていたのだ。かつて〈アクシズ〉を率いた摂政の名を冠した「ハマーンの遺産」とも呼ばれたモビルアーマーが――

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume009_AMA-X7

[Turn-01]

シャンブロ、という機体

最新鋭の怪物

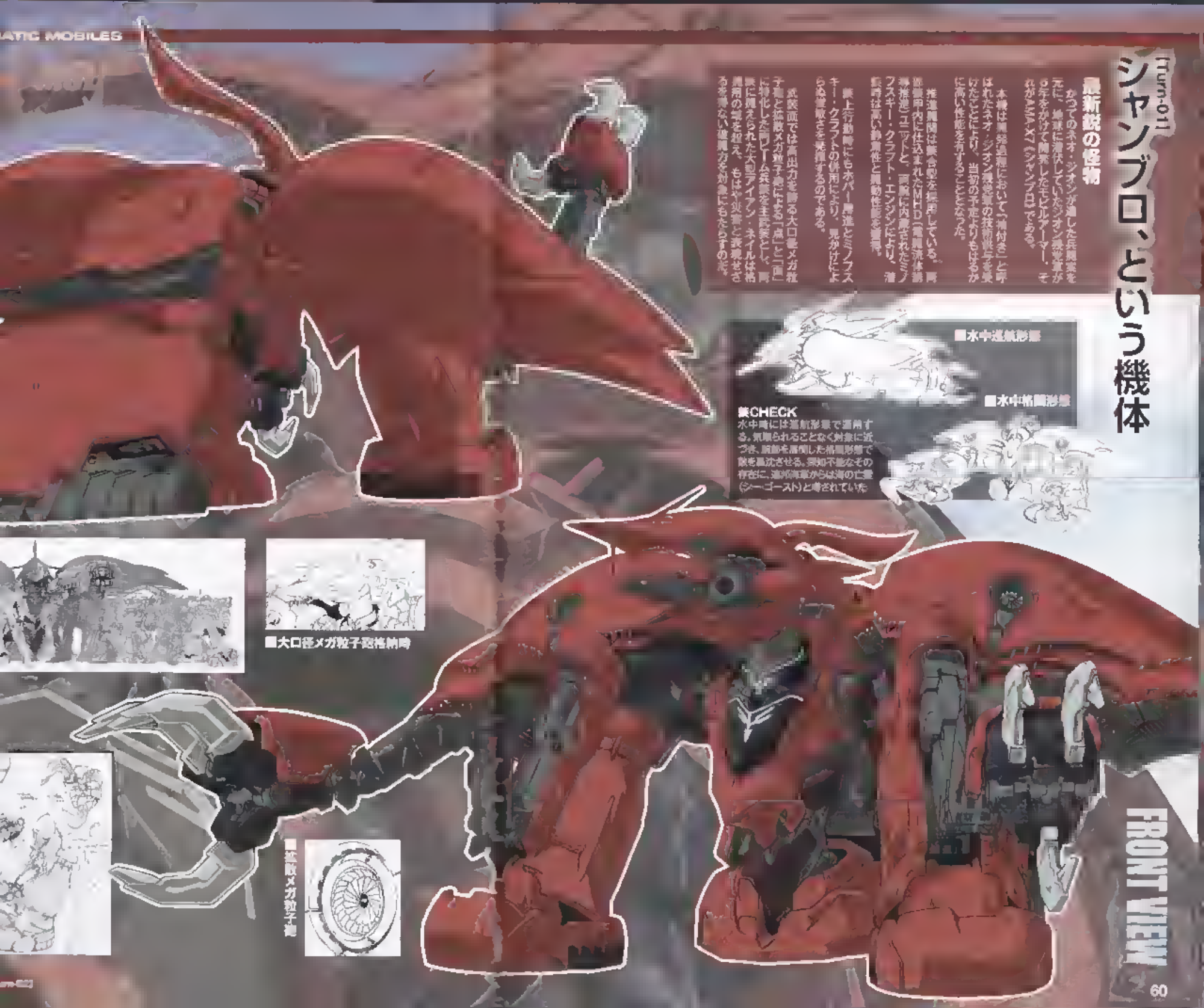
かつてのネオ・ジオンが遺した兵器群を元に、地球に潜伏していたジオン残党軍が9年をかけて開発したモビルアーマー、それがAMX-107「シャンブロ」である。

本機は開発過程において「補付き」と呼ばれたネオ・ジオン残党軍の技術供与を受けたことにより、当初の予定よりもはるかに高い性能を有することとなった。

推進機関は熱核ロケットを採用している。両翼部内に仕込まれたMHD（電磁流体動力推進）ユニットと、胴部に内蔵されたミノフスキー・クラフト・エンジンにより、滑空時は高い静粛性と機動性能を獲得。

艦上行動時にもホバー推進とミノフスキー・クラフトの併用により、見かけによらぬ俊敏さを発揮するのである。

武装面では高出力を誇る大口径メガ粒子砲と拡散メガ粒子砲による「点」と「面」に特化した二門一組兵装を主武装とし、両翼に備えられた大型アイアン・ネイルは格闘用の域を超え、もはや災害と表現せざるを得ない破壊力を対象にもたらすのだ。



装CHECK
水中時には巡航形態で運用する。気取られることなく対象に近づき、肩部を展開した格闘形態で敵を轟沈させる。深知不能なその存在に、連邦海軍からは海の亡霊（シーゴースト）と呼ばれていた

REAR VIEW

ばれたネオ・ジオン残党軍の技術水準と呼けたことにより、当初の予定よりもはるかに高い性能を有することとなった。

推進機関は複合型を採用している。胴部動力内に仕込まれた4基のHTD-6型熱流体噴射推進）ユニットと、両脚に内蔵されたミノフスキー・クラフト・エンジンにより、海戦時は高い機動性と機動性能を誇る。

陸上行動時にもホバー推進とミノフスキー・クラフトの併用により、見かけによらぬ機動さを発揮するのである。

武装面では高出力を誇る大口径メガ粒子砲と拡散メガ粒子砲による「点」と「面」に特化した両ビーム兵装を主武装とし、装備に備えられた大型アイアン・ネイルは接近戦の際を想え、もはや"殺意"と表現せざるを得ない破壊力を対象にもたらすのだ。

■水中

■CHECK
水中時には遊軌形態で運用する。気取られることなく対象に近づき、脚部を展開した格闘形態で敵を直沈させる。撃破不能なその存在に、連邦海軍からは海の亡霊（シー・ゴースト）と呼ばれていた

■大口径メガ粒子砲格納時

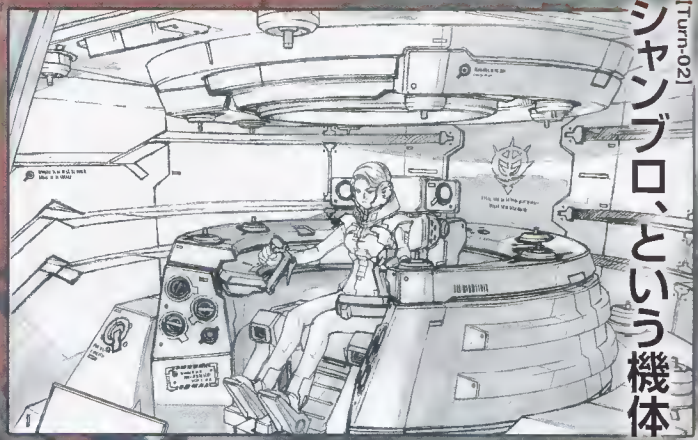
■他MS対比

■拡散メガ粒子砲

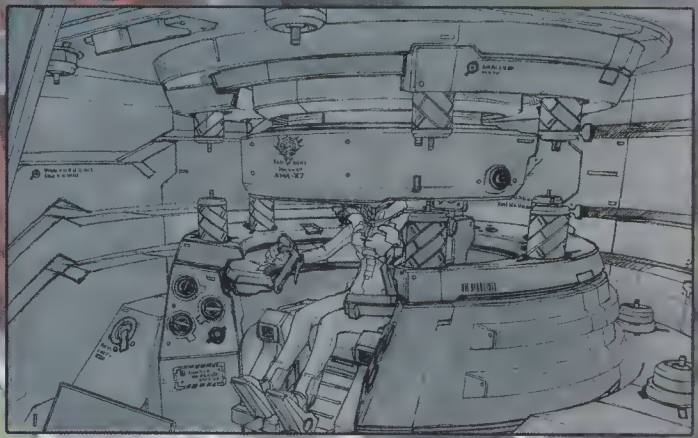
...next [Turn-02]

【Turn-02】

シャンブロ、という機体



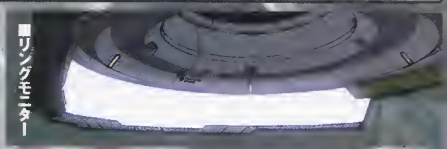
■通常時



■サイコミュ起動時

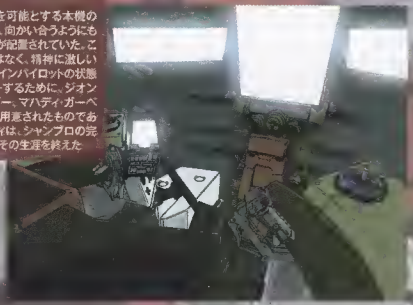
COCKPIT

Psycommu System



■リングモニター

■CHECK



■での操縦を可能とする本機のシート正面には、向かい合うようにもう一席のシートが配置されていた。これは操縦用ではなく、精神に激しい負荷がかかるメインパイロットの状態を常時モニターするために、ジオン軍残党のリーダー、マハディ・ガーベイの指示により用意されたものである。だがマハディは、シャンブロの完成を待たずしてその生涯を終えた



■コントロール・グリップ



■リフレクター・ビット

射出時

裏面

表面

サイコフレームの恩恵

《シャンブロ》はネオ・ジオンでの計画当初では、ニュータイプ能力を持つパイロットを防御の基点とし、複数の人員で管制を行うサイコミュ搭載モビルアーマーとして設計が行われていた。

たが補付きによってもたらされた最新鋭のサイコミュ装置「サイコフレーム」を採用したことによって、機体・火器・索敵・防御からなる機械的なオペレーションを全て単独でニュータイプパイロットのみで賄えるようになったのである。

コックピット・シートを取り囲むように配置されたシリンダー形状のサイコフレームが展開し、パイロットの思念波を著しく増幅。機体背面のコンテナ・ユニットに12基格納されたリフレクター・ビットを射出して、初めて《シャンブロ》の真なる性能は発揮される。

それ自体に攻撃能力は無いが、メガ粒子ビームの反射機能を持つリフレクター・ビットを思念波で自在に操り、自らが放つ敵メガ粒子砲の射角を拡大するだけではなく、複数のビット間でビームを反射させ、いわゆるビーム・バリアーを成し、実体弾をも無効化する文字通り鉄壁の性能を示すのである。

このようにモビルアーマー本来の運用思想であった「高火力」「重装甲」を宇宙世紀0096年における最高水準で体現した機体として《シャンブロ》は「ある目的」を達成するためだけに、一切の妥協を許さず完成したのであった。



■サイコフレーム

...next [Conclusion]

STRUGGLING AGAINST DIFFICULTIES FOR THE SAKE OF VENGEANCE

[臥薪嘗胆]



■CHECK

ニューギニアのジオン残党組織をまとめたマハティ・ガーベイはサイド3、いわゆるジオン公国出身者である。一年戦争以前から地球に降り立ち、発電の新進企業「ガーベイ・エンタープライズ」を設立、秘密裏に公国の資金源として活動してきた。その後もネオ・ジオンをはじめとする残党組織へ援助を続け、自身も地上の残党組織を統成するなど、ジオン再興の夢を果たすべく尽力してきたが、宇宙世紀0090年、シャンブロの製造計画を立ち上げた直後に何者かによって暗殺されてしまう。その理由は残党組織の嫌疑ではなく、民間の一企業として政府界に影響を及ぼすほどの力を得てしまったマハティに対する地球連邦政府の政治的意図が含まれていたのは明白であった

[Conclusion]

怪物の「巣」で

宇宙世紀0096年、ニューギニア沿岸部に秘匿された、海鮮洞を思わせる広大な穴。あきらかに人によって手を加えられた内部の最奥で『シャンブロ』は起動の時を待ち続けていた。

ジオン公国軍残党組織の本拠地であるその場所には十人十色の風体を持った歴戦の兵が集い、並ぶ機体の顔ぶれも相まって異様な雰囲気に包まれていたが、中でも際立っていたのは彼らに混じる二人の少女の存在であった。

様々なしがらみを経てもなお、ジオンを名乗る男達の想いは「ジオン再興」という目的の元に戦士であり続けてきた。だが、彼らをまとめ上げたサイド3出身者の実娘は、地球に生まれながらもジオンと共に育ち、父の死という歪な形で連邦を理解してしまう。彼女にとっての「ジオン再興」は、もはや本来の意味を逸えたものとなり、連邦への「怨念」という感情に塗り替えられてしまった。

人とわかりあえるはずの「ニュータイプは、わかりあえる人と出会う術もしらず、鋭敏な感性の全てを『シャンブロ』へ注ぎ――その矛先は、パイロット「ロニ・ガーベイ」の心の歪みに、重力の井戸に堕落をもたらすのである。



AMA-X7
SHAMBLO

SPEC

頭頂高(陸上戦闘形態時):31.8m
全長(水中巡航形態時):77.8m
本体重量:196.8t　全備重量:283.9t
ジェネレーター出力:21460kw
センサー有効半径(陸上時):12800m
(ソナー/水中):240000m
スラスター総推力:226t
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:リフレクタービット　拡散メガ粒子砲
大口径メガ粒子砲　大型アンカーネイル

ZEON

[Introduction]

科学者は自由に生きた

ローレン・ナカモト。ジオン・ズム・ダイクンを端とした「ニュータイプ論の影響を受け、科学的に新人類の存在を追求した男である。彼は研究に魅入られた典型的な科学者と言え、科学者であり続けるためだけに生き、一切の拘りなく連邦・ジオンを問わずあらゆる機関を渡り歩いてきた人物だった。

そんな彼の道程の一つに、地球連邦軍に属する北米のオーガスタ研究所があった。「ニュータイプ自身の研究に加え、人工的に「ニュータイプの力を作り上げることを主題としていたその場所では、一般兵でもサイコミュ兵器を扱えるようになる「準サイコミュ」の研究が進められていた。

「強化人間」と呼ばれる、パイロット自身に「ニュータイプ能力を備える技術も先行してはいたが、被験者に対しての薬物投与や洗脳行為など、人体に精神障害を来す不安定な問題を抱えていたことに対し、パイロットの資質を選ぶ必要のない準サイコミュシステムは、コスト的見地から見ても多大な期待が寄せられていたのである。



LOREN NAKAMOTO

E.F.S.F.

[Development]

研究の限界

準サイコミュにはローレン・ナカモトも携わっており、彼が過去に研究していたという特殊OSの知識も多いに役立ったとされるが、これまでの技術概念に囚われることなく意欲的な開発が日々行われた。

有線式準サイコミュ誘導兵器「インコム」を搭載した試作機の開発をもって、一応の成果を見せた本技術ではあったが、サイコミュ技術自体の蓄積に乏しい連邦軍ではこれ以上の発展は望めず、その研究は一旦袋小路へと陥る。

だが、転機は意外なタイミングで訪れた。戦乱の中、ローレンがアクシズのネオ・ジオンに亡命し、その際にオーガスタ研究所で開発した試作モビルスーツ一機を献上したのである。――そのモビルスーツには、準サイコミュシステムが搭載されていたのだ。

...next [Turn-01]

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume010_AMX-014

[Turn-01]

袖付きドーベン・ウルフ、という機体

技術の結晶

強火力と高機動を追求した結果、機体の大型化を招き、さらには「ニュータイプ能力を持つパイロットのみが搭乗する」ことを許されたネオ・ジオンの第4世代モビルスーツにあって、はじめて一般兵士が扱える一体として完成を見たのがPMX-014《ドーベン・ウルフ》である。

連邦と時に同じくして、ネオ・ジオンでも準サイコミュの開発は進められていたが、そのレベルはきわめて低く、結実当初にニュータイプが搭乗しなければ使用不可能という本末転倒なものだったという。

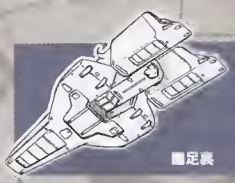
二次の実用化を見た連邦の準サイコミュが発展のためにネオ・ジオンの技術を必要としていたことに対し、一方のネオ・ジオン側での準サイコミュ技術がはるかに劣っていたという事実は真に皮肉な話である。

しかし、ローレンがネオ・ジオン側の技術開発に参加したことにより、そのボトルネックは解消され、準サイコミュ技術は恐るべき速度で進化を遂げ――《ドーベン・ウルフ》という姿を持って結実したのだ。

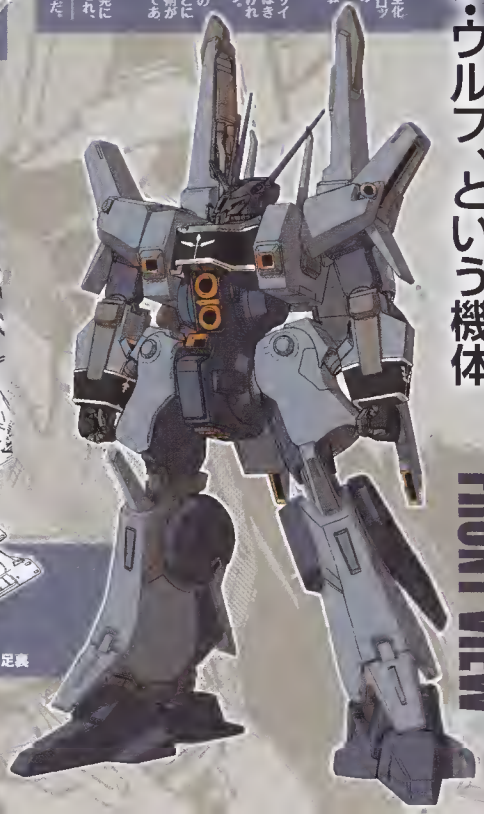
■ヘッドユニット



■胸部メガ粒子砲



■足裏



FRONT VIEW



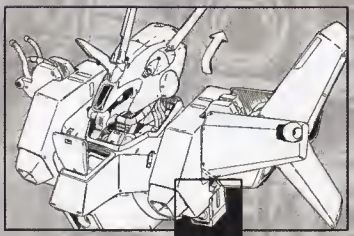
ORX-013 GUNDAM MK-V

SPEC
頭頂高:22.8m
本体重量:39.0t
全備重量:85.3t
ジェネレーター出力:5320kw
スラスター総推力:111200kg
センサー有効半径:12000m
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ビーム・サーベル
ビーム・ライフル
背部ビーム・カノン
インコム
シールド

■CHECK
通称を《G—V(ジー・ファイブ)》とする連邦のオーガス研究所で開発された準サイコミュ搭載型試作MS。誘導兵器インコムを2基装備しており、これまでニュータイプ能力を持つ特殊な人間のみしか可能としなかったオールレンジ攻撃に近い戦法を実現した。外観、特に頭部はおおよそガンダムとは似つかぬ印象であるが、あくまで連邦の「ガンダム信仰」からくる、斬型システムを踏襲するためのネーミングと言える。合計3機が試作され、ローレンがネオ・ジオンに譲渡した1機とは別に、実戦参加した機体もあったという

■CHECK
「恐竜的」進化と評されるこの時代のMSと比較しても、本機に備えられた武装数は非常に多い。胸部下に隠されたロケット・ランチャーを見ても、あらゆる箇所に兵装を入れ込む徹底ぶりが容易に窺えるというものだ

■コックピット・ハッチ開閉



■グレネード・ランチャー

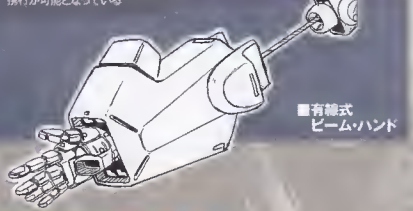


■CHECK
ドーベン・ウルフのマニピュレーターは高圧電流発生機能と掌部分にビーム兵射口が備わった独特な性能・形状を持つ。有線式ハンドは一般機の装備であり、指揮官機の場合はレーザー通信による遠隔操作を行える別ユニットに変更されているが、改良が施された準サイコミュシステムを持ってしても、そのコントロールはきわめて難度の高いものであったという。射出後は隠し腕が出現し、あくまで補助的ではあるがビーム・サーベルやメガ・ランチャーの携行が可能となっている

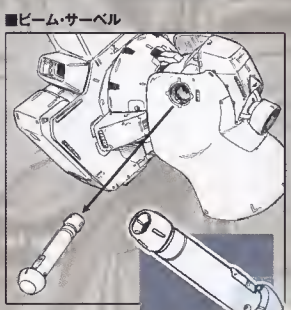
■指揮官機用ビーム・ハンド



■有線式ビーム・ハンド



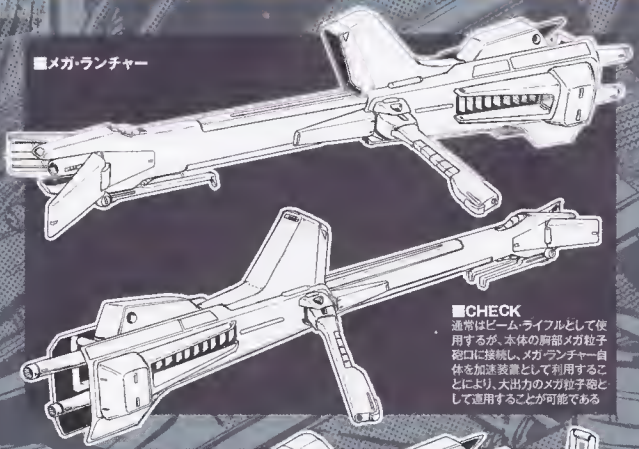
■ビーム・サーベル



[Turn-02]

袖付きドーベン・ウルフ、という機体

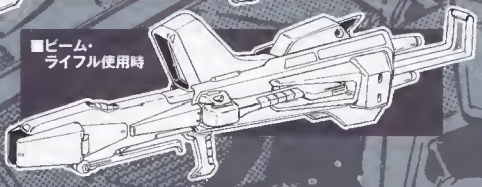
■メガ・ランチャー



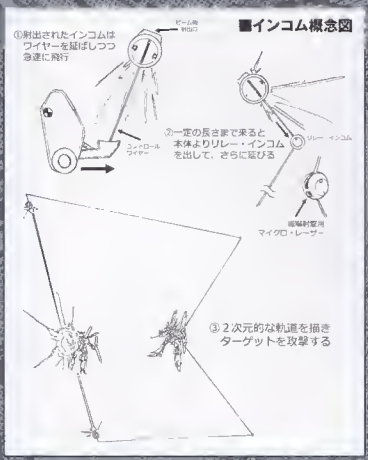
■CHECK

通常はビーム・ライフルとして使用するが、本体の肩部メガ粒子砲口に接続し、メガ・ランチャー自体を加速装置として利用することにより、大出力のメガ粒子砲として運用することが可能である

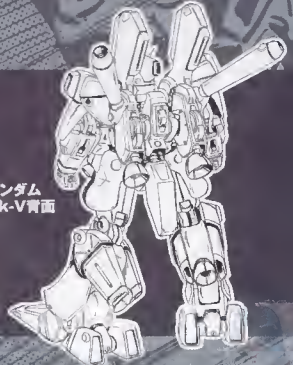
■ビーム・ライフル使用時



■インコム概念図



■ガンダムMk-V背面

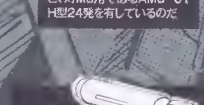


REAR VIEW



■背部ミサイル

■CHECK
ビーム兵装だけではなく、本機は実弾兵器に関しても抜かりない。長大な射程を持つ対艦用ミサイルAMS-09R型2発と、対MS用であるAMS-01H型24発を有しているのだ



■AMS-01H

■CHECK
本機の開発には、サイコ・ガンダムMk-Ⅱの機体データも使用された。ベース機と比較して内装兵器が圧倒的に増加しているのも、サイコ・ガンダムシリーズの要塞的運用の影響が強い

群れた狼の狩り

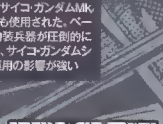
連邦軍の試作モビルスーツ、ORX-013《ガンダムMk-V》をベースに開発された本機は、モビルアーマー級の大型ジェネレーターを主動力源とした、まさに「恐竜的」な素地をもち、脚部のメガ粒子砲をはじめ、ビームや実弾を問わぬ多数の内装武器を有していた。

さらには大型・大出力携行火器であるメガ・ランチャー、ベース機のそれからさらに洗練されたインコム、シオン独自の有線式ビーム・ハンドという二つの遠隔兵器も加わり、もはや過分とも取られかねないものであったが、本機の基サイコミュ装置は、サイコミュ技術の発祥であるシオンの技術と融合したことによって、有線式誘導兵器の進化のみならず、非ニュータイプパイロット単独による全ての火器管制を可能としていた。

20m超えの大型機体とは言えど、あくまでモビルスーツサイズの範疇にあった本機は、その枠内で要塞クラスの恐るべき重火力を手にしたのである。

宇宙世紀0088年にロールアウトした《トーベン・ウルフ》はその卓越した能能を軍上層部に買われ、ネオ・シオンの精鋭部隊に優先して配備が行われた。

軍内でも生粋の武人と評されたラカン・ダカラン大尉を隊長とする「スペース・ウルフ隊」で運用され、優れた連携で大物狩の群れを想起させる戦いを見せたが、あくまでラカン個人の統率力によるものであり、潤沢な武装を用い、圧倒的火力で押し込めるとする本来の持ち味を示せたかといえば、幾分の疑問が残る戦果とも評せたのである。



■インコム射出状態

...next [Conclusion]

宇宙世紀0089年の第一次ネオ・ジオン戦争終結後、ドーベン・ウルフは大きく分けて二つの運命を辿った。一つはネオ・ジオン残党軍の戦力として再びジオンに息づいた機体、そしてもう一つは地球連邦軍に接収され、ローレンの亡命によって破壊していた準サイコミュの技術研究用として改修された機体である。後者の改修・解析作業にはローレンと共に研究を行ってきた元オーガスタ研究所のスタッフが多数動員されたといわれている。「狼」の名を冠したMSに対し、「銀の弾丸」という皮肉めいた開発コードを名付けるあたり、多分に複雑な感情が絡んでいたことは容易に想像が付く。改修機は無事完成し、後のサイコミュ開発に貢献したほか、機体自体も想定数値を大幅に越える良好な性能を示したとされ、テスト完了後はAE社の関連企業の管理下にあるという。それぞれの道を歩んだ兄弟機は、再び出会うことがあるのだろうか。歪曲な因縁すら紡ぎ続けてきた宇宙世紀なら、あるいは……

The lone wolf is in danger of the silver bullet.

[Conclusion]
狼は、孤高を知る

宇宙世紀0096年。《ドーベン・ウルフ》は『袖』を着いていた。フル・フロンタルを首魁とするネオ・ジオン残党軍の本拠地、《バラオ》の戦力として配備されていた本機は、その身に収めた武装類をことごとく切り離させることなく、全てが当時のままの力を保っていた。

アクシズのネオ・ジオン降着の際に脱出した残存機体と、宙艦として旦は身をやつしながらも、残党軍の蜂起を聞き及び、再びジオンの武人として帰還した機体が全てであり、同一機体で満遍なく小隊を組むことすらままならない状況であったが、《ドーベン・ウルフ》にとっては、ある意味僥倖と呼べるものだったのかもしれない。

というのも、連携戦術で扱うには贅沢すぎる武装を備えた本機には、基本的に単独運用、もしくは基本連係さえ抑えていればよい他機種との小隊行動を強いられる現状の方が、憎しみなく全ての性能を発揮できたからなのである。

サイコミュ搭載モビルスーツ、さらにはそれを扱う能力者すら圧倒的に不足していた残党軍では、準サイコミュ機である本機は特に重視され、軍内でもエース級の技量を持ったパイロットに優先して回されたという。

――一匹狼という言葉がある。群れで狩りを行う狼の法則にあって、それを拒むはぐれ者の意。望んで孤地に立つ矛盾をはらんだ言葉とも言えるのだが、量産機でありながら、群れることを不得手とした《ドーベン・ウルフ》には、似合いの言葉と思えてならない。

AMX-014 DÖVEN WOLF (THE SLEEVES)

SPEC

頭頂高	22.0m
本体重量	36.8t
全備重量	74.5t
ジェネレーター出力	5250kw
スラスター総推力	87300kg
センサー有効半径	12000m
装甲材質	ガンダリウム合金
武装	メガ・ランチャー
	ビーム・ライフル
	胸部メガ粒子砲
	肩部ビーム・キャノン
	ビーム・ハンド
	インコム
	ビーム・サーベル
	30mmバルカン
	ロケット・ランチャー
	対艦ミサイル
	ミサイル

[Introduction]

本来の姿

一般機のそれよりも広範囲に施され、より華美な印象を強めた「袖付き」たる所以のマーキング。換装された肩の大型スパイク・アーマーが際し出す、きわめて攻撃的なシルエット。

そして従うべきフル・フロンタル専用モビルスーツ（シナンジュ）との連携を取るため、推力の大幅な強化が図られたとされるAMS-129〈ギラ・ズール〉の親衛隊仕様機。

いわゆる「袖付き」の主力モビルスーツのカスタマイズバージョンという立ち位置にある機体なのだが、実はこの仕様こそ既に導き出されていた〈ギラ・ズール〉本来の標準スペックであったという。

AMS-129
GEARA ZULU
〔GUARDS TYPE〕

[development]

MSバリエーション

コスト問題により完全なスペックでの主力量産計画は見送られ、結果的に前主力機である〈ギラ・ドーガ〉の後継と呼ぶには若干の物足りなさを感じさせるレベルでロールアウトせざるを得なかった〈ギラ・ズール〉というモビルスーツ。

いかにも親力、物資面に困窮していた「袖付き」らしいエピソードではあったが、開発に携わった技術者達にとって本機が自軍の根幹をなす新型機であることに間違いなく、〈ギラ・ズール〉をベースとした様々な技術探索が積極的になされていた。

一年戦争時、モビルスーツの黎明期であったことも手伝ってか、おびただしい種類のバリエーション機を生み出したジオン公国軍の〈ザクII〉限定された手札の中で新戦力を生み出すしかなかった「袖付き」の開発陣は、その中からある機体に着目する。〈ザクII〉をベースとしながら、もはや原形をとどめぬ姿と化したその試験機は、彼らが求めていた次なる力への道筋と完全に合致していた。

...next[Turn]

【Turn】クラーケ・ズール、という機体

足のない巨人

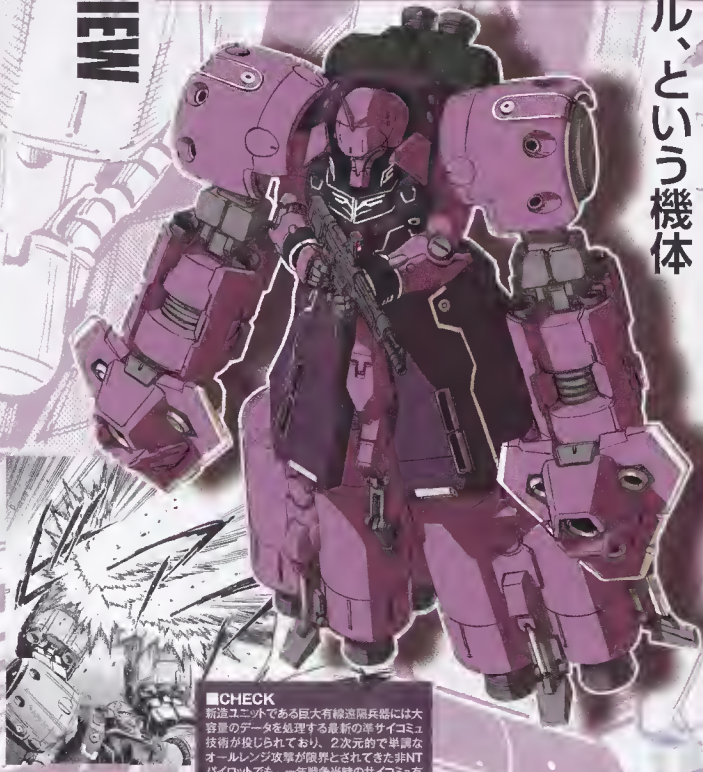
ジオン独自の技術として完全に確立していたサイコミュ遠隔兵器のさらなる発展、二つを同時に受け入れた《ザクII》試験機のコンセプトを今一度現在の技術レベルで再現昇華する、それがYAMS-130《クラーケ・ズール》なのだ。

既存パーツの改良による性能付加ではなく、新造ユニットを増設する外骨格的強化の方向性で設計が進められた本機。それを一見して理解させるべく、肩部から新たに生えた巨大な放熱板は、高出力のメガ粒子砲を備えた有線式遠隔兵器として機能する。

下半身には機体名称の語源となった海棲の軟体動物を想起させる8本の足、ならぬ大推力スラスターポッドが配され、機体全体が醸し出す特異なフォルムを際立たせているのだ。

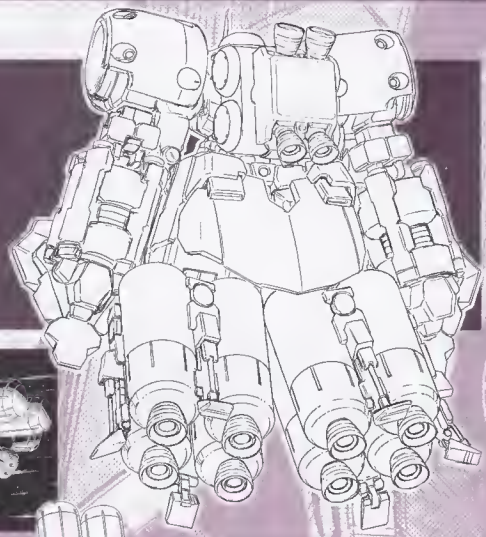
その母体に使用されたのは本来のスペックを備えた《ギラ・ズール》親衛隊機でなければならなかった。要求された試験レベルに耐えうる強さと、それを受け入れる柔らかさを併せ持った汎用モビルスーツは「初代さ」において「この最新機以外に考えられなかったのである。

FRONT VIEW

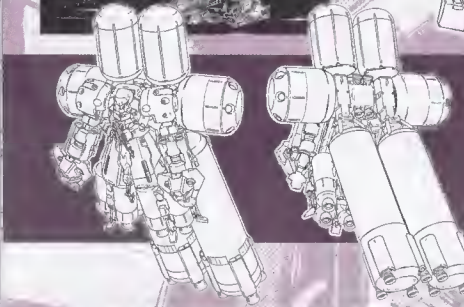


■CHECK
新造ユニットである巨大有線遠隔兵器には大容量のデータを処理する最新の準サイコミュ技術が投じられており、2次元的で単調なオールレンジ攻撃が限界とされてきた非NTパイロットでも、一年戦争当時のサイコミュ有線兵器並の再現運用が可能となっている

REAR VIEW







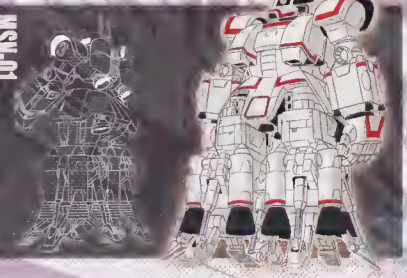
■大型プロペラント・ブースター装備

クラーケとは、独語で「タコ」の意を持つ。その由来となった脚部のみならず、背部バックパックの推力も向上している本機には、さらなる長距離航行を可能とするプロペラント一体型の追加専用ユニットが存在する。本体を置い噂さんばかりの巨大さを誇るというそのユニットは、本機のシルエットを実守する生物から、さらに異質な怪物へと変えるのだ

MSN-01 PSYCHOMMU SYSTEM ZAKU

SPEC
頭頂高：17.2m
本体重量：65.4t
装甲材質：超硬スチール合金
武装：
有線式5連装メガ粒子砲

■CHECK
一年戦争当時、高速機動時における有線誘導式ビーム砲の運用試験のために開発された機体。ザクIIをベースとしながら、サイコミュ装置搭載に伴う機体の大型化により、ベース機体の面影は皆無に等しいものとなった



...next [Conclusion]

bud just ready to burst



■CHECK

アンジェロ・ザウパーがパイロットに選定された理由の一つに、並行して開発が進められていた彼専用のサイコミュ搭載MSへの円滑な機種転換を行うためであったという意見もある。単サイコミュ・システムをベースに、常人すら感応波を高める作用をもたらすとされるサイコフレームを組み込んだ新型機には、敵MSのサイコミュ機能を封じる新兵装が採用されていると言うが……

アンジェロ・ザウパー
Angero Sauper

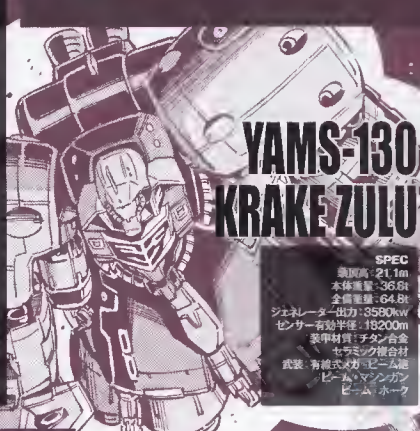
フル・フロンタルの側近であり、弱冠19歳ながらも親衛隊の隊長を務める大尉。搭乗MSのパーソナルカラーはパープルで、非ニュータイプだが操縦技量は極めて高いレベルを誇る。フロンタルに心酔し、バナージ・リンクスに異常とも呼べるほどの粘着質な反感を抱いている

[Conclusion]
選ばれた必然

《クラーケ・ズール》は技術試験機としての意味合いが強いモビルスーツであったが、「神付き」の台所事情を鑑みるに、本機を試験運用のみで終わらせる余裕は無論なく、本機は当初からデータの収集＝実戦データという考えの元、即時実戦投入が可能な調整を施されつつ開発が進められていた。

テスト・パイロットの選定も、これだけの大推力を掌握できる操縦技量且つ、実戦にも長けた資質を持つ人間に限定され、その条件を全てクリアした選ばれし者は、軍内においても選ばれし者――フル・フロンタルという主に付き従う親衛隊の隊長である、アンジェロ・ザウパー大尉が担当することとなった。

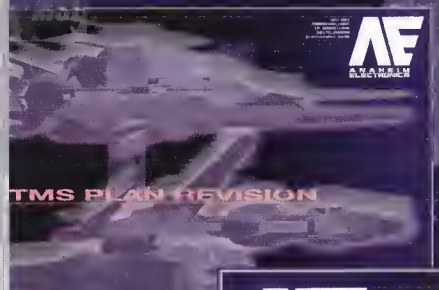
「バンデシネ」と銘打たれた戦闘記録によれば、「神付き」の本拠地「バラオ」を強襲した連邦軍による通称「ビリヤード作戦」において、紫のパーソナルカラーに彩られた《クラーケ・ズール》が実戦参加したという。素体を深く知る大尉の手によって、初出撃ながらも長年の愛機であるかのような親和性を示したとされる。



YAMS-130
KRAKE ZULU

SPEC

全高	21.1m
本体重量	36.8t
全備重量	64.8t
ジェネレーター出力	3580kw
センサー有効半径	18200m
装甲材質	チタン合金 セラミック複合材
武装	有線式メガ・ビーム砲 ビーム・マシンガン ビーム・ホーク



[Introduction]

可変する機体

モビルスーツ開発において、特にTMST（Transformable Mobile Suit＝可変モビルスーツ）の開発は困難をきわめたと言える。

大型の可変モビルアーマーではなく、モビルスーツサイズを基点とした複雑な変形機構を実現するためには、既存技術の延長だけでなく、根本的なイノベーションが求められていたのだ。

結果的に内骨格技術「ムーバブルフレーム」の確立によってその光明は見出され、アナハイム・エレクトロニクス（AE）社が開発した傑作機であるMSZ-006〈Zガンダム〉が誕生することになるのだが、そこに行き着くまでの過程には多くの試作モビルスーツが存在したのである。



[Development]

本来の仕様

設計当初はTMSとして開発が進められていたが、変形時のフレーム強度問題によって、変形機構がオミットされてしまった経緯を持つ黄金の機体、MSZ-001OO〈百式〉もその中の一機であった。

宇宙世紀0087年のグリプス戦役に投入された〈百式〉は高速戦闘用モビルスーツとして非凡な性能を発揮、後にMSN-001OOS〈百式改〉を初めとする独自の発展機を生み出すなど、後世に名を残す名機となった。

これは〈百式〉が本来目指していた仕様が当時の技術レベルでは実現しなかったものの、設計時点での完成度がきわめて高かった証左でもあり、その機体開発に携わった技術者の弁によれば、〈Zガンダム〉と比較してもなんら遜色のない想定数値を叩きだしていたという。

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume012_MSN-001

...next[Turn]

[Turn] デルタガンダム、という機体

■CHECK
デルタガンダムの開発が進められていた宇宙世紀0080年代中盤ではすでに標準的な携行武装と言えるほどに普及していたが、同時期のTMS計画機向けに設計されたライフルはロングタイプとなり、出力・射程共に優れている。同型のものがガンダムMk-Ⅱの発展機にも採用された

■ビーム・ライフル

FRONT VIEW

[MSN-004]

WAVE RIDER



■シールド



REAR VIEW

■CHECK
ウェイブライダー形態時には機首となるデルタガンダムのシールドは、先端部分にセンサーユニットを内蔵するなど、従来のMSにおける防御兵装としての機能性よりも、TMSならではの変形用サブユニットという考え方の基に設計が行われている

夢幻のデルタ

開発コード《デルタガンダム》と呼ばれたTMSは、大気圏内外を問わぬ全領域到達が可能な可変機として、意欲的な設計が進められていたという。

空力に優れた可変翼として機能し、飛行能力を高めるフレキシブルバインダーは、モビルスーツ形態時においても独立した背部可動ユニットとなり、内部フレームを露出させるほどの徹底した全部軽量化も加えて、本機の機動性能はきわめて高い想定数値を示していた。

外部装甲には耐ビーム・コーティング特性を持つ黄金色のエマルジョン塗装が施され、外観からしても紛うことなく新世代の機体であることを主張していたのである。

結果的に当時の技術的限界によって、全ての実現は幻となってしまったが、その面影は前述した《百式》に受け継がれ——そして長い年月を経て、幻は意外な形で現出する。

...next [Conclusion]



MSN-001 DELTA GUNDAM

SPEC
武装：60mmバルカン砲
ビーム・ライフル
ビーム・サーベル
ビーム・ガン
シールド
その他・不明

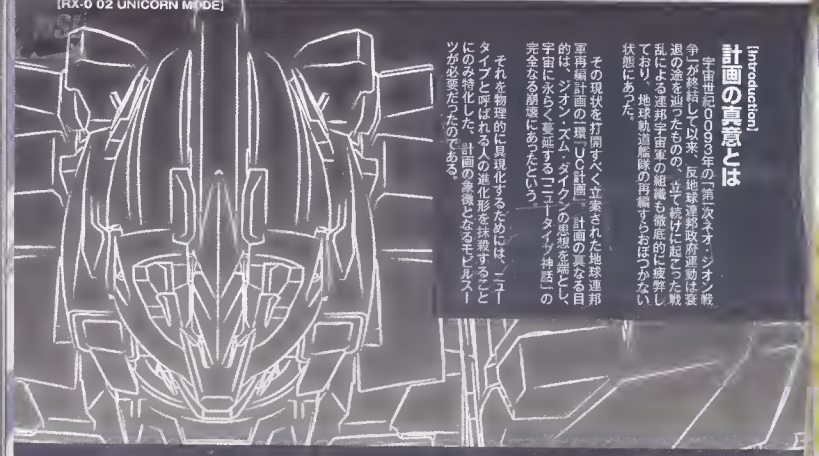
【Conclusion】

幻影は電脳に潜んだ

まさに早すぎた設計思想を持った《デルタガンダム》は、公的に試作機が生産された記録すら残っていない状況下で、もはや開発に関わった人々の記憶からも忘れられようとしていた。

だが宇宙世紀0090年、本機の設計データを基とした《MSN-001A1 デルタプラス》が完成する。連邦軍の試作TMSとして、本流から外れたテストベッドの意味合いが強い機体ではあったが、実戦参加した際においても、現行機体と遜色のない戦果をあげたのは、読者諸氏の記憶にも新しいところであろう。

そんな《デルタプラス》のOSには、開発技術者による小さな悪戯が仕込まれていた。シミュレーターモードの選択機体に、《デルタガンダム》のデータがプログラミングされていたのだ。さらに幻の黄金"変機"を駆るパイロットAは、その機体に乗り換えたエースパイロットの戦闘データが反映され、仮想の宇宙にまるで本物の彗星を想起させる機動を見せたのだという。



[Introduction]

計画の真意とは

宇宙世紀0093年の「第次ネオ・ジオン戦争」が終結して以来、反地球連邦政府連動は衰退の途を辿ったものの、立て続けに起こった戦乱による連邦宇宙軍の組織的に疲弊しており、地球軌道艦隊の再編すらおぼつかない状態にあった。

その現状を打開すべく立案された地球連邦軍再編計画の一環「UC計画」。計画の真なる目的は、ジオン・ズム・ダイクンの思想を端とし、宇宙に永らく蔓延する「ニュータイプ神話」の完全なる崩壊にあったという。

それを物理的に具現化するために、ニュータイプと呼ばれる人の進化形を抹殺することにのみ特化した、計画の象徴となるモビルスーツが必要だったのである。

PROJECT UC

[Development]

ユニコーンガンダム

そのモビルスーツは、考えうる最高の技術とスタッフを総動員し、AEU(アナハイム・エレクトロニクス)社によって極秘裏に生み出された。その名もRX-0(ユニコーンガンダム)。

機体名称の由来ともなった一角獣の姿を想起させる純白の1号機は、ある人物の手引きにより、地球連邦政府の根幹を揺るがす謎を秘めるとされる「ラプラスの箱」を開く鍵として「UC計画」から大きく外れた運命を辿ることになってしまう。

だが、そんな想定外の出来事も、計画の完遂には ごくごく些末な問題でしかなかった。(ユニコーンガンダム)は、もう一機存在していたのだから。

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume013 RX-0 02 UNICORN MODE

...next[Turn]

バンシィ、という機体 [Turn]

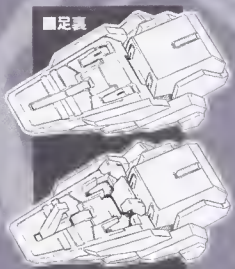
FRONT VIEW

■ビーム・サーベル



■CHECK
前腕部と背面に計4基装備する近接用兵器。ユニコーンモード時は前腕部のサーベル・ホルダーから取り出す。増加装備である左腕のアームド・アーマーVNの装備時においても、ビーム・サーベルの展開機構は阻害されない

■足裏

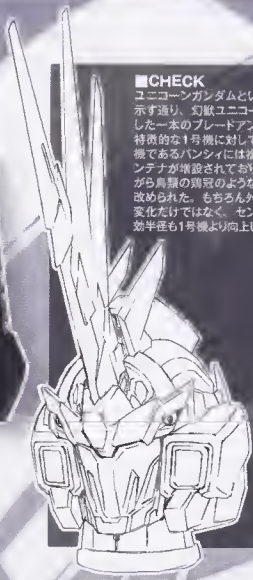


ツメの展開

■CHECK
カーディアスの意向によって1号機に組み込まれた『ラプラスの箱』の鍵となり得るLa+（ラプラス）プログラムは、一定の条件下においてNT-Dと連動することにより、箱の手がかりを段階的に指し示す。結果的に1号機を託されたバナージの希望として作用していくのだが、『UC計画』からすればただの不純物でしかない。予定通りのスペックを備えたバンシィは、一点の曇り無く使命を全うする

REAR VIEW





■CHECK
ユニコーンガンダムという名が示す通り、幻獣ユニコーンを模した一本のブレードアンテナが特徴的な1号機に対して、2号機であるバンシィには複数のアンテナが増設されており、さながら鳥類の鶏冠のような印象に改められた。もちろん外見上の変化だけではなく、センサー有効半径も1号機より向上している

■ヘッドユニット

■CHECK
ユニコーンガンダムのコックピットは、当時の連邦系MSの主流となりつつあった94式全天周リニアシートではなく、専用開発の独自規格が用意された。これは『NT-D』と呼ばれる特殊システムとの連動を考慮しての採用だといわれている



■コックピットシート

黒いユニコーン

白磁を思わせる1号機の機体色とは対照的に、漆黒を基調とした黒い《ユニコーンガンダム》――それが通称《バンシィ》と呼ばれる2号機であった。

月のグラナダ工場で1号機と共に建造された本機もまた、ムーバブル・フレーム二式をサイコフレームにより構成するフル・サイコフレーム方式が採用されており、既存モビルスーツを大きく凌駕する力を与えられている。

連邦とAE社に多大な影響力を持つビスト財団当主カーディアス・ビストの思惑によって、建設中のL1工業コロニー《インダストリアル7》へ移送された1号機が新たなる使命を植え付けられている間、先行して地球のオーガスタ研究所に降ろされた2号機は、引き続き重力下試験の実施、1号機から得られた空間機動データをフィードバックするなど「計画の中核」としてあるべき最終調整を受けており、同型機といえども総合的な完成度はきわめて高いレベルに到達していたのだ。

...next [Conclusion]

RX-0 02 UNICORN MODE

■CHECK
従来のMSには見られない特徴を持つユニコーンガンダムにとって、特に際立っているのが「NT-D」と呼ばれる特殊システムの存在である。1号機にも見られた変形……もはや変身と形容せざるを得ない姿を機体にもたらせ、圧倒的な力で敵性サイコミュMSを破壊するNT-Dは、勿論2号機であるバンシィにも実装されている。全身から血のような赤い燐光を放ち、苦しむように機動するとの証言がある中で、獲物を見つけた喜びを表現するように明るい光を放っていたとも言われているのだが、バンシィはどのような姿を我々に見せるのだろうか

Wake not a sleeping lion.

[Conclusion]

目覚めの刻は近い

完璧を期して調整された「バンシィ」の両腕には、1号機にはない異形の篭手が備わっていた。「アームド・アーマー」と呼ばれるそれは、機体にさらなる機能向上をもたらす専用装備であり、多様な特性を持つガンダリウムフレームの"共通性"に着目した技術者によって開発されたといわれているが、その詳細はいまだ明らかになることだろう。

あらゆる面において1号機より秀でた力を与えられた2号機《バンシィ》。見た目からも純粋、無垢とは相反する黒と金の機体色に包まれながら、「UC計画」を確実に果たすべくして生み出された純然たる《ユニコーンガンダム》と表現できるのである。

兵器が、兵器たる所以を見せつける日はすぐそこまで来ている。――《バンシィ》という、死を宣告する妖精の名をもつモビルスーツは、それを迷うことなく示すことだろう。

RX-0
UNICORN GUNDAM 02
[BANSHEE]
UNICORN MODE

SPEC
頭頂高：19.7m
本体重量：24.0t
全備重量：46.7t
ジェネレーター出力：3480kw
スラスター総推力：142600kg
センサー有効半径：23500m
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：ビーム・サーベル
アームド・アーマーBS
アームド・アーマーVN
60mmバルカン砲

...next [GUNDAM UC episode 5 "The Black Unicorn"]

[Introduction]

漆黒の2号機

《バンシィ》とは地球連邦軍再編計画の一環「UC計画」の中核としてAE(アナハイム・エレクトロニクス)社が秘密裏に開発していたフル・サイコフレーム試作機、RX-0《ユニコーンガンダム》2号機の通称である。

月の《グラナダ》で1号機と共にロールアウトした《バンシィ》は、先行して地球の「オーガスタ研究所」に降ろされたのち、重力下試験の実施や1号機から得られた空間機動データをフィードバックするなど計画の中核としてあるべき最終調整を受けており、同型機といえども総合的な完成度はきわめて高いレベルに到達していた。



[Development]

ユニコーンモード

全身の内骨格を最新のサイコミュ技術で構築した「フル・サイコフレーム構造」が採用されるなど、独自のメカニズムを有する《ユニコーンガンダム》だが、「ユニコーンモード」のシルエットは、意外なほどシンプルな印象を見る者に与える。

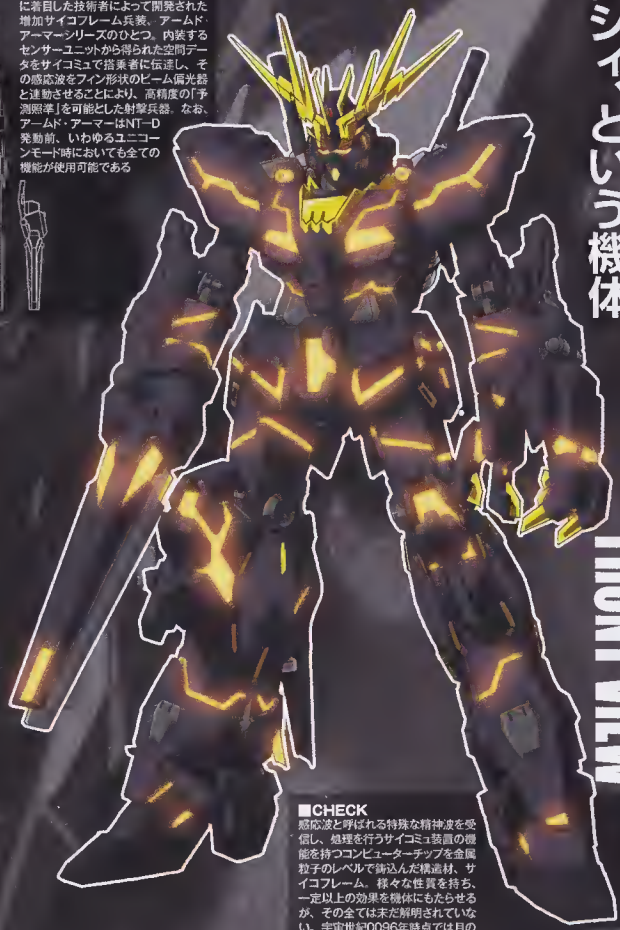
ここで二つの疑問点が発生する。別形態へと可変する「MS(可変モビルスーツ)には分類されないこの機体にあって、なぜユニコーンモードという状態名称を銘じる必要があるのか。

その疑念は、《ユニコーンガンダム》のみに搭載された特殊システム「NT-D」が真価を発揮することにより、全て晴らされるのである。

...next[Turn]

[Turn] バンシィ、という機体

FRONT VIEW



アームド・アーマーBS
【armed armor bs】

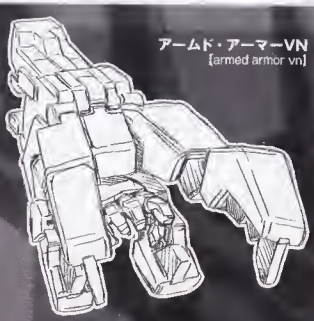


■CHECK
サイコフレーム同士が生み出す共鳴性に着目した技術者によって開発された増加サイコフレーム兵装。アームド・アーマーシリーズのひとつ。内装するセンサーユニットから得られた空間データをサイコミュで搭乗者に伝達し、その感応波をフィン形状のビーム偏光器と連動させることにより、高精度の「予測照準」を可能とした射撃兵器。なお、アームド・アーマーはNT-D発動前、いわゆるユニコーンモード時においても全ての機能が使用可能である

■CHECK
感応波と呼ばれる特殊な精神波を受信し、処理を行うサイコミュ装置の機能を持つコンピューターチップを金属粒子のレベルで鋳込んだ構造材、サイコフレーム。様々な性質を持ち、一定以上の効果を機体にもたらせるが、その全ては未だ解明されていない。宇宙世紀0096年時点では月のグラナダ工場にのみ製造設備が存在し、機密保持も兼ねて一括管理されている。ユニコーンガンダム共通の骨格素材として採用され、デストロイモード時には謎の発光現象を伴う

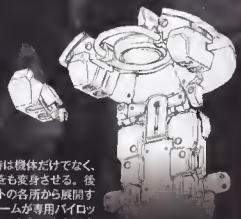
REAR VIEW





アームド・アーマーVN
[armed armor vn]

■CHECK
搭乗者の感応波を受信した際にみられるサイコフレームの大幅な強度向上、いわゆる被弾性のみに注力して開発された増加サイコフレーム兵装。外装にはコーティングが施されており、通常のシールドと変わらない対ビーム性能を持つ。貨量兵器としても極めて優秀だが、その真価はサイコフレームを基部とする4本のクローユニットが展開した際に発揮される。黄金の爪は。あらゆる対象を破砕する「超振動」効果を生み出すのである



■CHECK
デストロイモード時は機体だけでなく、コックピットシートをも変身させる。後方へ傾斜したシートの各所から展開するピンディングフレームが専用パイロットスーツに接合し、パイロットを固定する。圧倒的なGを生み出す故の保護目的と表現するよりは、機体の一部として完全に取り込むようにも思わせる

デストロイモード

対ニュータイプ用モビルスーツとしての秘められた力「NTD(ニュータイプ・デストロイヤー)」は、戦闘域において敵性サイコミュ・モビルスーツと遭遇することによってシステムが発動。

内部フレームを拡張し、全身の体型が変貌を始め――もはや機体が「変身」したとしか表現できない姿、デストロイモードへと移行するのである。

もちろん姿形が変わるだけではない。機動性をはじめとした総合性能を飛躍的に向上させ、性能面においてもユニコーンモードとは明らかな違いを示すのだ。

さらに同モード時には、通常の操縦方式に「インテンション・オートマチック・システム」が付加される。これはパイロットの感応波がダイレクトに全身のサイコフレームへと伝達し、遅延無く「ハンシン」の機動を促す。要は「操縦する必要がない」のである。



■コックピットシート

...next [Conclusion]

【RX-0 02 DESTROY MODE】

■CHECK

ユニコーンモード時の頭部中央に配されたブレードアンテナは、敵性サイコミュMSが発する感応波を受信することに重点が置かれた一方、デストロイモードへの移行時にはアンテナがV字に割れ、送信能力が飛躍的に高まる仕様となっている。これは相手のサイコミュ装置を支配下に置く「サイコミュ・ジャック」機能を効果的に行うための、必然性を持った変形なのである。また、その際にフェイスカバーが展開し、いわゆるガンダムフェイスがあらわになる事象については、連邦軍の再編に併せてニュータイプ神話にまみれたジオンを根絶する「UC計画」――その象徴として相応しいモチーフに、連邦の歴史において勝利の象徴でもあった「ガンダム・タイプ」が採用されることに異論はなく、ある意味これも必然から来たものだと言えよう

■CHECK

特別なMSと表現できるユニコーンガンダムには、同様に特別な能力を持つパイロットを必要としていた。サイコミュ装置を扱える選ばれた資質を持つ――いわばUC計画が根絶しようとしていたニュータイプでなければ、この機体の真価を発揮することは出来なかったのである。きわめて皮肉な話だが、禁忌の技術なら、ニュータイプでなくともそれを可能とする。そう、強化人間と呼ばれた憐れしかならば。もちろんUC計画の一環には、強化人間を用意するプランも立ち上がっていたようだが、バンシィは死を宣告する妖精の名に相応しいパイロットを自身へ引き寄せたのだ

【conclusion】金色の爪牙の行く先

「射て通常のビーム・ライフル4発分の出力を誇る携行火器「ビーム・マグナム」を筆頭に、いわば瞬間最大戦力を行使する設計がなされた「ユニコーンガンダム」の基本装備に加え、並行して開発が行われていた専用増加サイコフレーム装備「アームド・アーマー」を両腕に装着し、継戦能力に留まらない大幅な戦力向上を果たした2号機。

運命の悪戯をも感じさせる経緯により導かれたパイロットをその身に宿し、全てのピースが揃った本機の力は、UC計画を歪めた純白の1号機に対して行使されることとなった。

黒と金の機体色から真金の閃光を放つ「バンシィ」の姿は、一角の幻獣の名を冠しながら、もはや百獣の王である「獅子」を想起させる。それは幻想を打ち砕く現実という意味を纏いながら、与えられた爪牙を可能性の獣へ無慈悲に振るうのである。



RX-0
UNICORN GUNDAM 02
BANSHEE
DESTROY MODE

SPEC
頭頂高：21.7m
本体重量：24.0t
全備重量：43.2t
ジェネレーター出力：計測不能
スラスター総推力：計測不能
センサー有効半径：計測不能
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：ビーム・サーベル
アーム・アーマーBS
アーム・アーマー内蔵
60mmバルカン砲



RGM-86R　ジムⅢ

地球連邦軍の量産型MS。肩や腰にミサイルユニットを装備可能で、支援用MSとしての運用も可能。総体的な性能低下に伴い、現在は後継機であるジェガンへの機種転換が随時進められてはいるが、地上、宇宙軍共に多数の機体が稼動している



[Desert Type Coloer]

頭頂高:18.0m
本体重量:38.6t
全備重量:56.2t
ジェネレーター出力:1560kw
スラスター総推力:81200kg
センサー有効半径:10900m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材+ガンダリウム合金



MSA-005K　ガンキャノン・ディテクター

グリプス戦役におけるエゥーゴの支援組織、カラバによって開発された地上用支援機。メタスの変形機構を流用し、砲撃形態をとることが可能である。グリプス戦役終結後は連邦軍の戦力に組み込まれ、少数が運用されている



頭頂高:18.5m
本体重量:34.3t
全備重量:54.5t
ジェネレーター出力:1780kw
スラスター総推力:64600kg
センサー有効半径:9200m
装甲材質:ガンダリウム合金



RAG-79　アクア・ジム

一年戦争時にジムをベースとして開発された連邦軍の水中用MS。0096年では老朽化が指摘されているが、水陸両用機の意義が薄れたことにより、後継機も開発されぬまま現役で稼動している



頭頂高:18.0m
本体重量:49.5t
全備重量:64.3t
ジェネレーター出力:1280kw
スラスター総推力:89500kg
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材



MSA-003　ネモ

かつてエゥーゴが使用した量産型MS。戦後は連邦地上軍に組み込まれ、運用されてはいるが、相対的な性能低下は否めない。ベテランパイロット達による高い技量でその差を埋め合わせているのが実情のようだ



頭頂高:18.5m
本体重量:36.2t
全備重量:55.6t
ジェネレーター出力:1620kw
スラスター総推力:72800kg
センサー有効半径:10020m
装甲材質:ガンダリウム合金



RMS-108　マラサイ
かつてのティターンズ改撃型MS。連邦機でありながらジオン然とした傑作機は 弱しくもジオン残党軍が入手し、完全な調和を見せる



MS-06K　ザク・キャノン
ザクIIの中距離支援仕様。接収機が連邦戦力として運用された記録もあるが、0096年ではジオン残党軍によって本来あるべき力を示す



MS-0SL　ザクI・スナイパータイプ
旧式化したザクIを再利用するため、長距離狙撃用に改修した機体。大型ランドセルに搭載されたサブ・ジェネレーターを使用し、ビーム・スナイパー・ライフルを稼動させる。0096年では、コンム・カークスの乗機としてジオン残党軍によって運用されている



MS-060　ディザート・ザク
ザク・デザートタイプを反連邦系のゲリラ組織により改修した機体。砂上での移動力は極めて高く、ジオン残党軍の機体としても使用された



AMX-101K　ガルスK
カルスJの派生機。カゾクムの携行火器と同型のビーム・キャノンを装備している。0088年に開発された無名の機体は、0096年において漸く歴史の表舞台に立った



MS-09G　ドワッジ
ドムの最終生産仕様機。戦後に各種の改修を受け、0096年にあっても、本機に備わった陸上機動力の高さを改めて連邦軍に見せつける



MS-09F/TROP　ドム・トローペン
ドムを陸地戦用に再設計した機体。一年戦争末期にアフリカ戦線などに投入されたが、残存機が0096年のトリントン基地襲撃に参戦する



MS-140　デザート・ゲルググ
ゲルググの砂漠戦仕様。砂中索行スコープ、実体弾兵器アームド・バスターを備え、0096年はロケット・ブースター増設機が確認された。



MSM-04G　ジュアッグ
シャプロー攻略戦用特殊MSの一機。両腕に備わる3連装ロケット・ランチャーに加え、機体前部に納められたメガ粒子砲の強大な火力、そして強靭な装甲はなんら衰えることを無く、0096年の連邦首都ダカールを攻略する



MSM-07　ズゴック
ジオン公国が開発した水陸両用MS。アイアン・ネイルとメガ粒子砲、頭頂部のロケット・ランチャーによる高い攻撃力と水陸問わぬ軽快な機動力は、当時のみならず0096年の連邦軍にとっても多大な脅威となる



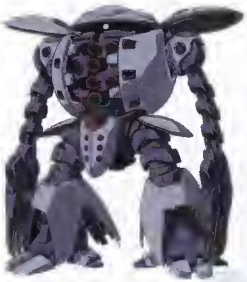
RMS-192M　ザク・マリナー
ジオン軍の水陸両用MSを地球連邦軍が接収、改良した機体を、さらにネオ・ジオン軍によって接収されたという複雑な経緯を持つ



MSM-08　ゾゴック
ズゴックの派生型で、格闘能力向上タイプのMS。伸縮式のアーム・パンチ、ブーメラン・カッターなど、個性的な兵装を有している

MS-08TX/S
イフリート・シュナイド
一年戦争時に開発されたジオン公国軍の白兵戦用試作MSイフリートの改修機。投擲使用が可能なヒート・ダートを多数マウントしている。戦後、その志を失わずに潜伏し続けたジオン残党軍の度重なる改修によって総合性能が向上しており、イフリートの名に恥じぬ地上戦闘能力は0096年においてなお健在である





AMX-109　カプール
過去のネオ・ジオンで開発された局地戦用の水陸両用MS。各部を収納することによって球状の巡航形態へ変形可能。0096年、新旧の水陸両用MSと共に宇宙世紀の海を戦火で彩る



頭頂高:17.5m　本体重量:33.1t
出力:1790kw　総推力:74600kg
センサー有効半径:10900m
装甲材:ガンダリウム合金



頭頂高:17.7m　本体重量:59.1t
出力:976kw　総推力:83200kg
センサー有効半径:4400m
装甲材:超硬スチール合金



頭頂高:17.5m　本体重量:67.9t
ジェネレーター出力:899kw(+700kw)
スラスター総推力:8400kg
装甲材質:超硬スチール合金



頭頂高:18.5m　本体重量:44.7t
出力:1440kw　総推力:8400kg
センサー有効半径:8800m
装甲材:超硬スチール合金



頭頂高:19.5m　本体重量:52.7t
出力:2840kw　総推力:121900kg
センサー有効半径:11200m
装甲材:ガンダリウム合金



頭頂高:18.2m　本体重量:43.5t
出力:1440kw　総推力:126500kg
センサー有効半径:8800m
装甲材:チタン合金+一部ガンダリウム合金



頭頂高:18.5m　本体重量:44.8t
出力:1196kw　総推力:47200kg
センサー有効半径:6320m
装甲材質:超硬スチール合金



頭頂高:19.8m　本体重量:43.7t
装甲材:超硬スチール合金



頭頂高:17.4m　本体重量:137.3t
出力:2660kw　総推力:97900kg
装甲材:超硬スチール合金



頭頂高:18.4m　本体重量:65.1t
出力:2480kw　総推力:83000kg
センサー有効半径:5200m
装甲材:超硬スチール合金



頭頂高:17.5m　本体重量:48.8t
出力:1440kw　総推力:8800kg
センサー有効半径:4600m
装甲材:チタン合金+一部ガンダリウム合金



頭頂高:18.2m　本体重量:77.4t
出力:1688kw　総推力:97400kg
装甲材:超硬スチール合金

頭頂高:17.2m　本体重量:52.4t
出力:2202kw　総推力:77000kg
センサー有効半径:12200m
装甲材:超硬スチール合金
+一部ガンダリウム合金





頭頂高:16.5m　本体重量:38.7t
出力:3680kw　総推力:6800kg
センサー有効半径:12300m
装甲材:ガンダリウム合金

episode 5
「黒いユニコーン」
2012年5月19日～



[introduction]

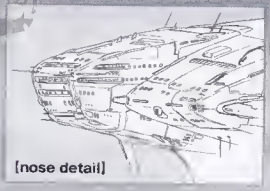
地球の空

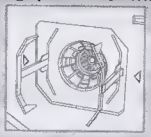
成層圏の高空で永続行動が可能な、宇宙往還機を連絡するプラットフォーム機能を有する超巨大輸送機。それら6機で「地球の防空圏を割り振り、有事即応のモビルスーツ派遣体制を目指した「ガルダ構想」。

地球連邦軍が宇宙世紀0080年代中盤から本格的に始動したこの構想によって、地球の空は完全な調和の実現を果たしたかに見えた。

だが、結果的に生産されたガルダ級輸送機の大半は、「グリプス戦役」をはじめとする宇宙世紀の戦乱によって失われてしまい、その構想はもはや形骸化してしまったのである。

そして宇宙世紀0096年。生き残った神鳥は、未だ雄々しく飛び続けていた。


[nose detail]


[mega particle cannon]



■ガルダ級超大型輸送機《ガルダ》
全長:317m　全幅:524m

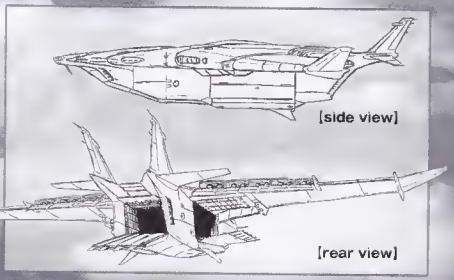
[Development]

ガルダ

製造された同型艦の中でも、圧倒的な対空砲火能力を備えたという明灰色のネームシップ《ガルダ》。

計20基にもなる大出力の熱核ジェット・エンジンを搭載し、低速飛行用のホバーユニットを備えた巨体には、無数の対空機銃やミサイルランチャー、果てはメガ粒子砲を有するなど、もはや輸送機ではなく、空中要塞と言わんばかりの様相を呈していた。

そんな《ガルダ》の貪欲な腹には、もちろん守り手となるモビルスーツがたくさん詰められていた。それもロールアウトしたばかりの最新機体が。


[side view]

[rear view]

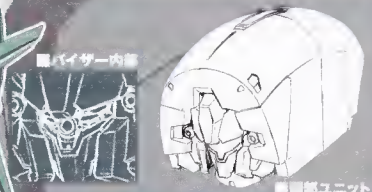
MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume014_RAS-96

...next[Turn]

[Turn] アンクシャ、という機体



■バイザー内部



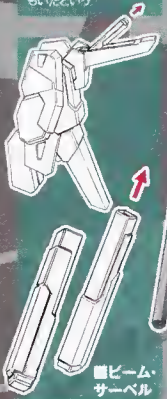
■肩部ユニット





■足裏

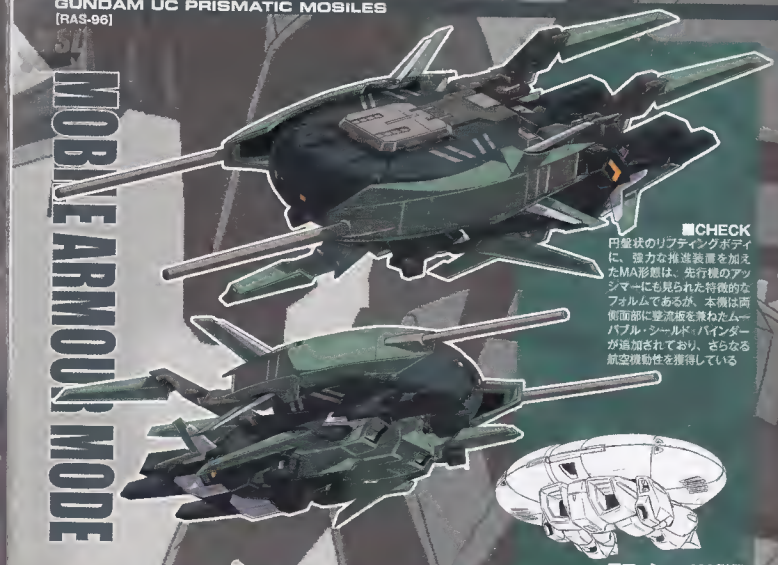
■CHECK
機体両脇部のニークラッシャーにサーベル・ラックが組み込まれており、使用時にはサーベルユニットをポップアップさせる。アンクシャパイロットの中には本兵装を二刀流で扱うことを得意とするものもいたという。



■ビーム・サーベル

MOBILE SUIT MODE

MOBILE ARMOUR MODE



■CHECK
円盤状のリフティングボディに、強力な推進装置を加えたMA形態は、先行機のアッシマーにも見られた特徴的なフォルムであるが、本機は両側面部に整流板を兼ねたムーバブル・シールド・バインダーが追加されており、さらなる航空機動性を獲得している

■アッシマーMA形態

■CHECK
MA形態時の機体上面部にはSFS運用のためのMS搭載用プラットフォームとグリップが設けられている



SPEC
頭頂高：19.3m
本体重量：41.1t
全備重量：63.8t
ジェネレーター出力：2010kw
スラスター総推力：68200kg
センサー有効半径：10200m
装甲材質：チタン合金
セラミック複合材
武装：大型ビーム・ライフル

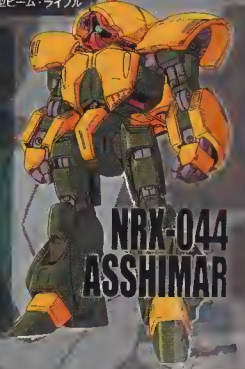
TMAからTMSへ

RAS-96（アンクシャ）は地球連邦軍からの委託を受け、AE（アナハイム・エレクトロニクス）社が開発した量産型TMS（Transformable Mobile Suit＝可変モビルスーツ）である。

円盤状のモビルアーマー形態へ変形することによって大気圏内での高次な単独飛行能力を有することが可能となる本機は、過去に連邦軍のオークランド研究所で開発された同様のコンセプトを持つTMA（可変モビルアーマー）（アッシマー）の設計データを基に再設計が行われた後継機であり、全体のシルエットや変形シークエンスなどからもそれが容易に見て取れよう。

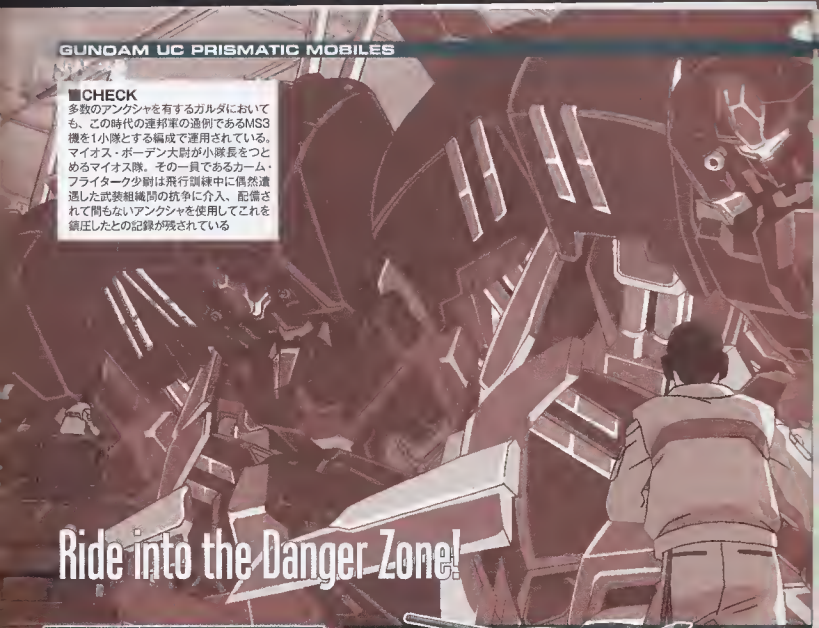
宇宙世紀0093年の「第二次ネオ・ジオン戦争」以降、軍事費縮小の気運が高まり、新型機の開発予算がきわめて通りづらい情勢の中で、整備効率と生産性の両立、さらには機体の運搬するSFS（サブフライト・システム）機能の確保を必須とした連邦軍の要求に応えるべく、先行してロールアウトしていた量産型TMS（リゼル）の方策が同様に採られた。それは当時の連邦軍主力量産機である〈ジェガン〉系モビルスーツとの内装部品規格の共通化である。

これによって高コストな年MSといえど、量産化における現実的なラインをクリアしつつ、〈アッシマー〉譲りの恵まれた総推力値は自身と同程度の加重をかけての重力下飛行も全く問題にならぬレベルを達成したのであった。



NRX-044
ASSHIMAR

...next [Conclusion]



■CHECK
多数のアンクシャを有するガルダにおいても、この時代の連邦軍の通例であるMS3機を1小隊とする編成で運用されている。マイオス・ボーデン大尉が小隊長をつとめるマイオス隊。その一員であるカーム・フライターク少尉は飛行訓練中に偶然遭遇した武装組織間の抗争に介入、配備されて間もないアンクシャを使用してこれを鎮圧したとの記録が残されている

Ride into the Danger Zone!



RAS-96 ANKSHA

SPEC
頭頂高：22.3m
本体重量：28.3t
全備重量：43.9t
ジェネレーター出力：2200kw
スラスター総推力：79600kg
センサー有効半径：14200m
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：ビーム・サーベル
ビーム・ライフル
60mmバルカン砲
ムーバブル・シールド・バインダー

[Conclusion]

狭間を守る一翼

宇宙世紀0096年に完成した《アンクシャ》は、すぐさま地球上の駐屯拠点への配備が進められていった。主力量産機であるはずの《ジェガン》すら満足に行き渡らず、数合わせの型式が主だった戦力とされていたという、この時代の連邦地上軍にあって、このような最新機種がおよそ2年という開発・配備されたということは、多分に連邦上層部とAE社の間で何らかの生々しい思惑があったことを感じさせるものであった。

しかし、本機が高々度の迎撃任務にも対応可能な、いわば宇宙と地上の狭間を守るための申し分のない性能を持ち得ていたことも事実であり、宇宙からの侵攻に対する備えとして生み出された正当な意義が含まれていることも、なんら間違いないのである。

超大型輸送機《ガルダ》へも航空戦力として多数が配備された《アンクシャ》は、文字通り「ガルダ構想」の一翼を担い、新世代の空の守り手として活躍したという。

MS-06 ZAKU

PRINCIPALITY OF ZEON MASS-PRODUCED MOBILE SUIT



[Introduction]
主力モビルスーツ

モノアイと呼ばれる頭部の単眼カメラユニット。いわゆるこの"つ目"をジオンモビルスーツの象徴的意匠として宇宙世紀に生きた人々の記憶に刻み込ませた要因は、すべからくこの機体にあったといっても過言ではないだろう。

MS-06《ザクII》。歩兵を10倍に巨大化させた新兵器、モビルスーツの有用性を実証し、恐るべき数が生産されたジオン公国軍の主力量産機である。

結果的に物量に勝る連邦軍によってジオンは敗北したが、総合性能、戦果といった数値的な評価だけではなく、《ザクII》がモビルスーツ史に遺した功績は計り知れない。

『その後の戦乱でも、主力量産機として求められた要素をすべて兼ね備えていた本機のコンセプトは、ジオンの名を冠する軍勢へその都度継承された。

[Development]
アシンメトリー

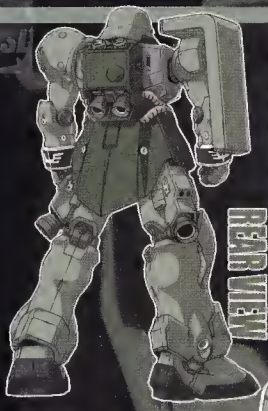
一年戦争から20年近く経過した宇宙世紀0096年、ジオンという勢力はもはや"つの言葉だけでは表現できないさまざまな色相を帯びていた。それらに"袖"をまくることで纏めにすべく生まれたのが"袖付き"と仇名されたネオ・ジオンの残党軍である。

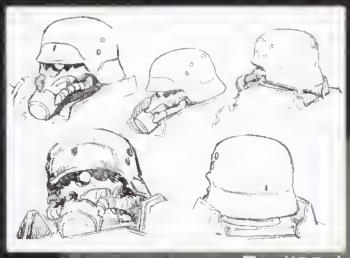
さらに"袖付き"の主力量産機には、すべてのジオン軍人に対し、かつて一丸となっていたジオンの熱い魂を想起せざるを得ないシルエットを有していた。

頭部のモノアイは元より、機体装甲外部に露出した動力パイプ。そして左肩のショルダーアーマー、右肩に接続されたシールドによる左右非対称の巨人が、再び現出する。

...next[Turn]

[Turn] ギラ・ズール、という機体

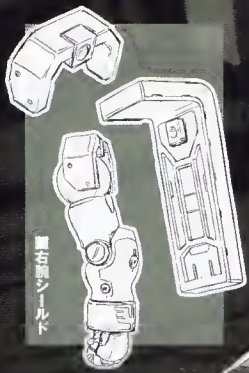




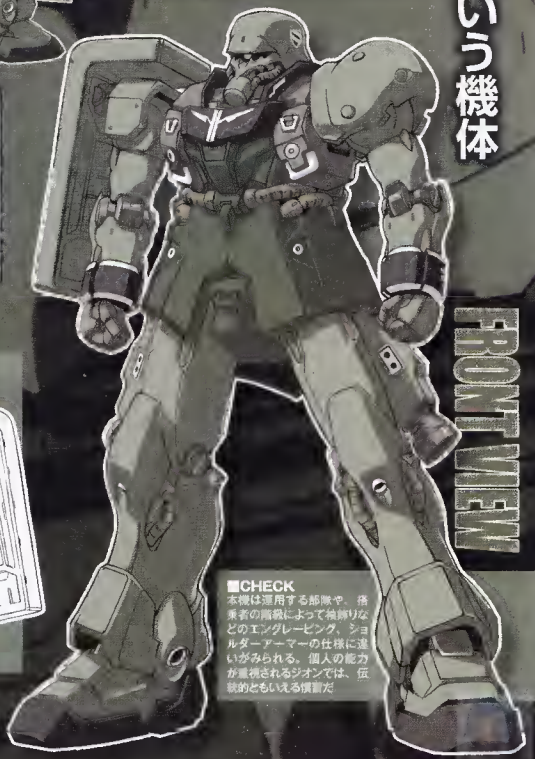
■ヘッドユニット



■コックピットハッチ開閉



■右肩シールド



■CHECK
本機は運用する部隊や、搭乗者の嗜好によって独創りなどのエングレービング、ショルダーアーマーの仕様に違いがみられる。個人の能力が重視されるジオンでは、伝統的ともいえる慣習だ

■ビーム・マシンガン

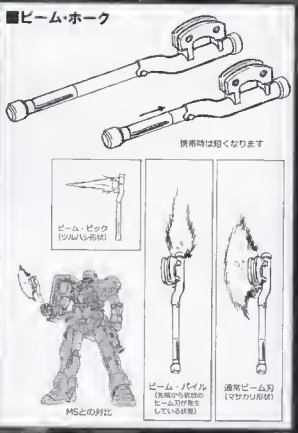


■CHECK
ビーム・マシンガンは銃床下部に装着するグレネード・ユニットなど数種のオプションが存在している他、長距離狙撃に特化したビーム・スナイパー・ライフルも用意されている

■ビーム・スナイパー・ライフル



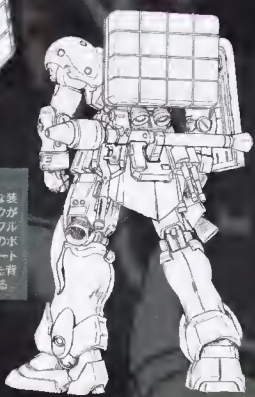
■ビーム・ホーク





■汎用コンテナ

■CHECK
本機の各部には、装備を懸架するためのラックが各部に設置されている。フル装備時には汎用コンテナのボリュームも加わり、スマートなシルエットを持っていた背面の印象が大幅に変貌する



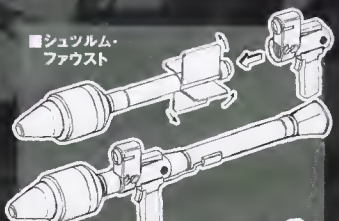
相応しい性能

ネオ・ジオン軍の次期主力モビルスーツとしてAE社で開発が進められていた〈ギラ・ズール〉は、所謂受注生産である「箱付き」の各所事情により、予定していたスペックでの量産計画が承認されることなく、最終的な性能数値は従来機の〈ギラ・ドーガ〉から驚くべき進化を遂げたとは言えないものであった。

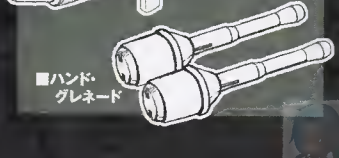
だが、再承認のために入念な設計の見直しが行われたことにより、当初より生産性や整備性の大幅な向上を果たし、さまざまな戦歴のパイロットや整備兵が集う「箱付き」にあって、一言で表現するなら「きわめて扱い易い機体」だったのである。

あらゆる戦闘対応距離に対応した専用武装の数々は、それらの評価をさらに高めることとなり、素体としても優秀なポテンシャルを見せた本機は、本来のスペックを有するカスタマイズ仕様、長距離支援型、果ては水中型などのバリエーションを生み出したのであった。

■シュツルム・ファウスト



■ハンド・グレネード



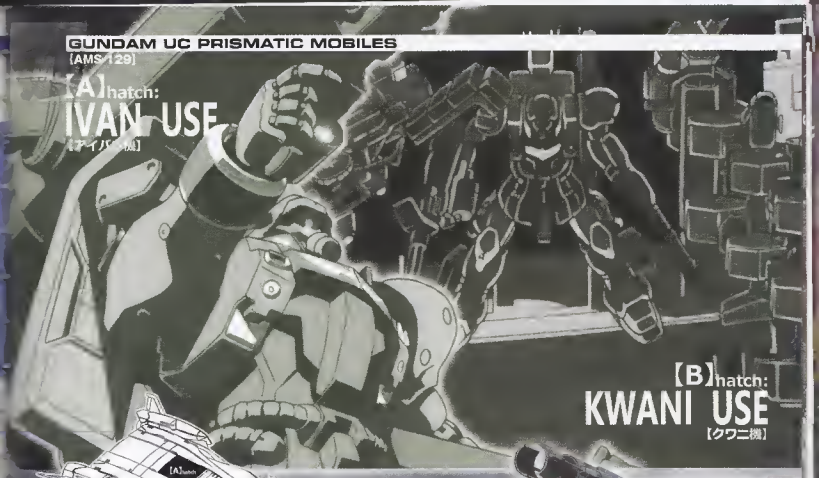


...next [Conclusion]

【AMS-129】

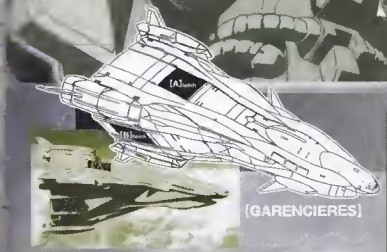
【A】hatch: IVAN USE

【アイバン機】



【B】hatch: KWANI USE

【クワニ機】



【GARENCIERES】



■CHECK

アイバン機が抱える大問題は、スキウレと呼ばれた移動砲台である。武装を持たない航宙貨物船ガランシェールの主砲代わりとなって、時代を感じさせぬ大威力を示す。一方、クワニ機にはビーム、実体弾を問わぬ数多くの携行火器が与えられ、圧倒的手数による砲火を敵に浴びせるのである。本機の開発者が想定していた以上に、悪条出来うる箇所へ接着された兵器達は、単純な戦力向上だけでなく、宇宙世紀の長きに渡る戦乱を生き延びてこられた「幸運」をガランシェール隊に与えることだろう

【Conclusion】受け継いだ心根

ジオンの要人〝ミネバ・ラオ・ザビ〟救出作戦のため、多数の最新型モビルスーツを搭載する超巨大輸送機〈カルダン〉(その身を晒した〝袖付き〟のガランシェール隊。彼らの戦力は、隊員のアイバンとクワニが搭乗する2体の〈ギラ・ズール〉のみであった。

説明するまでもなく無謀な戦力差にあって、決死の覚悟で臨んだ彼らの助けとなったのは、宇宙世紀を生き抜いてきた旧式の兵器群であった。提供元のジオン残党軍による認証解除が既に行われてはいたものの、連邦とジオン、果ては開発企業すら〝切り札〟がなされていなかったこれらの武装を、本機の柔軟な火器管制システムは、その全てを容易く活用したのだ。

豊富な専用兵装やバリエーションを設定されながら、戦場において現地調達した他勢力の装備品を速やかに運用することも想定していた〈ギラ・ズール〉。貪欲なまで「汎用」にこだわった設計思想は、源流となった〈ザクII〉の姿形だけでなく、その心根までも深く受け継いでいたのである。

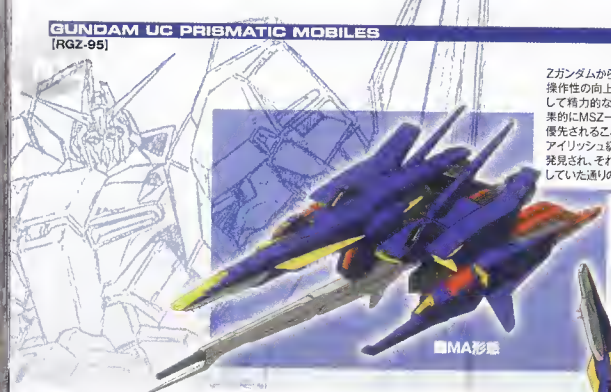
AMS-129 GEARA ZULU

SPEC

頭頂高：20.0m
本体重量：21.8t
全備重量：55.2t
ジェネレーター出力：2470kw
スラスター総推力：62100kg
センサー有効半径：18200m
装甲材質：チタン合金
セラミック複合材
武装：ビーム・ホーク
ビーム・マシンガン
ビーム・スナイパー・ライフル
シュツルム・ファウスト
ハンド・グレネード
シールド

...next【GUNDAM UC episode 5 &「袖付き」の個付長は訓練うさ5】

■CHECK
Zガンダムから変形機構の単純化、生産性と操作性の向上を主眼に置いた発展タイプとして精力的な開発が進められていたが、結果的にMSZ-010「ZZガンダム」の開発が優先されることになった。後にエゥーゴ所属アイリッシュ級戦艦への試作機配備記録が発見され、それによれば実戦においても予定していた通りの良好な性能を示したという



■MA形態

SPEC
頭頂高:18.3m
本体重量:31.1t
全備重量:69.7t
ジェネレーター出力:2130kw
スラスター総推力:114300kg
センサー有効半径:14000m
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ビーム・ライフル
メガビーム・ライフル
ビーム・サーベル
クレイ・バズーカ

[Introduction]

ゼータの行方

「《Z》を冠するTMS(Transformable Mobile Suit=可変モビルスーツ)のリファイン――モビルスーツ開発に携わる全ての技術者達にとって、この要求は紛れもなく"呪いの言葉"であった。

宇宙世紀0087年の「グリプス戦役」において多大な戦果をもたらしたTMS、MSZ-006〈Zガンダム〉。

当時の既存モビルスーツ概念を遥かに越えた性能を示し、稀代の傑作機と呼ばれたこの機体の量産化は様々なアプローチから進められてきた。

だが、コスト度外視で設計されたという〈Zガンダム〉が持つ複雑な機体構造の簡略化は決して容易ではなく、そのどれもが満足な結果を残すことが出来ないままであった。

加えて宇宙世紀0093年の「第二次ネオ・ジオン戦争」終結以降、連邦政府全体に蔓延した軍縮傾向もあって、難航に拍車がかけられた開発の道程に"ある一つの光明"が見出される。

[Development]

メタスとZII(ゼッツー)

宇宙世紀0089年に完成した地球連邦軍の主力量産機、RGM-89〈ジェガン〉による配備状況の拡大、生産性が高い〈ジェガン〉の部品供給を設計に組み込むことで、TMSといえども大幅なコストダウンを計上することが可能となったのである。

技術的な懸念事項であった変形機構は〈Zガンダム〉の開発過程で生み出された副産物、MSA-005〈メタス〉の方式に差し戻される形で抜本的な簡略化を図り、同方式を採用していた〈Zガンダム〉の発展試作TMS、MSN-008〈ZII〉の開発データをブラッシュアップする方向性が採られた。

並行開発していた新型OSによる補助機能も加わった結果、簡便な整備性を獲得すると共に、量産機として求められていた運用条件、性能数値をクリアした待望の《Z》を冠する制式量産型TMSが完成したのである。

[MSZ-008]
ZII

MOBILE BUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume016_RGZ-95

...next[Turn]

[Turn] リゼル、という機体



■CHECK

Z系MSの血筋を受け継いだ本機の頭部モジュールは、基本構成もZガンダムに近しい設計が採られている。前腕部のユニットコンテナはサーベルラックとして使用するほかに、複数種の弾頭に対応したグレネード・ランチャーの機能も有し、状況に応じて兵装を選択する多角的用途を持つ

WAVE RIDER MODE



■CHECK
今回のTMSに必須とされる技術は適切適正な処置が施され、変形所要時間はわずか0.5秒で完了する

銃口部分にビーム刃を形成したロングビーム・サーベルとしての使用も可能。射撃時は出力のモード切り替えを任意で行うことが出来る

■ビーム・ライフル

内蔵型ビーム・キャノンを装備。後端部のハンマーブレードによる打突兵器としても使用される

■シールド



■CHECK
上面のMS用グリップはSFS運用時に展開させる



■MA形態

SPEC
頭頂高:18.1m
本体重量:27.8t
全備重量:52.4t
ジェネレーター出力:1640kw
スラスター総推力:77000kg
センサー有効半径:11300m
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:アーム・ビームガン
ビーム・サーベル

万人へのTMS

――リファイン・ゼータ・シリーズに対するAE.アナハイム・エレクトロニクス〉社の技術者達が導き出した二つの回答、それがRGZ-95〈リゼル〉なのである。

〈リファイン・ゼータ・エスコート・リーダー(Re-fine Zeta-Eundam Escort Leader)〉の頭文字の略称として機体名が示すように、変形によって発生する余剰推力を活かし、本機は設計当初からSFS〈サフ・フライト・システム〉としての運用法を想定していた。

母艦内に〈ベースジャバー〉などの純SFS用のスペースを必要とせず、前線到着後は〈リゼル〉自身も参戦を可能とする無駄のない戦術を行える利点は、連邦軍上層部による開発承認への最終決め手となったのだ。

本機の可変形態は、〈ZガンダムⅡ〉に倣いウェイブライダーと呼称された。懸念されていた操縦難度の高さは、新型OSに組み込まれたコントロール・サポート・システムにより、両形態ともにほぼ変わらない操縦感覚で扱えるまでの適宜調整され、非変形機からの機種転換訓練もスムーズに行われたという。

「人を選ぶ」既存Z系TMSのデメリットをその懐の広さで包み込んだ本機は、モビルスーツ史における常識を塗り替えたとも表現できよう。



■MS形態

MSA-005 METHUSS

...next [Conclusion]

【RGZ-95】

■CHECK

連邦宇宙軍の独立機動艦隊ロンド・ベルへ優先配備された本機のコックピットシートには、実戦経験もままならない新人パイロットが座るケースがあったという。操縦練度の経過を果たしたリゼル搭乗ゆえに可能としたエピソードだが、彼らは『袖』を患った武人によって戦いの真なる恐怖を知ることになる。流石のリゼルもそれを緩衝させる機能はなく、彼らパイロット自身が学び、克服せねば生き延びることは出来ないだろう……



You never know what might happen.

【鬼が出るか、蛇が出るか】

RGZ-95
ReZEL

[Conclusion]
リファイン・ゼータの終着点とは

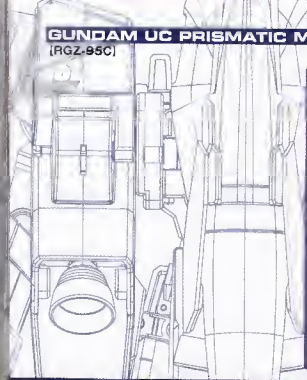
《ZガンダムΖ》の量産機として「Z」を構成する100%から削っていく」のではなく、過去に培った技術をアレンジし、「0%から新たな「Z」を精築する」方向性によって誕生した本機は、《ZガンダムΖ》のリファインという当初の志に一切妥協することなく、信頼性の高い量産型MSとして仕上がったことが最大の特徴であると言えよう。

前述した《メタス》や《ZII》、その他にも――《リゼル》の外装からは、かつて《Z》に深く関わった様々なモビルスーツの面影が垣間見えるだろう。それは彼らが遺した想いが新く結実し、呪いの言葉を完全に浄化した「証」なのだ。

制式量産された《リゼル》は、リファイン・ゼータとしての一応の決着を見せた。これからは自身のバリエーション、そして後継機を生みだし、新たな可変モビルスーツの系譜を紡ぎ出すと共に、リファイン・ゼータのさらなる回答を宇宙世紀に示していくのである。

SPEC
頭頂高:20.5m
本体重量:25.8t
全備重量:57.6t
ジェネレーター出力:2220kw
スラスター総推力:81500kg
センサー有効半径:14920m
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ビーム・サーベル
ビーム・ライフル
ロング・ビーム・サーベル
グレネード・ランチャー
60mmバルカン砲
ビーム・キャノン
シールド

...next [GUNDAM UC episode 1 "Day of the Unicorn"]



[Introduction]

新世代のゼータ

地球連邦軍の量産型MS、RGZ-95《リゼル》は、万人に受け入れられる「人を選ばない」可変モビルスーツだった。

稀代の名機と謳われてはきたものの、複雑な内部機構、常人では扱いきれぬ操縦難度、なによりも莫大な開発コストの高さに量産化に困難とされてきたMSZ-006《Zガンダム》。高理解度ともいえる連邦軍からの要求は、「MSZ-006の再現」にこだわらぬAE(アナハイム・エレクトロニクス)社の技術者によって、意欲的なアプローチが行われた。

かつて《Zガンダム》の開発過程において生まれた形実際機の機構を改めて掬いあげ、最新技術、再構築したことで変形機構の簡略化を実現。また、すでに配備が進められていた主力量産機の部品規格を設計段階で組み込み、現実的な生産性を獲得したのである。

可変形態にSFS(サブ・フライト・システム)の機能付加、OSにはコントロール・サポート・システムを導入し、操縦難度の軽減が図られるなど、要求された条件を高次のレベルでクリアした新世代の量産型TMSとして完成したのだ。



[RGZ-95]

ReZEL

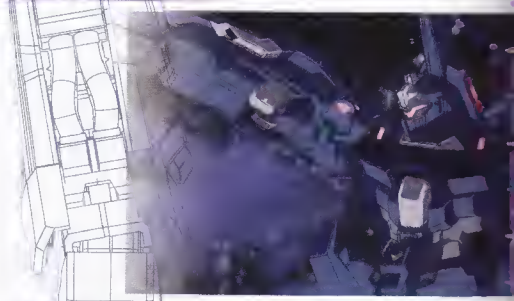
[Development]

妥協を許さない者達

独立機動艦隊「ロンド・ベル」をはじめとする地球連邦宇宙軍の各部隊へ配備予定が進められていた本機ではあったが、モビルスーツ部隊長をはじめとした一部の熟練パイロットからは、新兵にも扱える方向性に則って開発された本機の総合性能に苦言を唱える者も存在した。

歴戦をくぐり抜け、己の腕だけで命を繋ぎ続けてきた彼らにとって、身体を預けるモビルスーツに一切の妥協を許せないという想いは、同様であり、《リゼル》の開発に妥協を許さなかった技術者達からしても想定済みであり、「Zを冠するTMSの、本来在るべき姿」としての《リゼル》を用意する手筈は、すでに整えられていたのであった。

その特別仕様機は、再び《リゼル》を「人を選ぶ」機体へと変貌させるのである。



MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume017_RGZ-95C

...next[Turn]

【Turn】リゼルC型、という機体

■CHECK
かつてZガンダムが運用していたハイパー・メガ・ランチャーのコンセプトを継承した、長距離支援を可能とする高出力ビーム兵装。装備の際は背面部のノーズバックパックへ固定接続し、MS本体ジェネレーターからのエネルギー供給に加え、メガ・ビーム・ランチャー自体に内蔵されたサブ・ジェネレーターがそれを補うことによって、高威力ながらも安定した出力と弾数を誇る。一般機にも装備が可能である

■メガ・ビーム・ランチャー

■収納状態

■CHECK
メガ・ビーム・ランチャーがC型の必須装備というわけではなく、白兵戦闘が想定される任務においては、ビーム・ライフルを携行して出撃した

■CHECK
頭部のメイン、サブカメラに加え、メタスを参考に肩部をはじめとした複数のセンサーが上半身に集中して配置されている。MS小隊での連携を重視した通常型とは違い、単機での突出した戦術運用が想定されていたC型のセンサー色は、戦場での通常型との識別を容易とするため別色に改められた。機体色の違いも相まって、連邦軍では珍しい「エース用量産機」の印象を強く示しているのだ

MOBILE SUIT MODE

■CHECK
当時の連邦軍は機体にオプション装備を換装することによって多角的運用に対応する方針を優先しており、リゼルにも複数種の背面ユニットが設定されている。ウィング・バインダーはその一つで、大気圏への突入能力と圏内での飛行能力を付加させる可変翼タイプの背面ユニットである。有重力下でのSFS運用を可能とするために総合的な推力性能が向上しており、宇宙空間においても通常の背面ユニットと比較して機動性に勝る本装備は、リゼルC型にとって事実上のスタンダードとなった



■コックピット・ハッチ開閉





WAVE RIDER MODE

精鋭へのTMS

――リファイン・ゼータ・シリーズに対するAE社の技術者達が導き出したもう一つの回答、それがRGZ-95C〈リゼル〉C型なのだ。

「コマンダータイプ」とも呼称されるC型は、前述の方向性の象徴とも言える。あえて限界性能を引き下げる調整がなされていた〈機体をベースに、小改修を施した特別仕様機である。

メイン、サブを含めた各スラスター推力のリミッター上限を解除し、それに伴って発生する機体への負荷に耐えうるムーバブルフレームの補強を行うなど、〈リゼル〉本来が持っていた機体性能に引き出しただけではなく、耐久面においても信頼性を向上した再調整が施されている。

その他、操縦系の反応速度を向上させるという機体追従性の改善も行われており、結果的に均一化された動きを重視されていた〈機体とは意味合いを大きく変え、パイロット個人の資質を問われるピーキーな挙動を有した〈人を選ぶ〉機体として仕上がったのである。



■CHECK
両形態の操作感覚を統一化するコントロール・サポート・システムは、熟練パイロット達にとって、航空機としての緩やかな挙動を刷く妨げとなる機能とも言え、配備されたC型の多くは同システムをカットし、彼らが慣れ親しんだ従来の操縦方式に戻したという逸話が残っている

...next [Conclusion]

■CHECK
C型はモビルスーツである以上、権利を持った人間であれば誰しもがそのシートに座ることが出来るだろう。だが、才能と経験をもつ限られた人間のみが、C型の性能を完全に引き出すことが出来る。逆に言えば、無能な上層部の判断によって、[illegible]採用し、凡人にあてがわれてしまうこともあり得る話である。そう、前時代的な超巨大戦艦を、新時代の象徴として有り難がるような古い地球人ならば…

The ZETA in Sheep's Clothing.

【羊の皮を被った"ゼータ"】

RGZ-95C ReZEL

TYPE-C(COMMANDER TYPE)

【ゼネラル・レビル配備機】

SPEC
頭頂高:20.5m
本体重量:28.1t
全備重量:62.8t
ジェネレーター出力:2220kw
スラスター総推力:85400kg
センサー有効半径:14920m
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ビーム・サーベル
メガ・ビーム・ランチャー
ビーム・ライフル
ロング・ビーム・サーベル
グレネード・ランチャー
60mmバルカン砲
ビーム・キャノン
シールド

[Conclusion] ゼータを駆る者達

宇宙世紀0096年において、『袖付き』と呼ばれるネオ・ジオン残党軍との争乱の際、背面ユニットを可変翼タイプのウイング・バインダーに換装し、オプションのメガ・ビーム・ランチャーを組み合わせたC型が、ロンド・ベル所属の練習艦隊旗艦(ネェル・アーガマ)に隊長機として複数配備されたほか、《ゼネラル・レビル》と呼ばれるドゴス・ギア級新造艦の通常配備機体としてC型の採用決定がなされたという記録が残されている。

時代が要求し、そして発現した新たなる「Zの血統」は、そこに自分の生を重ね続けてきたパイロット——いわば「Z乗り」達にとって手放しで満足できる物ではなかった。

だが、失われていた要素を取り戻したC型のコックピットに包まれた彼らは、僅かな改修でそれを成し得た「リゼル」の基本設計の素晴らしさを称え、技術者達に対しても多大なる敬意を表したという。

...next [GUNDAM UC episode 2 "The Second Coming of Char"]

[Introduction]

万能の限界

モビルスーツという人型機動兵器の本質を、改めて見直さねばならない時期が来ていた。

グリプス戦役から第二次ネオ・ジオン戦争にかけてのモビルスーツの設計思想は、全てにおいて広く対応出来ることを目指した「汎用」ではなく、全ての点において優良であることを義務づけられた「万能」であったといえるだろう。

結果、恐竜的進化にまで郷愉される巨大化、多機能化が進み、高性能ではあったが機動兵器本来のコンセプトとは大きくかけ離れていたのである。

だが初心を忘れず、意欲的に「汎用」であることに拘り続けたモビルスーツ開発者たちも中には存在した。

トレンドに左右されず、我が道を貫き通す彼らは確信していた。モビルスーツが戦闘兵器の新たなるスタンダードとして登場してから十余年が過ぎ、その間に向上した技術レベルで原点回帰をすれば、以前とは比較にならない水準にある汎用モビルスーツが生まれる、ということを。

U.C.0093

[Development]

求められた汎用

宇宙世紀0093年、シャア・アズナブルを総帥として再興した新生ネオ・ジオン軍。その主力量産機には従来の流れであった「万能」ではなく、今一度「汎用」へ立ち帰ることが強く求められた。

だが、総帥が搭乗するフラックシップ機や、強襲用超重モビルアーマーなどの開発建造計画を同時進行させる必要があった同軍に、もはや設計段階から完全新規で進めていく余裕は無かったという。

そこで採用されたのが、第二次ネオ・ジオン戦争終結時、敗北したアクシズのネオ・ジオン残党が接収をまぬがれるべく持ち出したモビルスーツのうち一機を原型機として、月にあるAE(アナハイム・エレクトロニクス)社グラナダ工場での量産を前提とした設計変更を行う、というものであった。

調達効率を最優先しての採用だったが、完成したモビルスーツは同時期に配備が進められていた地球連邦軍の量産機であるRGM-89(ジェガン)と遜色のないスペックを獲得したのである。

...next[Turn]

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume018_AMS-119 and AMS-119C

[Turn] 袖付きギラ・ドーガ、という機体




■ヘッドユニット


■コックピットハッチ


■ビーム・マシンガン

■ビーム・ソード・アックス

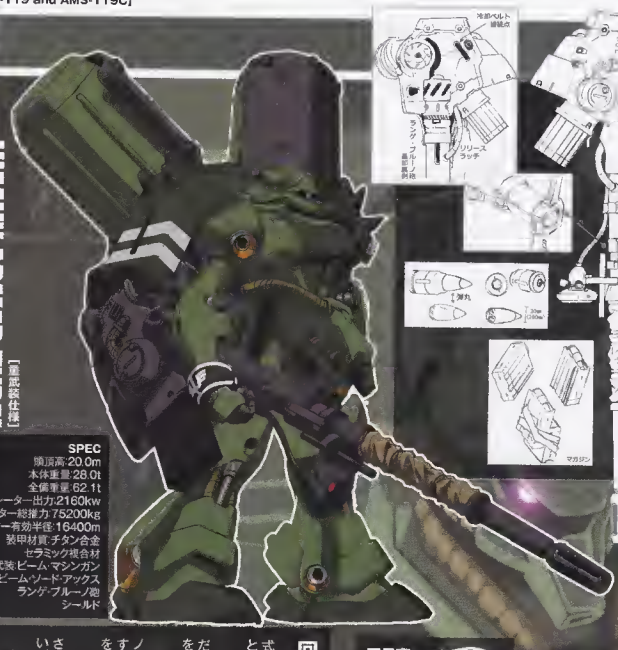
FRONT VIEW



■CHECK
ビーム発振器を2基内蔵しており、3パターンのモードを使い分けることが可能な近接兵装。この機能は後継機ギラ・ズールにも受け継がれた

SPEC
頭頂高:20.0m
本体重量:28.0t
全備重量:52.1t
ジェネレーター出力:2160kw
スラスター総推力:75200kg
センサー有効半径:16400m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材
武装:ビーム・マシンガン
ビーム・ソード・アックス
ランゲ・ブルーノ砲
シールド

[HEAVY ARMED TYPE] [重武装仕様]



■ランゲ・ブルーノ砲

SPEC
頭頂高:20.0m
本体重量:28.0t
全備重量:62.1t
ジェネレーター出力:2160kw
スラスター総推力:75200kg
センサー有効半径:16400m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材
武装:ビーム・マシンガン
ビーム・ソード・アックス
ランゲ・ブルーノ砲
シールド

回帰はトレンドを生みだす

新生ネオ・ジオン軍の主力量産モビルスーツとして、AMS-119の型式番号を与えられた《ギラ・ドーガ》。「人間の機能を拡大した機動歩兵」というモビルスーツの基本コンセプトに忠実な汎用型機体である。

多種多様な携行装備を設定することで作戦内容に応じた運用が可能だったモビルスーツの利点を「歩進めた本機は、バックパックの換装機能を設計段階から想定していたという。

長距離狙撃が可能な空間戦闘タイプを基本装備とし、ランゲ・ブルーノ砲と呼ばれる高射程の重機関砲を組み込んだ重装タイプをはじめとする複数の専用バックパックが用意され、「最低限の換装で高い拡張性を示す」汎用モビルスーツの新トレンドの先駆けとなった。

本機は100機あまりを製造し、82機(うち10機が指揮官機)が実戦配備されたが、短期決戦と評される事が多い第二次ネオ・ジオン戦争において、本機の実戦使用期間はきわめて短かったといえるだろう。

総帥を失った新生ネオ・ジオンは戦争終結と共に消滅したが、自身の可能性を全て示すことなく燻っていた《ギラ・ドーガ》の残存機体を受け入れる「器」は間もなく出現したのだ。

■足裏



■CHECK
重装バックパックには、ランゲ・ブルーノ砲に加え、長時間の戦闘行動を可能とする大型プロペラントタンクの追加によって増加した重量を帳消しするかのように、推進機関の出力強化も図られている



...next [Conclusion]

U.C.0094

[conclusion] 試作機は赤く目覚めた

当初《ギラ・ドーガ》は新生ネオ・ジオン軍の中核機体となるべく、サイコミュ搭載型試験機や指揮官向け高級機など、換装以上の改修を施したバリエーション機の開発も進められていたという。

本機の開発経緯から読み取れるように基礎設計が旧式化していたこともあり、量産タイプの制式採用をもってバリエーション機の殆どが試作段階で見送られたのだが、その過程には性能向上型とは名ばかりの、機体バランスを著しく狂わせる過分な強化が図られた試作機「C型」も存在していた。

これは各バリエーションへの改修に伴う各部品の耐久数値を検証する実験機、という側面が強かったためではあるが、機動兵器の原点とは相反する異端な特性を有していたC型は、検証試験を終え、倉庫の片隅で予備パーツ用として解体の時を待つしかなかった。

そして戦争終結によりその機会すら迎えることなく、もはや使い道のない四肢は、同様に機動することのない躯体に留め続けられていたのである。





有無を言わさぬ力

宇宙世紀0094年、ネオ・ジオン軍旗艦《レウルーラ》のモビルスーツデッキの最奥には、解体されるはずの両腕に「袖」が巻かれ、全身に漆黒の塗装が施された真新しいC型が佇立していた。

若きシャア・アズナブルを「赤い彗星」と言わしめたかつての専用機体を想起させるその偉容は、シャアであることを求められた男の乗機として最適だったのである。

異端な性能はそのままに、それを完全に掌握したパイロットによる異端な機動を見せる赤い《ギラ・ドーガ》は、内外問わず「赤い彗星の再来」と呼ばざるを得ないものだったという。

「袖」という新たな使命を帯び、戦場に舞い戻った《ギラ・ドーガ》は、次なるネオ・ジオン軍の先陣を切るのだ――主、アルフロンタルの名の下に。

AMS-119C
GEARA DOGA
(FULL FRONTAL USE)

SPEC
頭頂高:20.0m
本体重量:23.0t
全備重量:50.8t
ジェネレーター出力:2160kw
スラスター総推力:70200kg
センサー有効半径:16400m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材
武装:ビーム・マシンガン
ビーム・ソード・アックス
グレネード・ランチャー
シュツルム・ファウスト
シールド

...next [GUNDAM UC 0094 "戦慄の戦争"]



[Introduction]

特殊部隊

地球、コロニー、小惑星。「作戦」場所を問わず」が信条の、連邦宇宙軍特殊作戦群・ECOAS（エコーズ）。

ネオ・ジオン軍残党の摘発・殲滅を任務として編成された新設部隊は、軍務のみならず警察権まで広範にわたる活動が特権的に保証されていたという。

その詳細は連邦軍内部であっても秘匿事項であり、どこまでも表舞台に立たぬ彼らは敬遠の意味も含め、人狩り部隊（マンハンター）という異名を与えられる程であった。

[Development]

特殊なモビルスーツ

――特殊な部隊が扱うモビルスーツは、特殊であることが求められる。

可変モビルスーツ2機を一組とし、特殊任務、特に隠密作戦での運用を想定したエコーズ専用機の発注において地球連邦軍が要求したのは、

①秘匿性を獲得するための大幅な機体のダウンサイジング　②小隊8名の兵員輸送機としての収容性の確保　③迅速な作戦行動を可能とするための高い機動性能、であった。

もはや相反する要求とも言えるこの難題に対し、当時のモビルスーツ産業において圧倒的な地位を確立していたアナハイム・エレクトロニクス社ではなく、とある研究機関が明確な回答を示したのである。

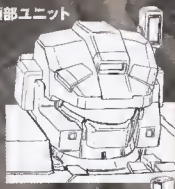
Earth
COlony
ASteroid

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume019_D-50C

[Turn] ロト、という機体



■頭部ユニット



■バイザー内部





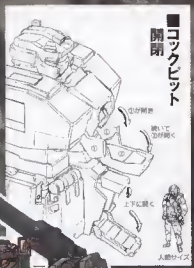




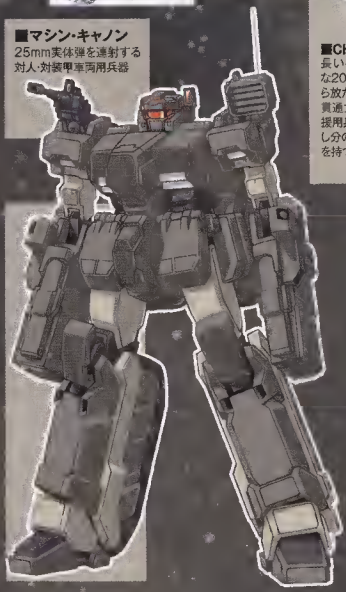
■変形
シークエンス

■ロング・
ギャノン

■CHECK
長い砲身が特徴的な200mm滑腔砲から放たれる徹甲弾の貫通力は、長距離支援用兵装として申し分のない性能を持つ



■マシン・キャノン
25mm実体弾を連射する
対人・対装甲車両用兵器



MOBILE SUIT MODE

MSV

TANK MODE





■CHECK
溶断用装備。ビーム サーベルとは異なり、高エネルギーのメガ粒子を溶断対象に直接吹き付ける

■腕部ユニット・サブアーム





■ビーム・バーナー

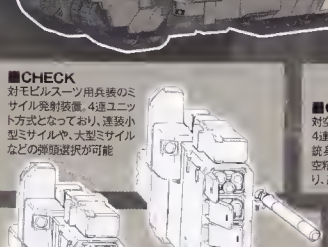


■後部
兵員乗降ギミック



■CHECK
車体後部の兵員室には8名もの隊員が搭乗する

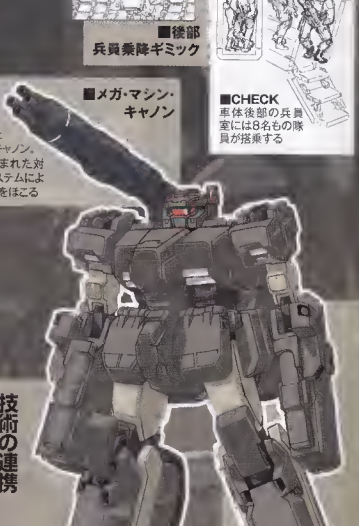
■CHECK
対モビルスーツ用兵装のミサイル発射装置。4連ユニット方式となっており、連装小型ミサイルや、大型ミサイルなどの弾頭選択が可能



■腕部
ミサイル・コンテナ

■メガ・マシン・キャノン

■CHECK
対空に特化した4連装マシン・キャノン。銃身に組み込まれた対空精密照準システムにより、高い命中率をほこる



技術の連携

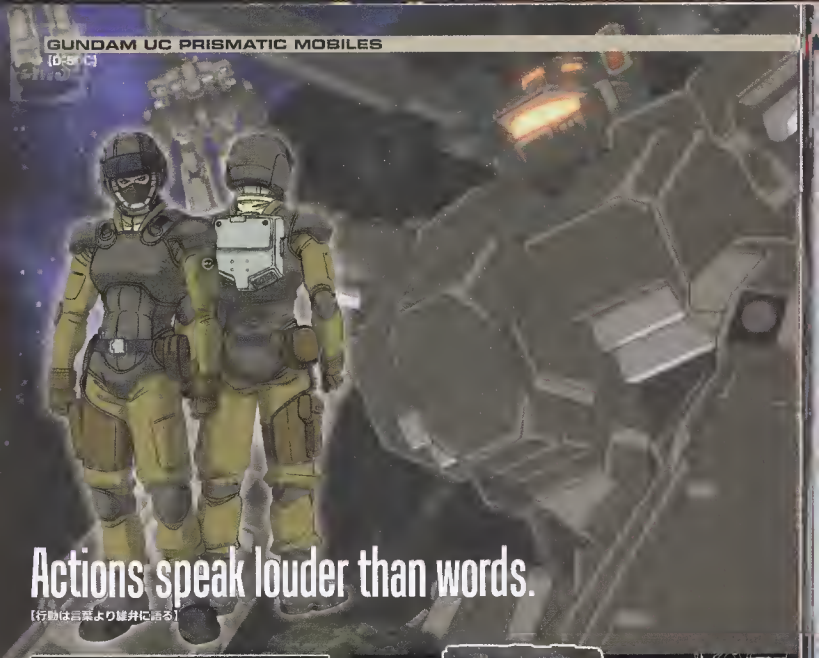
地球連邦軍の研究機関「海軍戦略研究所（サナリア）」が極秘に開発を行った特殊部隊用モビルスーツ、それがD-50C（ロト）だ。

秘匿性を重視した本機の開発にあたり、最大の難関とされていた「機体の小型化」に対し、サナリアは独自に研究開発を行っていた超小型熱核反応炉を採用。その出力性能は通常と比較して多少見劣りするものであったが、アナハイム・エレクトロニクス社の技術力ですら成し得なかった小型サイズの実用化に成功したのである。

この新技術を基点として、内外装部品のクリアランスはミリ単位の調整を行い、一切のデッドスペースを発生させずに兵員の収容性を確保。装甲部材は最低限の耐弾性にとどめ、相対的な機体の軽量化を図ることにより適切な出力重量比を獲得するなど、各開発部門が抱える諸問題点を、各々が有する利点で補い合っていた。

この徹底した設計検討によって導き出された総合性能評価は、両形態時共に要求されたレベルを十二分に満たすものであった。

...next [Conclusion]



Actions speak louder than words.

【行動は言葉より雄弁に語る】

【Conclusion】 堅牢強固な歯車たち

上部操縦室には車長と操縦士、通信士の3名が収まり、下部操縦室には作戦内容に応じて非業務作業を補佐する追加要員用の補助席が配置され、慣性航法装置（INS）をはじめとする最新鋭の各種センサー類、通信設備によって、作戦域到達後は司令本部を兼ねた通信車としても機能する。本機の実戦データは宇宙世紀100年代の主流となった小型モビルスーツ開発においても活用され、形式番号の「50」は戦車形態変形機を表す番号となった。

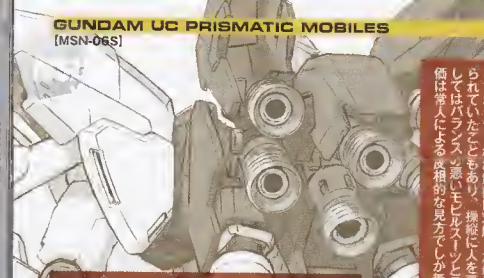
――「ロト」は、対モビルスーツ戦用に開発されてはいない。秘匿性を獲得するために通常よりも小さな体躯を与えられたその火力は、確実に非力なものだと言えた。しかし、道具は使う「もの」次第でその価値を大きく変える。

「作戦、場所を問わず」が信条であるエゥーズの隊員達は、任務中は人であることをやめ、マシンと化す。彼らが駆ることを前提とした機体に、過大な火力は必要ないのだ。使える「もの」は全て利用する。例えその身を晒してでも



SPEC
頭頂高:12.2m
戦車形態時全長:9.68m
戦車形態時全幅:5.78m
本体重量:16.8t
ジェネレーター出力:980kw
スラスター総推力:32400kg
センサー有効半径:8800m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材
武装:ビーム・バーナー
マシン・キャノン
ミサイル・コンテナ
メガ マシン・キャノン
ロング・キャノン

D-50C LOTO



■CHECK
「フロンタル大佐の専用機が連邦から強奪した機体ってのは知ってるよな。そん時は、今の外見とは色も姿も全く違っていたんだ。あ？　ネェル・アーガマのデータで既に見たって？　バカ、あれは連邦のヘボ情報部が改修後のデータを再現したモンにしか過ぎねえよ。本当の姿は……あ、もう時間が」（とある「袖付き」技術者の証言より）

[Introduction]

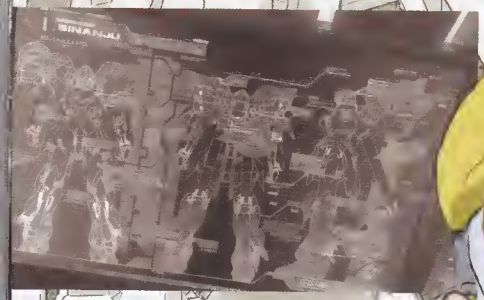
戦後の戦争

宇宙世紀0094年。AE（アナハイム・エレクトロニクス）社の貨物船団が賊に襲われ、大量の物資類が強奪される事件が発生した。

貨物の中には、地球連邦軍による宇宙軍再建計画の一環「UC計画」に組み込まれていた複数の試作モビルスーツが含まれていたという。

その内の一機は、最新のサイコミュ技術「サイコフレーム」の強度・追従性をテストするため、一般パイロットの操縦では計測不能な限界数値を取得するべく、機械上での試験をまとした「極めて暴力的」な機体であった。

ファンネル等のサイコミュ遠隔操作兵器は一切設定されておらず、標準範囲に対応した最低限の武装に止められていたこともあり、操縦に人を要する戦闘兵器としてはバランスの悪いモビルスーツと言えたが、その評価は常人による反相的な見方でしか無かったのである。



[Development]

原石は磨かれる為にある

傷害事件の犯行は宇宙に潜んでいたネオ・ジオン軍残党の手によるものと断定されたが、地球連邦政府を震撼せしめたのはその首謀者の存在であった。

「フル・フロンタル」と名乗る男の登場は、後に「袖付き」と呼称される新たなネオ・ジオン残党軍の蜂起を十分に予感させる熱気を孕んでいたのである。

非現実的な性能を実現するためには、同様に非現実的な技能を持ったパイロットが必要となる。強奪された「極めて暴力的」なモビルスーツは、「シャア・アズナブルの再来」と噂された彼の新たな乗機として、かくあるべき姿へと変貌していった。

――そう、原石（スタイン）は本来の彩りを持ち、真の力を手に入れたのである。

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume020_MSN-06S

...next[Turn]

[Turn] シナンジュ、という機体

FRONT VIEW

■ビーム・ライフル

グレネード・ランチャー

■CHECK
専用開発されたビーム射撃兵器。腰部にマウントする。一般の物に比べて高出力ではあるが、特殊な機能は備えられていない。それを操るフロンタルの精密な射撃能力により、数値では表せない脅威を相手に示す。銃身下部にアドオン方式のグレネード・ランチャーを装着可能



■CHECK
ラプラス史跡戦において頭部を損傷した際、装甲下部から現れたのは簡素のような内部フレームだった



■頭部ユニット



■コックピット・ハッチ開閉

■脚部フレキシブル・スラスター



■足裏



REAR VIEW

■CHECK
背面と脚部に備えられた大型推進器。ユニット自体に可動領域が備えられたことにより、いかなる姿勢においても、驚異的な推力をもって操縦者の機動イメージを具現化する。巨大な翼を想起させるユニット形状は最大出力時において、見た目通りに「羽ばたく」のだ

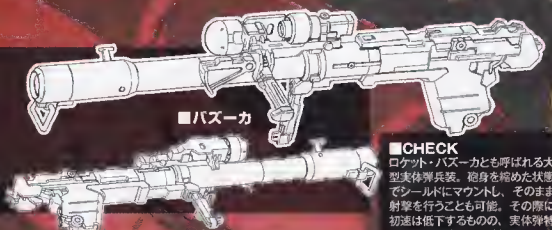
■背面
フレキシブル・スラスター



■展開状態

ビーム刃
発生方向

■ビーム・
サーベル



■バズーカ

■CHECK
ロケット・バズーカとも呼ばれる大型実体弾兵装。砲身を縮めた状態でシールドにマウントし、そのまま射撃を行うことも可能。その際に初速は低下するものの、実体弾特有の物理破壊力は全く色褪せない。



■シールド

■CHECK
裏面のマウントアームに装着された2基のビーム・アックスを展開発振する、攻防一体の多目的防御装備。裏面先端部にはグレネード・ランチャーの装着も可能。強奪後に「袖付き」が独自開発を行い自軍の紋章をモチーフとしたデザインとなった

赤い機体は彗星となる

強奪時の直線を基調としたシルエットから、ネオ・ジオンが用意した新たな外装によって有機的なジオン系の印象へと一新されたモビルスーツは、見た目通りの優容に違わぬ性能を有していた。

背面と脚部側面にセットアップされた大型のフレキシブル・スラスターは、機体追従性を向上させるサイコフレームの利点を追求した本機に対する澱み無い答えとして、その存在意義を誇らしげに主張する。

この機構を初めとして、全身に配された スラスター群を巧みに使いこなせるクロンタルが生み出した独特の機動と、真紅に塗り替えられたカラーリングを纏った姫々しい姿は、噂を真実に変える力を十分に示した。

フル・フロンタルを「赤い彗星」として認めさせるに足る説得力を与えた専用モビルスーツ、それがMSN-06S『シナンジュ』なのである。

...next [Conclusion]

■CHECK
ラプラスの箱を巡る動乱、その決着は確実に近づいている。「丸裸」を意味する名前とは裏腹に、謎めいた言動で世界を翻弄するフル・フロンタルが身体を預けるモビルスーツもまた、世界を、我々を翻弄し続けていくのであろう。フロンタルのために作られたシナンジュに不足点はない。この完成された専用機が今後どのような戦い様を見せるのか── かつての赤い彗星を思い出しながら、その時を待つことにしたい



Who cares as long as the pilot doesn't hit us.

[当たらなければ、どうということはない]

MSN-06S SINANJU



SPEC
頭頂高：22.6m
本体重量：25.2t
全備重量：56.9t
ジェネレーター出力：3240kw
スラスター総推力：126600kg
センサー有効半径：23600m
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：ビーム・サーベル
ビーム・アックス
ビーム・ナギナタ
ビーム・ライフル
バズーカ
グレネード・ランチャー
60mmバルカン砲
シールド

[Conclusion] 抗えぬ筋書き

宇宙世紀0096年、『ラプラスの箱』を巡る戦乱において〈シナンジュ〉は自身の兄弟機ともいえるRX-0〈ユニコーンガンダム〉と交戦、自身の若さを全力でたぎらせる〈角獣〉に対し、その熱をいなしつつ徐々に弱らせていく闘牛士〈マタドール〉のような戦いを見せたという。

時に人智を超える乱れを見せた〈ユニコーン〉をも自らのペースに引き込み、終始冷静に事を進めるフル・フロンタルの姿は、まさにこの時代をコントロールしていたのだと表現できるのではないか。

箱の根は深く、図らずしてその秘密に深く関わり「神付き」の所属艦《ガランシェール》との連携を行った連邦軍ロンド・ベル隊の艦船《ネェル・アーガマ》は、あろうことか友軍の大型旗艦《ヤラル・レビル》の攻撃に晒されてしまう。圧倒的な戦力差の前に、ただ為す術もなく宇宙の藻屑と去りゆく運命にあった彼らを救った「術」は、鮮烈な赤を纏ったモビルスーツだった。

《シナンジュ》は、フル・フロンタルの意のままに動く。そのメイン・スラスターの光跡は、人が導かれざるを得ない道標となって、これからも彼の思い通りに伸び続けていくのだろうか──。

...next [GUNDAM UC episode2 "The Second Coming of Char"]

[Introduction]

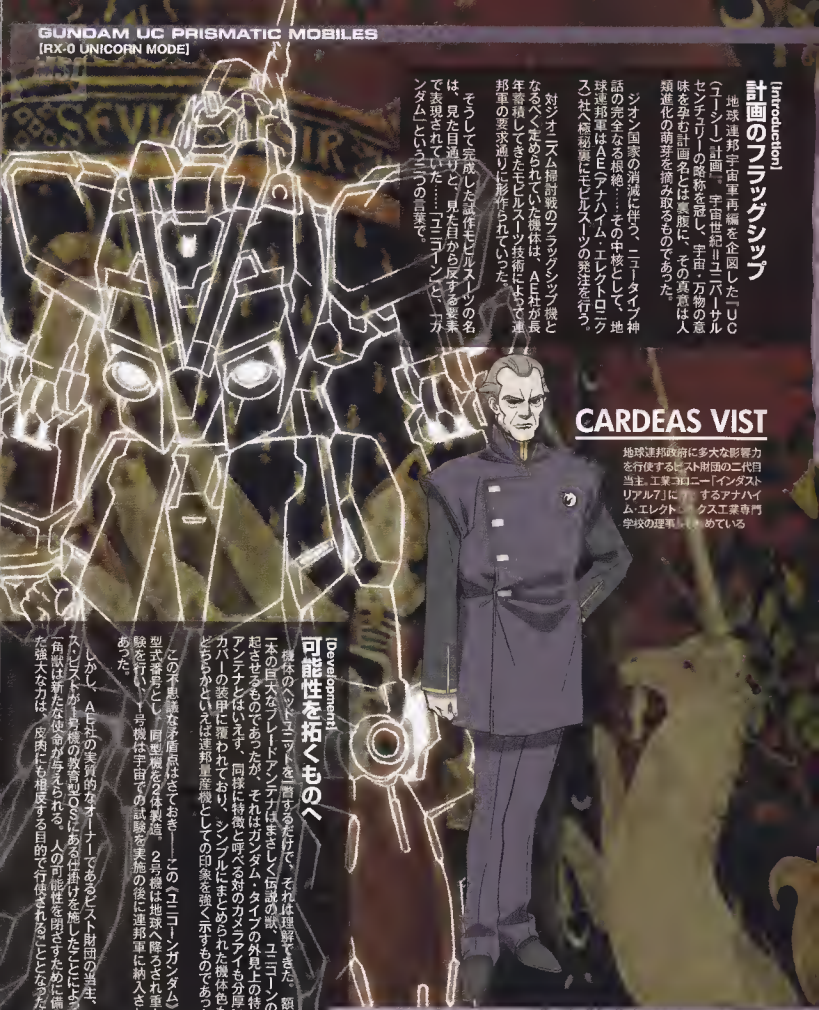
計画のフラッグシップ

地球連邦宇宙軍再編を企図した「UC（ユーシー）計画」。宇宙世紀＝ユニバーサルセンチュリーの略称を冠し、宇宙＝万物の意味を孕む計画名とは裏腹に、その真意は人類進化の萌芽を摘み取るものであった。

ジオン国家の消滅に伴う、ニュータイプ神話の完全なる根絶……その中核として、地球連邦軍はAE（アナハイム・エレクトロニクス）社へ極秘裏にモビルスーツの発注を行う。

対ジオニズム掃討戦のフラッグシップ機となるべく生まれていた機体は、AE社が長年蓄積してきたモビルスーツ技術によって連邦軍の要求通りに形作られていった。

そうして完成した試作モビルスーツの名は、見た目通りと、見た目から反する要素で表現されていた……「ユニコーン」と、「ガンダム」という二つの言葉で。



CARDEAS VIST

地球連邦政府に多大な影響力を行使するビスト財団の二代目当主。工業コロニー「インダストリアル7」に存在するアナハイム・エレクトロニクス工業専門学校の理事長も務めている

[Development]

可能性を拓くものへ

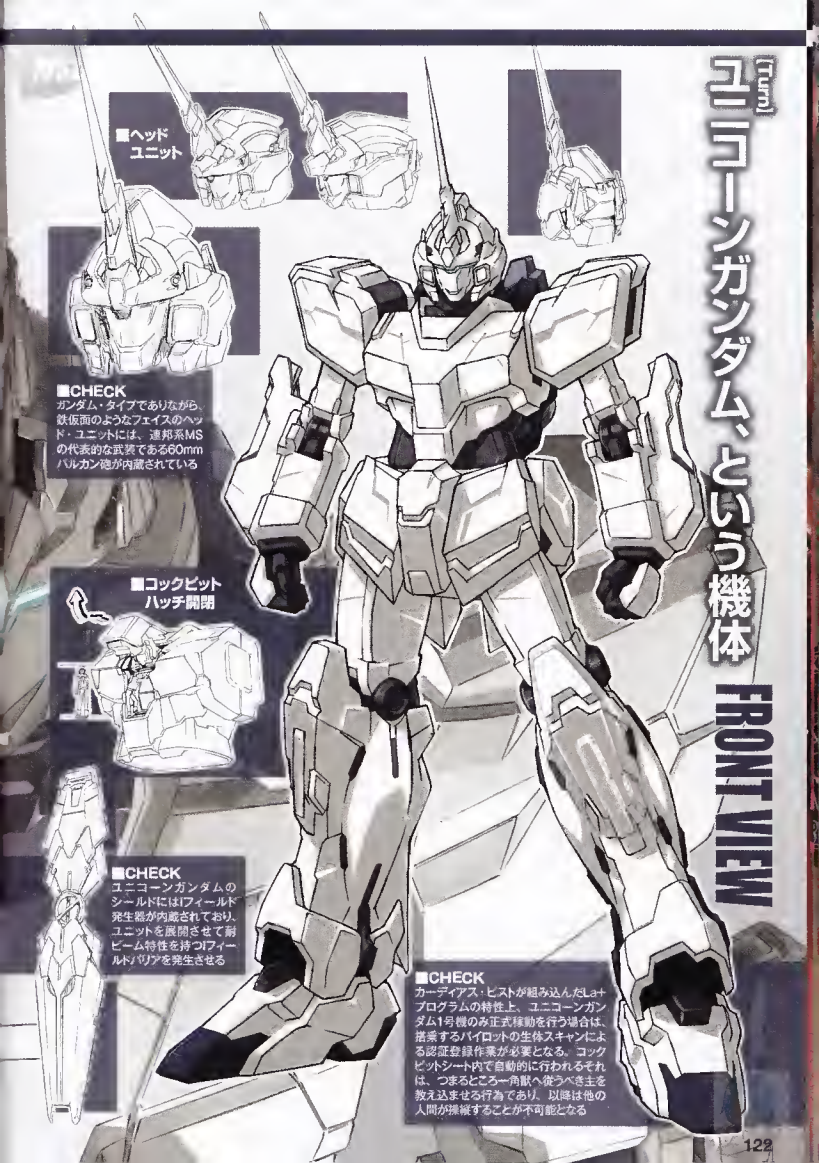
機体のヘッドユニットを一言するだけで、それは理解できた。二本の巨大なフレードアンテナはまさしく伝説の獣、ユニコーンの二本角を想起させるものであったが、それはガンダム・タイプの外見上の特徴であるVアンテナとはいえず、同様に特徴と呼べる対のカメラアイも分厚いフェイスカバーの装甲に覆われており、シンプルにまとめられた機体色も相まって、どちらかといえば連邦量産機としての印象を強く示すものであった。

この不思議な矛盾点はさておき――この《ユニコーンガンダム》はRX-0を型式番号とし、同型機を3体製造、2号機は地球へ降ろされ重力下での試験を行い、1号機は宇宙での試験を実施の後に連邦軍に納入される予定であった。

しかし、AE社の実質的なオーナーであるビスト財団の当主、カーディアス・ビストが1号機の教育型OSにある仕掛けを施したことによって、宇宙の《角獣》は新たな役割が与えられる。人の可能性を閉ざすために備えられていた強大な力は、皮肉にも相反する目的で行使されることとなったのである。

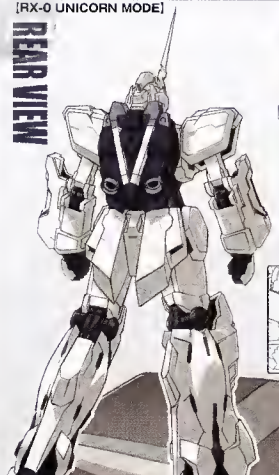
...next[Turn]

[Turn] ユニコーンガンダム、という機体 FRONT VIEW

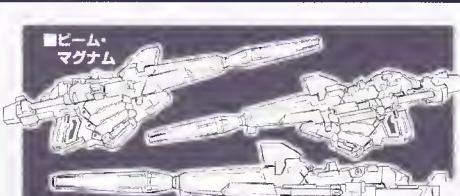


[RX-0 UNICORN MODE]

REAR VIEW



■ビーム・マグナム



サイドグリップ



Eパック



武装対比



■CHECK

一射で通常ビーム・ライフルの4倍もの威力を持ったユニコーンガンダムの専用武装。放たれた光弾が纏うエネルギーのスパーク光ですら、かすめた敵機をビーム・サーベルのように切断させる程であり、巨大なモビルアーマークラスの機体をも一撃で撃破する。標準的な容量のEパックを一度で使い切るため、独自規格の連結タイプ(5発分)を使用する

■ハイパー・バズーカ



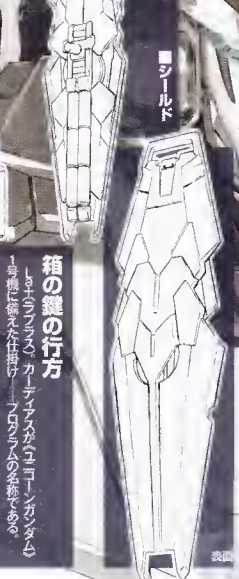
伸縮機構でマウント時は短くなる

弾体

カートリッジ

裏面

■シールド



表面

箱の鍵の行方

Ls+〈ラプラス〉カーディアスが〈ユニコーンガンダム〉1号機に備えた仕掛け——プログラムの名称である。

ビスト財団が長年秘匿してきた、開ければ地球連邦政府を転覆させる力を持つといわれる〈ラプラスの箱〉を開く手段であり、宇宙世紀の闇を象徴した状況に石を投じるために、箱の開放を決意したカーディアスの手によって、連邦軍、AE社を欺いて組み込まれたのだ。

一定の条件をクリアすれば起動するというLs+を備え、いわば〈ラプラスの箱〉を開く〈鍵〉となった〈ユニコーンガンダム〉は——その箱が本当にそれほどの力を示すものであれば、機動戦闘兵器という範疇を越えて宇宙世紀をも動かす存在へと化したと表現できよう。

全身のムーバブル・フレームを最新のサイコミュ技術、サイコフレームで構成したフル・サイコフレーム機造は、その身に宿す鍵を守る盾となり、従来のガンダム・タイプの基本武装をアップデートさせた装備は、鍵を奪わんと近づく者を容赦なく退ける力を生み出すのである。

カーディアスは1号機を、〈UC計画〉が滅ぼすべきジオン——ネオ・ジオンの残党軍「袖付き」の手に渡るように画策したが、それを察知した連邦軍、さらには箱の流出をよしとしない財団一派の介入により、取引の場であった仁葉コロニー〈インダストリアル7〉を巻き込む争乱へと発展してしまった。

その戦火の中で、死の際に立ったカーディアス・ビストが〈ユニコーンガンダム〉を託した相手は、連邦軍でもジオンでもない一人の少年だった。

...next [Conclusion]

BANAGHER LINKS

■CHECK
スペースコロニー、インダストリアル7のアナハイム・エレクトロニクス工業専門学校に通う学生。一人の少女との出会いが、彼の運命を変えるきっかけとなる

It's the beast of possibility.

〔――それは、可能性の獣〕

[Conclusion] ユニコーンの日に、少年は

〈インダストリアル7〉での平穏な日常にずれを感じつつ、進むべき道を見出せないでいた少年、バナージ・リンクス。彼は自分が〝ラプラスの箱〟の守人るビスト一族の血を引いた人間であることと同時に、目の前のカーディアスが父親だと知った。

全ての想いを我が子に伝え、果てたカーディアス。そして全ての想いを受け止めたバナージは、白い一角獣に身体を預ける決意に満ちて――宇宙世紀を揺るがす秘密を抱えた伝説の獣は、遂に目覚めたのである。

連邦軍でもなく、ジオンでもなく、バナージは〝人の人間〟として1stを積んだ〈ユニコーンガンダム〉に導かれ、宇宙世紀の世界を流転する。彼にしか扱えないモビルスーツは、彼自身ですら全てを知らぬ危険な代物とも言えたが、バナージはその手綱を可能性という力を込め、時に翻弄されながらも強く握り続けていったのだ。

RX-0
UNICORN GUNDAM
UNICORN MODE

SPEC
頭頂高：19.7m
本体重量：23.7t
全備重量：42.7t
ジェネレーター出力：3480kw
スラスター総推力：142600kg
センサー有効半径：22000m
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：ビーム・サーベル
ビーム・マグナム
60mm/バルカン砲
ハイパー・バズーカ
シールド

...next 【GUNDAM UC episode1 "Day of the Unicorn"】

[Introduction]

無敵の切り札

かつて、アクシズのネオ・ジオンには「無敵」であることを目指した「ニュータイプ専用モビルスーツ」が存在した。NZ-000〈クィン・マンサ〉の名称を持つ40m級の巨体は、当時の機動兵器進化における「つの頂と表現するに相応しいものであった。

宇宙世紀0088年、第次ネオ・ジオン戦争〈ハマーン戦争〉の終盤に実戦投入された〈クィン・マンサ〉の戦闘回数は実に少ないものだといえたが、その身に宿した圧倒的な攻撃・防御能力を惜しみなく、時に過分なまでに行使する姿は、戦闘に参加した両軍全ての人の記憶に深く刻み込まれたという。

人の力が生みだした科学では解明できない現象、さらには搭乗者自身の心的要因によって宇宙世紀の舞台から退場してしまったが、「兵器として〈クィン・マンサ〉の純粋な戦闘力の高さは、なんら揺らぐことなく語り継がれていったのである。





[Development]

小さくとも、なお

アクシズのネオ・ジオン亡き後も、ジオンの名を継いだ別勢力は後継機種の開発計画を進行させていたが、単機で圧倒的な力を備えるサイコミュ搭載モビルスーツである〈クィン・マンサ〉のコンセプトは、ニュータイプ能力を有するパイロットの用意をクリアしてもなお、多くの機能を盛り込んでしまったがゆえの大型機体であることが一番のネックであり、その後継機は通常クラスの体躯であることが強く求められた。

機能性を維持したままの小型化――専門技術に疎い常人でもわかる無理難題である。手がかりすら掴めぬまま設計は困難を極め、時は開発計画が修正され、巨大サイズを維持した強化案の方向性も提示されていたという。

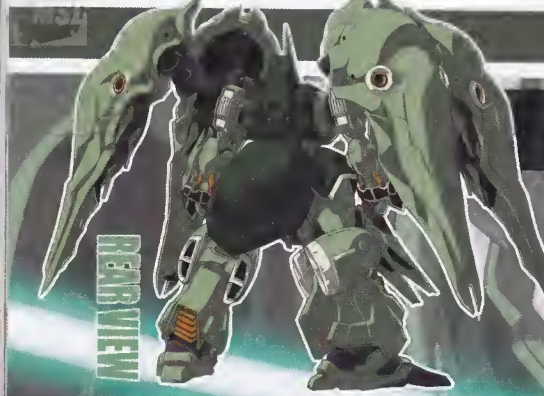
もはや本末転倒ともいえる膨んだ流れの中で、「つの新技術が基点となり、積年の難題は呆気なく解決したのである。

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume022_NZ-666

...next[Turn]

[Turn] クシャトリヤ、という機体

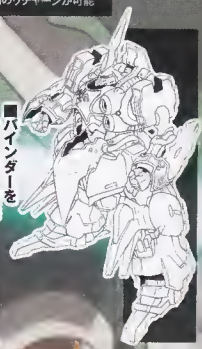




■ファンネル



■CHECK
基礎構造はキュベレイ系に準じるが、機体と同様に性能向上、小型化が図られた。バインダーに格納しエネルギーと推進剤のリチャージが可能



■バインダーを取り外した状態

■CHECK
本機と相対したものに「四枚羽根」と呼ばせるシルエットを生み出す、特徴的な複合ユニット。6基のファンネルを収納するファンネルコンテナ、Iフィールドジェネレーター（発生器）、スラスター、サブ・アーム、プロペラントタンクを内蔵する



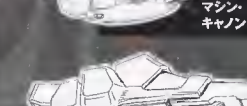
■バインダー

■サブ・アーム



■コックピットハッチ

マシン・キャノン



■表面

ワンアンドオンリー

「NZ-666クシャトリヤ」は「袖付き」と仇名される元ネオ・ジオン残党軍が開発した20m級のサイコミュ搭載モビルスーツである。複数の機能を集約したバインダーの増設と、各種機体構成装置の高密度実装技術やノウハウの蓄積によって「クィン・マンサ」のスペックを維持したままでの小型化に成功している。

特にコックピット周辺を中心に構造材として使用しているサイコフレームの存在が決定的といえたが、第二次ネオ・ジオン戦争「シャアの反乱」後のネオ・ジオンにサイコフレームを独自生産する能力はなく、資材備蓄は新生ネオ・ジオン軍が所有していたものが全てであった。そのような事情もあり、本機はほぼワンオフの機体となっている。

追加生産はおろか、損傷箇所の修復に使用する予備パーツの調達もままならぬ「クシャトリヤ」だったが、搭乗する強化人間「マリーダ・クルス」の操縦技術が加わって、僅「つかぬ」無敵」の強さを連邦軍へ示したという。

...next [Conclusion]



La Belle au bois dormant

【眠り姫】

【Conclusion】

再び羽ばたくとき

宇宙世紀0096年。地球連邦宇宙軍の外郭部隊ロンド・ベルに所属する強襲揚陸艦〈ネェル・アーガマ〉。そのモビルスーツデッキ内に「袖付き」の〈クシャトリヤ〉は収容されていた。

敵方の艦――その状況を耳にして即座にわくであろう違和感は、機体の保管状態を一見すれば瞬時に晴れるものであった。頭部なはずのバインダー、片腕、片足などがもげ、頭部に突き立てられた「白い」ビームサーベルの柄。

そのサーベルと同じ色に包まれ、サイコミュ搭載モビルスーツを倒すことのみに特化したハンティングマシーン〈ユニコーンガンダム〉との交戦により〈クシャトリヤ〉は無惨な姿へと変わり果てていたのである。

予想だにしなかった展開による敗北という、〈ヘウィンマンサ〉同様の道を辿らんとする〈クシャトリヤ〉。だが、失った四肢を受け止める肉体と、そこに意志を注ぎ込む搭乗者さえ健在であれば、モビルスーツは再び息を吹き返す。連邦の下にある限り、そのような機会は生まれようもないが――宇宙世紀というものは、得てして予想だにしない展開が起こりうるものなのだ。

SPEC
頭頂高:22.3m　本体重量:29.7t　全備重量:74.02t
ジェネレーター出力:16540kw　スラスター総推力:197800kg
センサー有効半径:18500m　装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ビーム・サーベル、ビーム・ガン、ファンネル、メガ粒子砲
マシン・キャノン、Iフィールド・ジェネレーター



NZ-666
KSHATRIYA



[Introduction]

試験戦闘

宇宙世紀0094年。某宙域にて、とある新型試作可変モビルスーツの試験戦闘が行われようとしていた。

対する仮想敵機《アグレッサー》は可変モビルスーツ《デルタプラス》。体躯を包む蒼灰のカラーリングが、細身の機体をより強調させている。

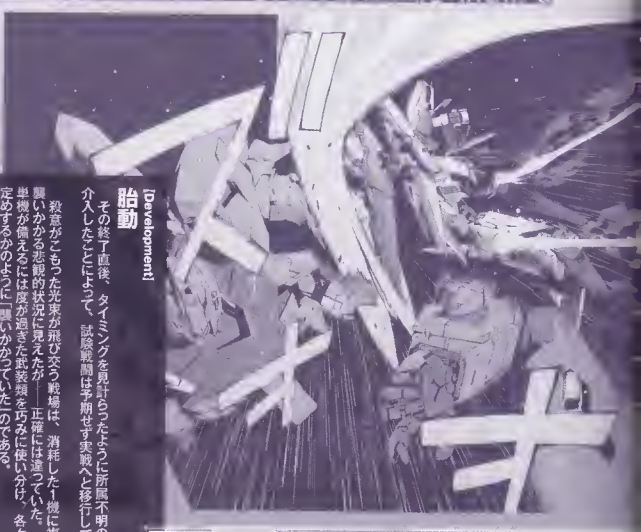
その眼前、今回の主役ともいえる新型機は、《デルタプラス》を祖としていることを一瞬錯覚させるほどに大柄な機行装備に加え、機体色は純白と明紫で彩られていた。

戦闘内容は《デルタプラス》を制限時間内に無力化すること。すべては純白明紫の可変機が備える個性的な既存特殊装備と、新サイコミュ装置の優位性を実証するための試験だった。

序盤から過激戦の様相を見せる2機。まつすぐな機動で追いすがらんとする新型機に対し。経験という性能だけでは埋まりようのない力で翻弄する《デルタプラス》のパイロット。

だが、煙まったのだ。新型機の駆動部から青い炎が発生するたびに、パイロットの機動・攻撃精度が加速的に増していったのである。

決して《デルタプラス》が手加減したわけでもなく、ともすれば新型機のテストパイロットがそうしているのかと疑われるほどに鮮やかな成長を見せた新型機の勝利という結果で試験は終了した。



[Development]

胎動

その終了直後、タイミングを見計らったかのように所属不明の宙賊達が介入したことによって、試験戦闘は予期せず実戦へと移行してしまう。

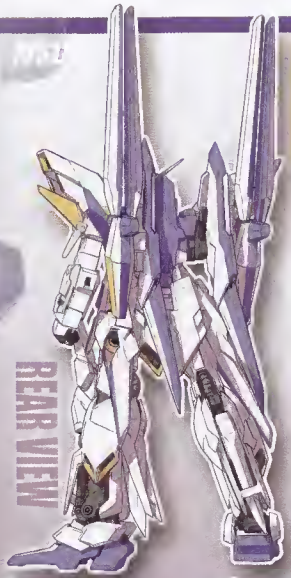
殺意がこもった光束が飛び交う戦場は、消耗した1機に複数の賊が襲いかかる悲観的状況に見えたが——正確には違っていた。新型機は、単機が備えるには度が過ぎた武装類を巧みに使い分け、各々の敵を品定めするかのように「襲いかかっていた」のである。

恣すら持たぬ賊とは言え、中に人が収まっていることなど意にも介さず無慈悲に撃破していく様は、試験戦闘を行っていた《デルタプラス》のパイロットからしても、きわめて違和感を覚えるものであったという。

すべてが終わり、戦場はただの宇宙へと戻る。そこに在るのは無数の残骸と《デルタプラス》、そしていまだ熱を帯びる——《ガンダム》の名を持つモビルスーツだった。

...next [Turn]

[Turn] ガンダムデルタカイ、という機体



■CHECK
かつてニューガンダムが装備していたジェネレーター搭載型ファンネルのプロトタイプ。ユニット自体に展開機能はなく、オールレンジ攻撃用途のみに限定されてはいるが、開放型バレルからショットガンを思わせる高出力のビーム散弾を放射する

■プロト・フィン・ファンネル



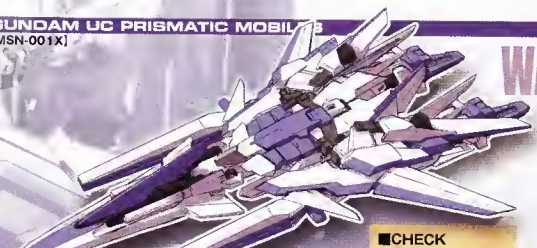
■ヘッドユニット

■CHECK
百式の改良バリエーション機向けに開発していた長射程の大型携行火器。通常のビーム・ライフルとは比較にならない威力を示す。デルタプラス本来の標準兵装でもあり、そのまま継続してデルタカイにも採用された

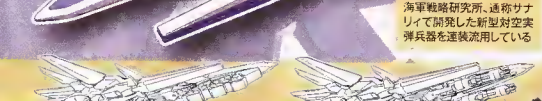
■ロング・メガ・バスター

■CHECK
本機のシールドはもはや便宜上の呼称でしかなく、それ自体が完全な変形用サブユニット兼、オプション装備の換装が可能なウェポン・プラットフォームと化した。ビーム・サーベルは収納時にビーム・キャノンの砲身部としても機能する

WAVE RIDER



■CHECK
海軍戦略研究所、通称サナリイで開発した新型対空実弾兵器を運装流用している





■炸裂ボルト



使用時は前方へ展開



■メガ・マシン・キャノン

■ハイ・メガ・キャノン



■CHECK
本来は増設ユニットのパージ用に備えられていたが、使用時の衝撃力を近接攻撃手段としても応用したというフルアーマー百式改の同名装備を攻撃用途に特化させたアップデート版。内部にはキャパシタが組み込まれており、攻撃時には爆破衝撃に加え、高圧電流による複合破壊効果を与える

■CHECK
ユニット内から直接供給される大量のエネルギーを臨界まで圧縮充填し、一挙に開放する広域兵器。ZZガンダムが内蔵していた同名兵器と比べ、ビーム出力は45%まで抑えられているものの、ある程度の連続発射が可能となった



■シールド

ベールに包まれた可変機

MSN-001X《ガンダムデルタカイ》は、《デルタプラス》の運用データを基に「特殊装備」を追加実装させ、それらの技術実証を目的とした試作可変モビルスーツである。

機体特性が一変するモビルスーツとファイターの両形態において、各種兵装がどのような機能変化を示すのか、また、示された変化に対する効果的な改良点を見出すための純粋な試験機体ではあったが、それ故にきわめて攻撃能力を特化させる設計が行われた。

これは本機に設定された武装群を見れば明らかであり、主武装となる大型携行火器ロング・メガ・バスター＆オプション武装のハイ・メガ・キャノンなど、かつて「恐竜的進化」と評された出力偏重時代を想起させる高威力兵装を筆頭に、数多くの特徴的な武器が用意されているのである。

なにより、も《デルタカイ》最大の特徴は、それらを活かしつつも《デルタカイ》に搭載された新型サイコミュ装置「ユニコーン・ナイトロ」の存在だろう。

適性のない一般兵士でも「ユータイプ並みの戦闘能力を手にするという謳い文句の本システムは、複雑な火器管制・機体追従性の向上だけではなく、機械的処理でそれらを再現する従来の準サイコミュでも成し得なかった感応波検知型のオールレンジ兵器、いわゆるファンネルの運用を可能としたのである。

まさに革新技術と表現出来るものの、ナイトロの詳細は非公表となっており、一部の専門家からは搭乗者の精神状態に影響を及ぼす可能性なども指摘されている。

...next [Conclusion]

[MSN-001X]

NEXT ACROSS THE SKY

[アクロス・ザ・スカイ]

[Conclusion]
そして小さな地球から始まる

かつて〈デルタ〉を冠する〈ガンダム〉が生まれようとしたが、技術の壁に阻まれ幻に終わったという。そして今〈デルタ〉に〈カイ〉が交わり、漸く幻は現のモビルスーツとして誕生した。

過分な兵装、そして謎を含んだ新型サイコミュ。第二次ネオ・ジオン戦争を経て疲弊した地球連邦軍に、このような特殊新型機を創りあげる必要があったのか現時点では不明だが、近い将来にそれらの疑問点も晴れることになるだろう。

《ガンダムデルタカイ》の戦闘試験終了後、関わった連邦軍士官はこう言ったという。「《ガンダム》は全てが求められるまま、いつの時代も生まれるべくして生み出された」のだと。

宇宙世紀0094年、人の生活圏から見れば、もはや小さな地球の、さらに小さな場所から——とてつもなく大きな意志が動き出すのだ。

SPEC
頭頂高:19.6m
本体重量:28.0t
全備重量:68.6t
ジェネレーター出力:3520kw
スラスター総推力:101500kg
センサー有効半径:16200m
装甲材質:カンダリウム合金
武装:ビーム・サーベル
ロング・メガ・バスター
60mmバルカン砲
ビーム・キャノン
炸裂ボルト
メガ・マシン・キャノン
ハイ・メガ・キャノン
プロト・フィン・ファンネル
シールド

MSN-001X
GUNDAM DELTA KAI

[introduction]

ユニコーンの日から

宇宙世紀0096年、工業用コロニー〈インダストリアル7〉にて、少年バナージ・リンクスは父カーディアス・ビストから純白に彩られた一体のモビルスーツを託される。

単なる二兵器以上の意味と使命を新たに埋め込まれたその機体を駆って、バナージは戦乱の火が燻る宇宙世紀に単身を晒した。

その初戦闘は、彼が戦いを戦いとして理解する間もなく迎えることとなった。ネオ・ジオンの残党軍、通称「袖付き」の行動部隊「ガランシェール隊」に所属するNZ-666〈クシャトリヤ〉との遭遇戦である。

バナージは、カーディアスから託され、そして受け止めた想いをしっかりと胸に留めつつ、確かな自身の意志で機体のフットペダルを踏み込み、純白の機体も素直にそれに応え〈クシャトリヤ〉を圧倒せんとした。

型式番号RX-0。現時における最新技術を文字通り全身に蓄えた白い機体は〈ユニコーンガンダム〉と名付けられていたが、モビルスーツに深く関わる者からすれば、その命名を素直に受け入れるには憚らざるを得ないものであったという。

ヘッドユニットから伝説の一角獣〈ユニコーン〉をイメージモチーフとしたことは否が応にも理解させるものの、「ガンダム」という表現に関しては――あくまでモビルスーツ名称の一種でしかないには、そういった理屈を越える歴史が「ガンダム」には含まれていることも事実であり、2角のブレード・アンテナ、特徴的な双眼のフェイス・デザインを有していないRX-0は、少々もしかもぬ機体だったのだ。

[Development]

変身の先に

〈クシャトリヤ〉のパイロット、マリーダ・クルスも「ガンダム」という存在に拘る一人であった。もっとも、彼女の場合は過営とは少々事情が違うのだが――ともかく、一角の〈ユニコーンガンダム〉と初遭遇した彼女は、華奢な体躯からは想像もつかぬ推力とパワーに驚きこそすれど、その新型機体を「ガンダム」だとは認識していなかったのである。

バナージと比べるまでもなく、戦いの経験と理解力がはるかに勝っているマリーダは、基礎性能こそ高いものの、携行火器すら持たず、まるで赤子がもがくような機動を見せるRX-0に対し、慢心の欠片も見せずに冷静、冷徹な戦闘行動へと移行していったのは極めて自然なことであり、バナージ・リンクスの物語も早々にして終焉を迎えたかに見えた。

だが、そのような心配も全て杞憂でしかなかった――角獣がその角を割って破壊衝動をさらけ出した先には、誰もが異論を挟めぬ、紛れもない「ガンダム」が在ったのだから。

...next [Turn]

MOBILE BUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
volume [EX] _RX-0 DESTROY MODE

[Turn] ユニコーンガンダム、という機体

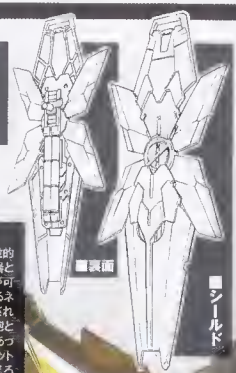
FRONT VIEW



REAR VIEW



■CHECK
デストロイモード時には
シールド全体が上下にスライドし、Iフィールド発生器を中心としてサイコフレームがX状に展開する

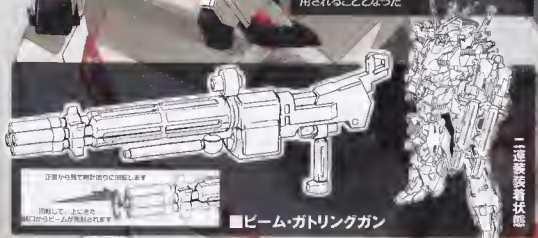


■裏面

■シールド

■CHECK
特徴的な四連装の銃身から、同年代の一般的なMSが装備する単発式のビーム携行火器と同威力のビーム弾を高速で連射することが可能なこの兵装は、本来「袖付き」と仮名されるネオ・ジオン残党軍のクシャトリヤ用に開発されたものであった。機体に内装するメガ粒子砲とファンネルを主武装とするクシャトリヤではあったが、それぞれの使用時には機体、パイロットにかかる負担が大きいなど、所謂「使いどころの限られた」兵装であったため、それらを補助する一対の携行兵器として用意されていたのである。同軍のヤクト・ドーガに設定されていたメガ・ガトリングガンの機構を継承しつつ、安定性を主眼においたアップデートが行われた本兵装は、奇しくも「使いどころの限られた」ビーム・マグナムを主装備とするユニコーンガンダムにとって、それを補う新たな力として効果的に運用されることとなった

■CHECK
前腕部に収納したビーム・サーベル・ユニットを前方に展開、マニピュレーターをフリーにしたままでの白兵戦が可能となる



二連装装着状態

■ビーム・ガトリングガン



■ビーム・トンファー

ユニコーンとガンダム

連邦とネオ・ジオン、そのどちらにも与せず独自の道を歩み続けた《ユニコーンガンダム》1号機。

戦闘経験の乏しいバナージを庇に収めながら、ラプラスの箱の鍵であり続けられた最大の要因として、NT-Dシステムがもたらすその姿「デストロイモード」にあったことは疑いようのない事実であろう。

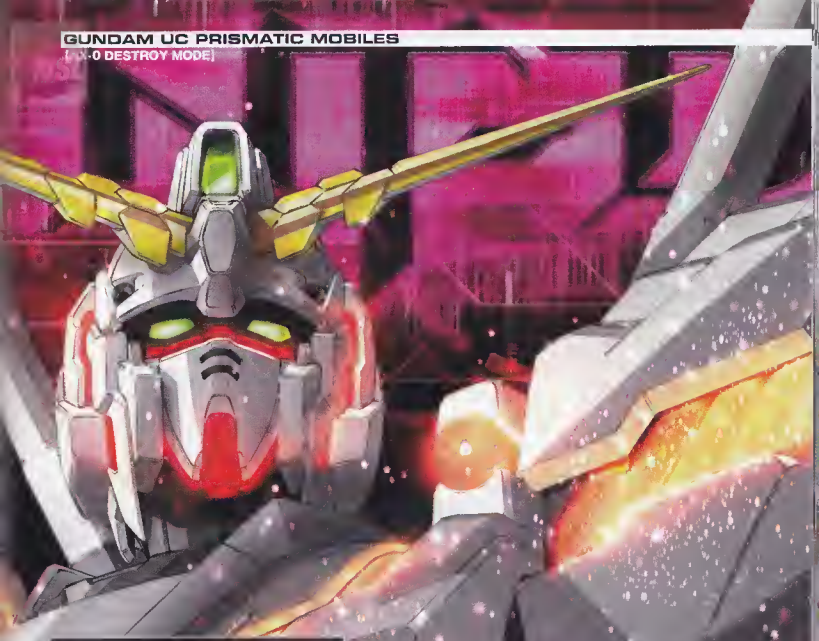
敵性サイコミュ・モビルスーツを関知して発動、体躯を伸長させるだけでなく、俗にいうガンダム・フェイスをさらけ出し、「ニュータイプの専用機のみに行動するNT-D」は、操縦から火器管制に至るまですべてシステムの管理化におかれる。

つまり感応波を発する特殊能力（ニュータイプや強化人間）を持つ搭乗者はシステムのソフトウェアとしてNT-Dに「利用」されるだけであり、もはやそこに経験や感情を介入させる必要はないのだ。

二つの姿、《ユニコーン》がその二角でニュータイプを感知し、《ガンダム》がニュータイプを破壊する、それが《ユニコーンガンダム》という機体名の真意だったのかもしれない。

バナージ・リンクスは、父が遺したこの機体を駆り、時に翻弄されながら、かつての日常では出会えようもなかった人々の生に触れた。その中で矛盾と対立に満ちた宇宙世紀を直視し、理解しようと彼なりに足掻いたのである。

...next [Conclusion]



RX-0 UNICORN GUNDAM DESTROY MODE

SPEC
頭頂高:21.7m
本体重量:23.7t
全備重量:42.7t
ジェネレーター出力:計測不能
スラスター総推力:計測不能
センサー有効半径:計測不能
装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ビーム・サーベル
ビーム・トンファー
ビーム・マグナム
60mmバルカン砲
ハイパー・バズーカ
シールド
ビーム・ガトリングガン

[Conclusion]
「D」の指すところ

当初「ユニタイプ・ドライブ」と呼ばれていたNT-Dシステムだが、その実は「ユニタイプを破壊するもの」――デストロイヤーの略称であった。

箱の鍵、Ia+(ラプラス)プログラムのトリガーを引くための条件となるNT-Dは、バナージが望まずとも、他者の謀略によって発動が促され、その度に彼の眼前では悲劇が繰り返された。だが同時にバナージは、出会った人々から悲劇をも種とする切り掛けを与えられ、徐々にではあったが自身の進むべき本当の道筋を見出し、成長していったのである。

やがてバナージ・リンクスは、父のカーディアス・ビストをして「暴れ馬」と評したモビルスーツを完全に手なずけ、力を引き出す術を得ていた。バナージが確固たる意志を注ぐ白い《ユニコーンガンダム》のNT-Dは、もはやユニタイプの可能性を破壊するものではなく、可能性をさらなる未来へ疾走――ドライブさせているように思えてならない。

...next [GUNDAM UC epicode 6 "Two Worlds,Two Tomorrows"]

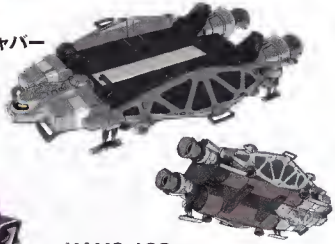


RGM-89A2　ジェガンA2型（ゼネラル・レビル配備機）

ゼネラル・レビルに配備されたジェガンは、初期タイプをベースに総合的な性能向上を目的としたA2型と呼ばれており、推進機関の強化をメインとする大幅な改修が行われている。防御兵装も専用の大型シールドが与えられた

頭頂高:19.0m
本体重量:24.2t
全備重量:50.6t
ジェネレーター出力:1980kw
スラスター総推力:65800kg
センサー有効半径:16300m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材

89式ベースジャバー

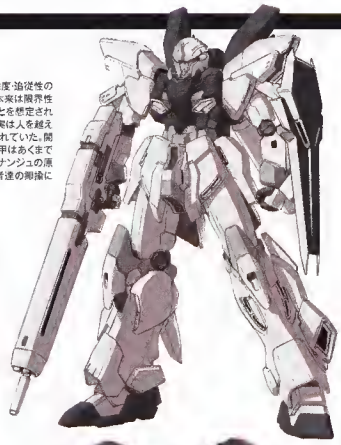




YAMS-132
ローゼン・ズール

かつてアクシズのネオ・ジオンで運用されたハンマ・ハンマのコンセプトを昇華させ、ギラ・ズールをベースに開発されたサイコミュ複合搭載型MS。3連メガ粒子砲を内蔵した両腕はインコムと呼ばれる準サイコミュ兵装となっており、本体から分離して有線式での遠隔操作が可能

頭頂高:22.5m
本体重量:25.8t
全備重量:72.6t
ジェネレーター出力:4950kw
スラスター総推力:257200kg
センサー有効半径:18200m
装甲材質:チタン合金
セラミック複合材
+一部
ガンダリウム合金



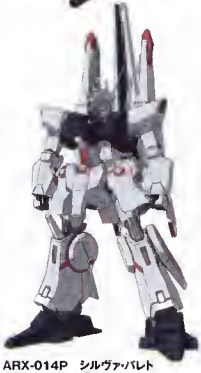
MSN-06S
シナンシュ・スタイン
UC計画においてサイコフレームの強度・追従性のテスト機として開発された試作MS。本来は限界性能を計測するために人が乗り込むことを想定されていないはずの機体だったが、その実は人を越えた能力を持つ「ある者」に向けて造られていた。開発コードはスタインO1、明灰色の塗装はあくまで後に彩られる機体の無垢、いわばシナンシュの原石（スタイン）でしかないという開発者達の期待によって名付けられた



AMS-119　ギラ・ドーガ
（アンジェロ・ザウパー専用機）
アンジェロのパーソナルカラーで塗装されたギラ・ドーガ。長時間運用、長射程攻撃に重点が置かれ、大型プロペラント・タンクとランケ・ブルーノ砲を装備した重武装仕様機である。長い砲身に備えられた強化センサーと、それに連動する頭部のモノアイは、従うべきフル・フロンタルを妖しく見定める



RGM-89D
ジェガン（D型先行配備機）
ジェガンD型の先行配備仕様機。差異は白と赤のカラーリングのみで、性能面の違いは一切ない。0094年、ある輸送任務の護衛機としてクラップ級に先行配備された記録が残っている



ARX-014P　シルヴァ・バレト
（ファンネル試験型）
連邦製ファンネル兵器の試験機。ジェネレーターを内蔵した有線式大型ファンネルを装備し、後のサイコミュ搭載機の開発に大きく貢献した



ARX-014　シルヴァ・バレト
捕獲したドーベン・ウルフをベースにAE社が改修を行った試作機。準サイコミュのテストを主眼としている



RGM-89DEW　EWACジェガン
ジェガンD型の換装機体の一種で、人型にして異形のフォルムを与えられた偵察用MS。複数のセンサー・ユニットは大部隊の目となる

episode 6

「宇宙と地球と」

2013年3月2日～



UC Bibliography

角度を変えて鮮やかに、多彩な色を照らし出すMOBILES。
本書に記されたすべてのNEXTは、これらにつながっていくのだ。

MOVIES



機動戦士ガンダムUC DVD

バンダイビジュアル



機動戦士ガンダムUC BD

バンダイビジュアル





DVD&BD 第1巻～5巻好評発売中、第6巻3月22日発売

NOVELS

機動戦士ガンダムUC 角川コミックス・エース版

福井晴敏

キャラクターデザイン:安彦良和　メカニックデザイン:カトキハジメ　原案:矢立肇・富野由悠季

全10巻好評発売中



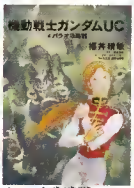
1ユニコーンの日(上)



2ユニコーンの日(下)



3赤い彗星



4バラオ攻略戦



5ラプラスの亡霊



6重力の井戸の底で



7黒いユニコーン



8宇宙と惑星と

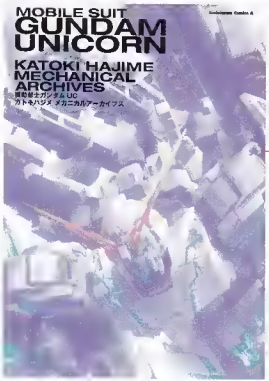


9虹の彼方に(上)



10虹の彼方に(下)

MOOK



機動戦士ガンダムUC カトキハジメ メカニカルアーカイブス

カトキハジメ



機動戦士ガンダムUC 角川スニーカー文庫版

福井晴敏

原案:矢立肇・富野由悠季
カバーイラスト:美樹本晴彦
イラスト:大森倖三

全10巻好評発売中



機動戦士ガンダムUC 角川文庫版

福井晴敏

原案:矢立肇・富野由悠季
カバーイラスト:加藤直之

全10巻好評発売中







COMICALIZE



機動戦士ガンダムUC バンデシネ

ストーリー:福井晴敏
コミカライズ:大森倭三
オリジナルキャラクター
デザイン:安彦良和
メカニックデザイン:カトキハジメ
原案:矢立肇・富野由悠季
(「機動戦士ガンダム」より)
1〜8巻好評発売中



機動戦士ガンダムUC テスタメント

虎哉孝征
ストーリー:福井晴敏
原案:矢立肇・富野由悠季
(「機動戦士ガンダム」より)
全1巻好評発売中



機動戦士ガンダムUC 『袖付き』の機付長は詩詠う

漫画:白石琴似
構成・設定:関西リョウジ
原案:矢立肇・富野由悠季
(「機動戦士ガンダム」より)
第1巻好評発売中



機動戦士ガンダムUC 星月の欠片

漫画:森田素
構成・設定:関西リョウジ
メカニック作画:石口十
原案:矢立肇・富野由悠季
(「機動戦士ガンダム」より)
第1巻好評発売中



機動戦士ガンダムUC MSV 楔

漫画:本橋雄一
シナリオ:関西リョウジ
原案:矢立肇・富野由悠季(「機動戦士ガンダム」より)
2013年3月26日発売



機動戦士ガンダムU.C.0094 アクロス・ザ・スカイ

漫画:葛木ヒヨン
シナリオ:関西リョウジ
原案:矢立肇・富野由悠季
(「機動戦士ガンダム」より)
ガンダムエースにて連載開始

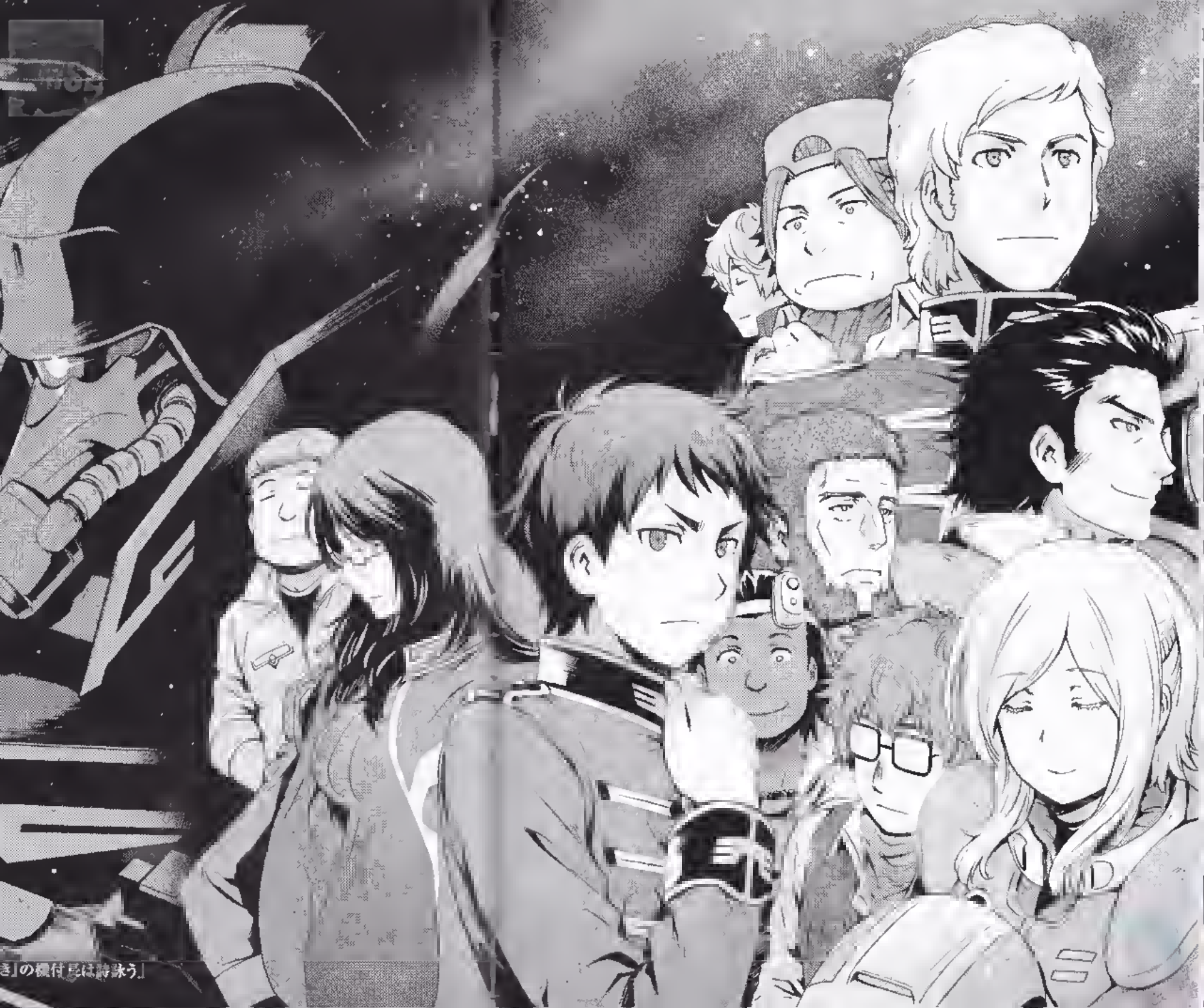
GAME

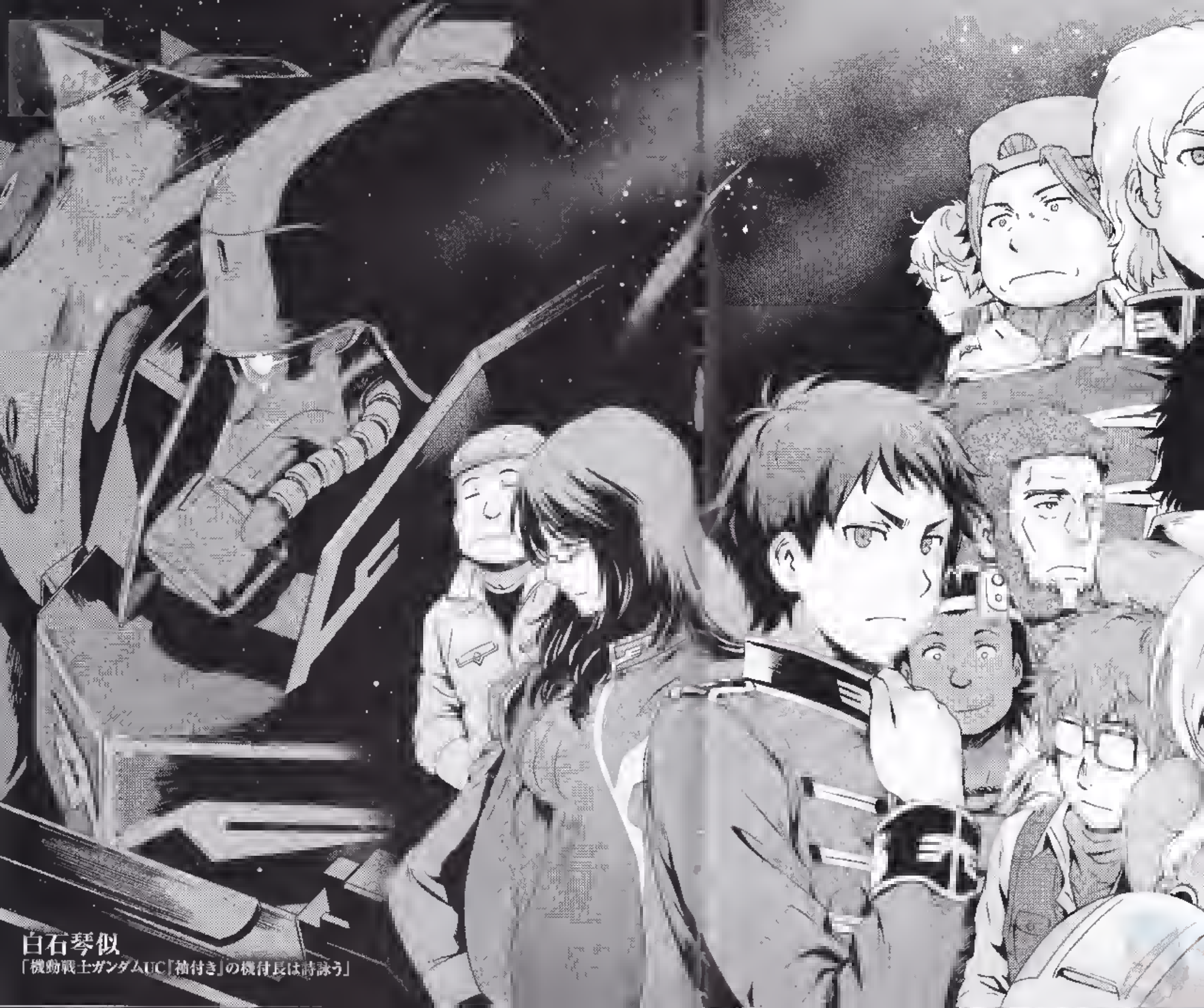
機動戦士ガンダムUC

PS3　バンダイナムコゲームズ
好評発売中



NEXT
PRISMATIC MOBILES
ILLUSTRATIONS

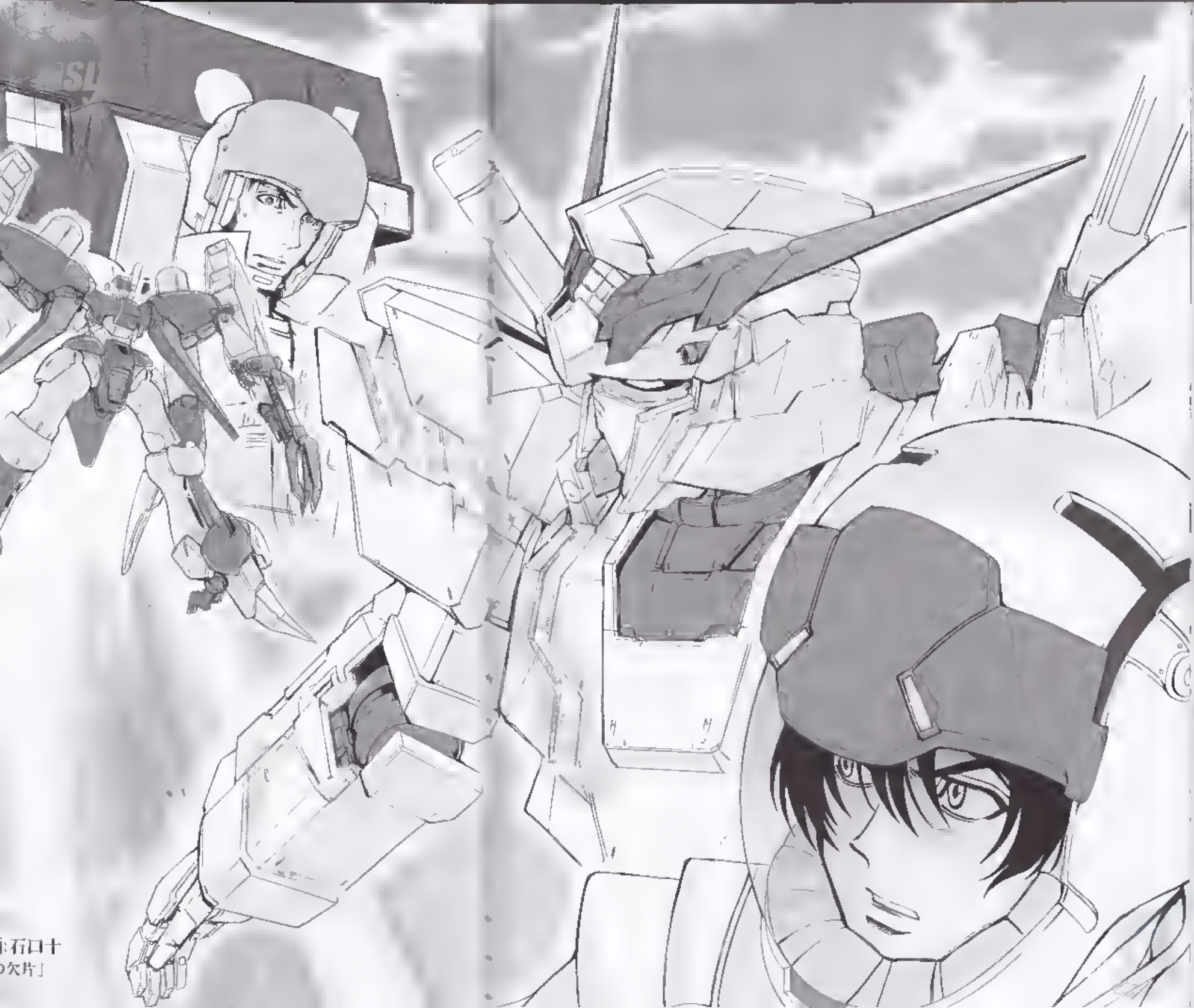

#05
き」の機付長は詩詠う」



白石琴似
「機動戦士ガンダムUC『袖付き』の機付長は詩詠う」



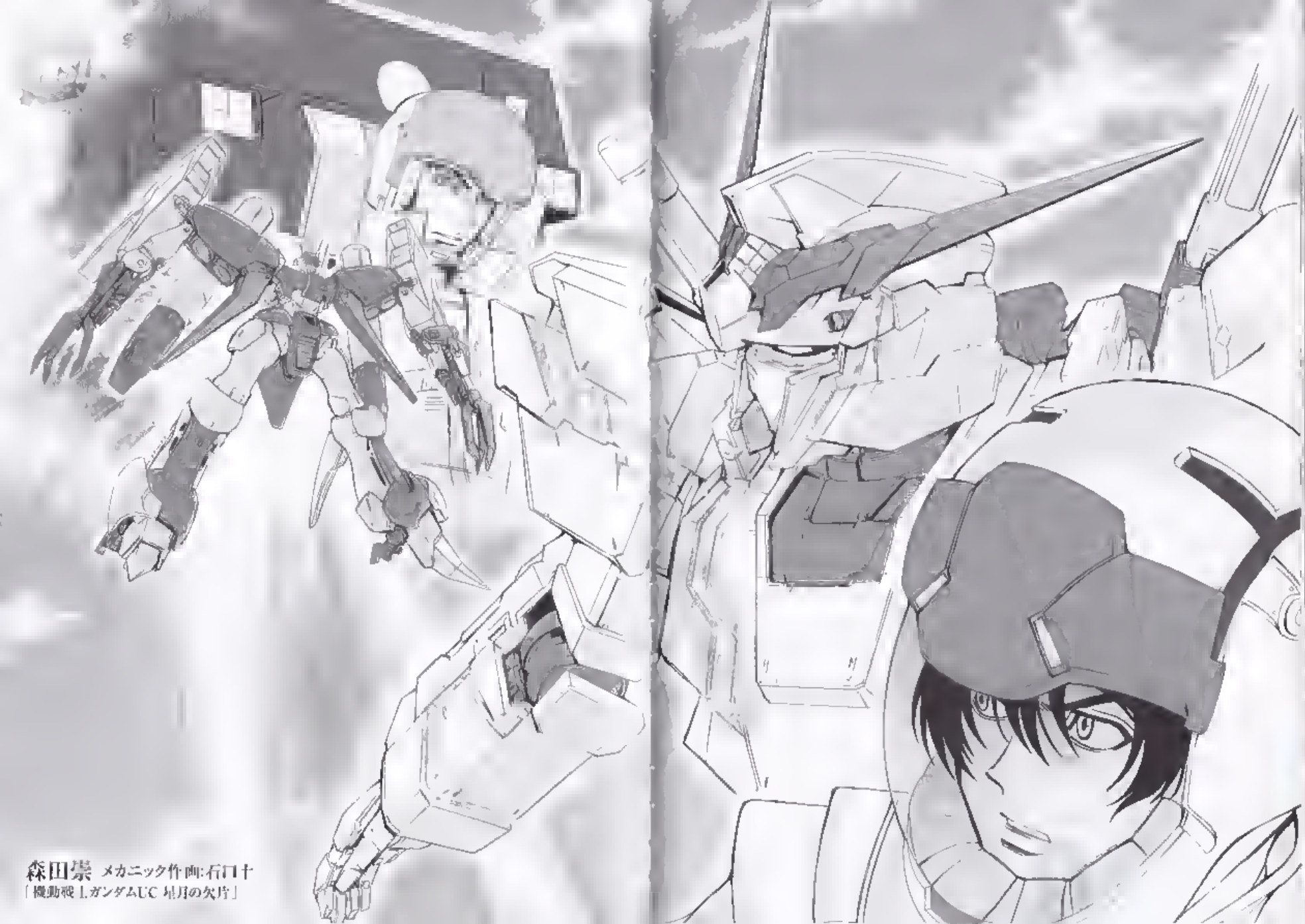
日石琴似
「機動戦士ガンダムUC「補付き」の機付長は詩詠う」



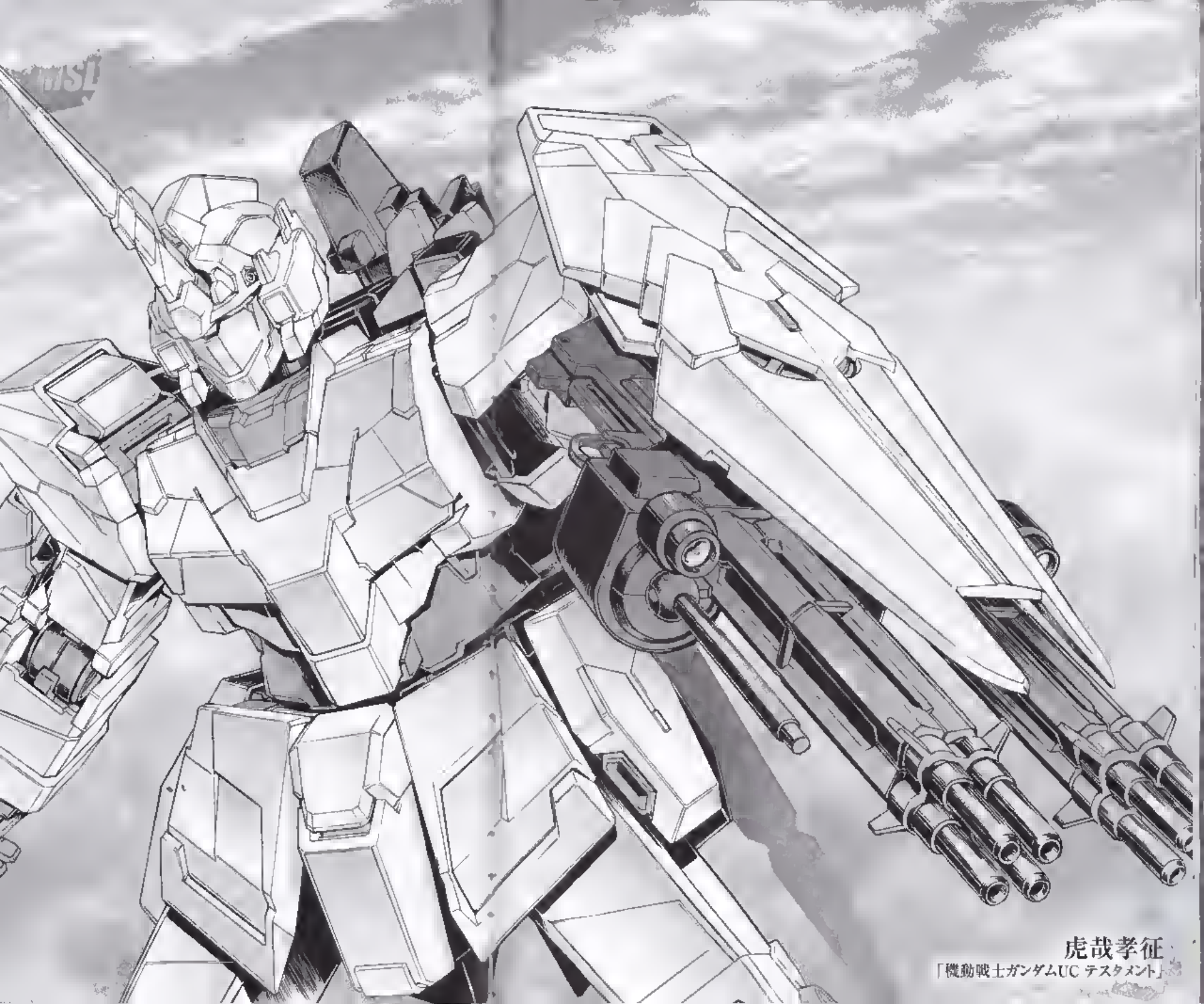
:石口十
の欠片」



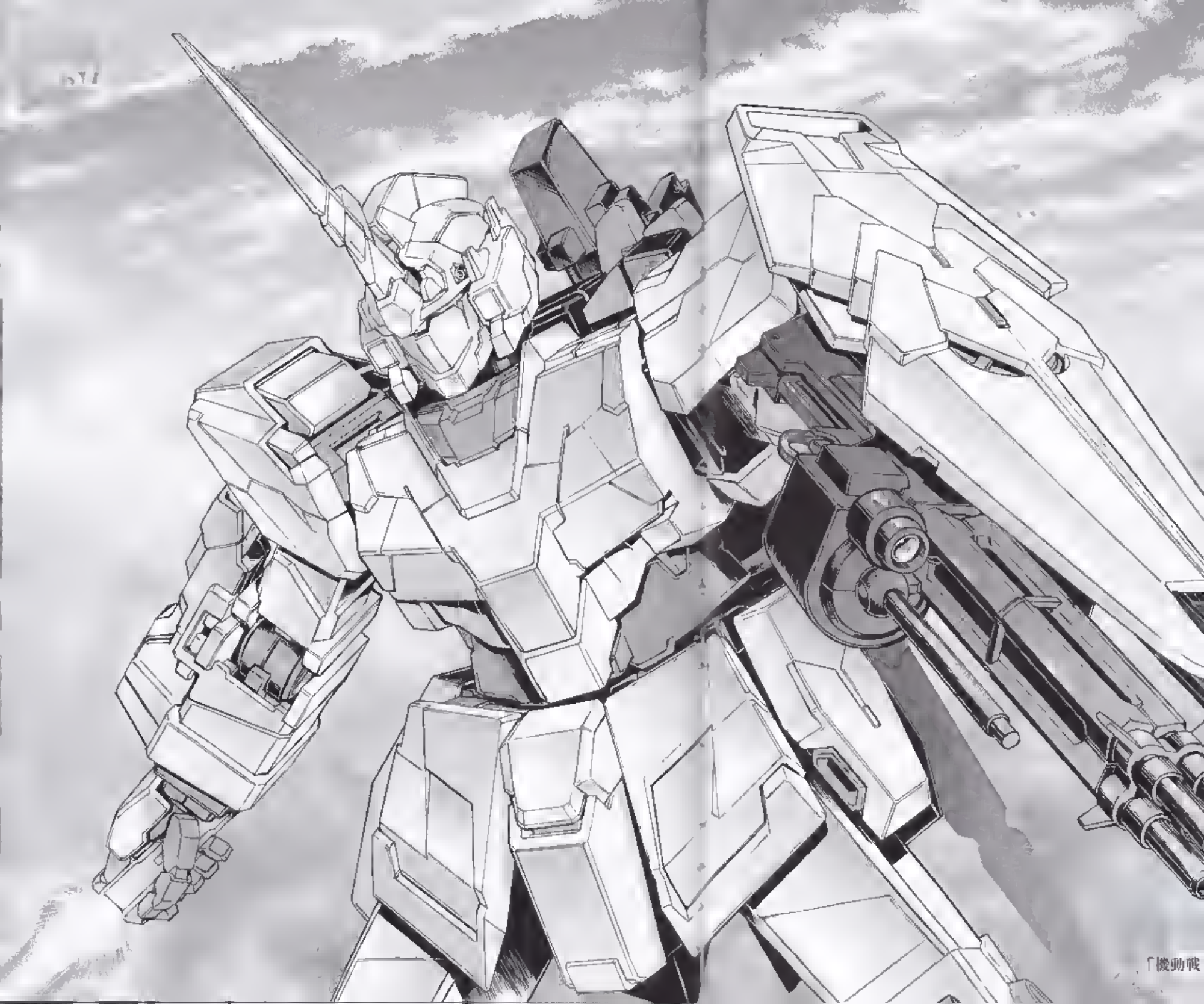
森田崇 メカニック作画:石口十
「機動戦士ガンダムUC 星月の欠片」

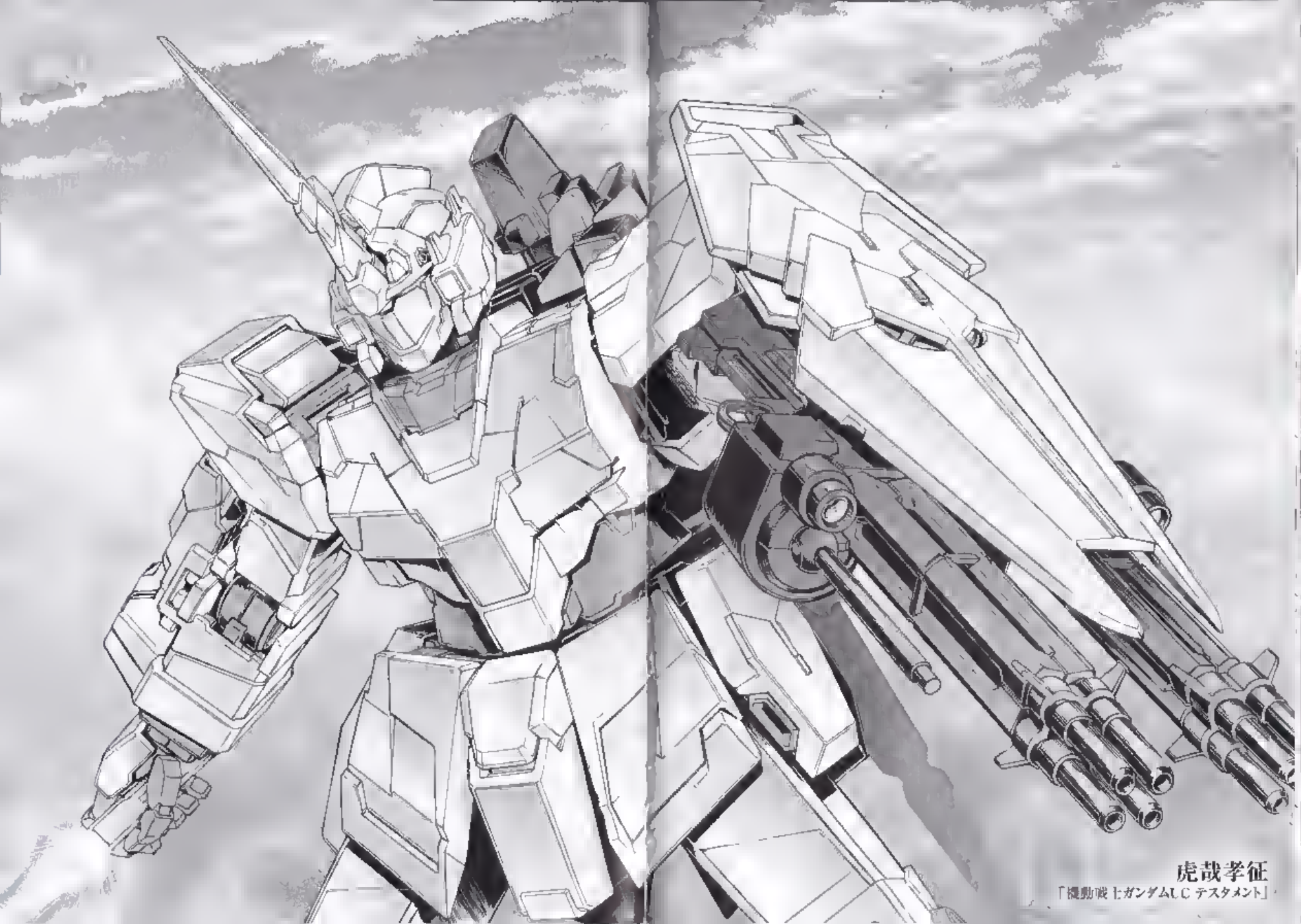


森田崇 メカニック作画:石口十
「機動戦士ガンダムUC 星月の欠片」

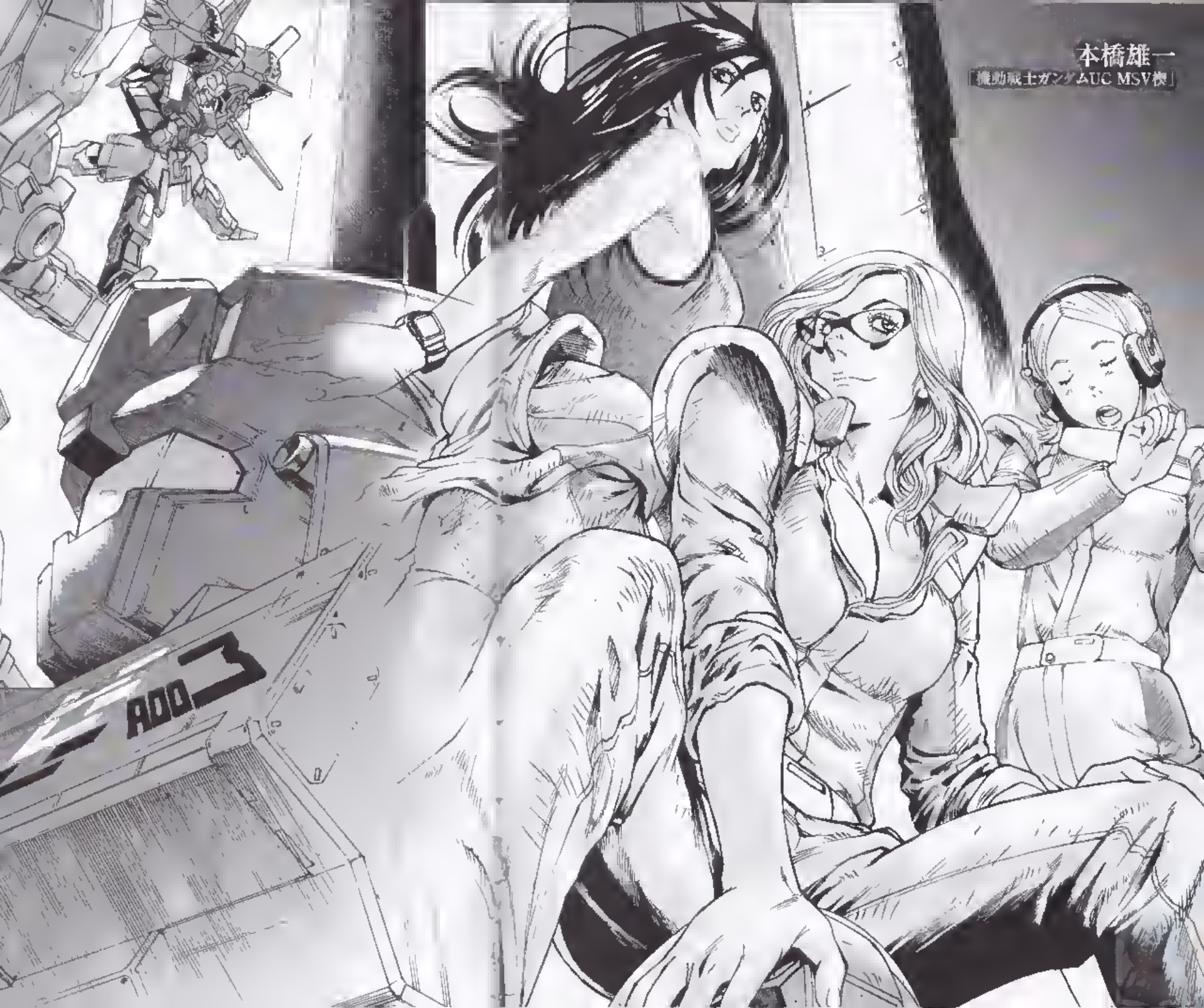


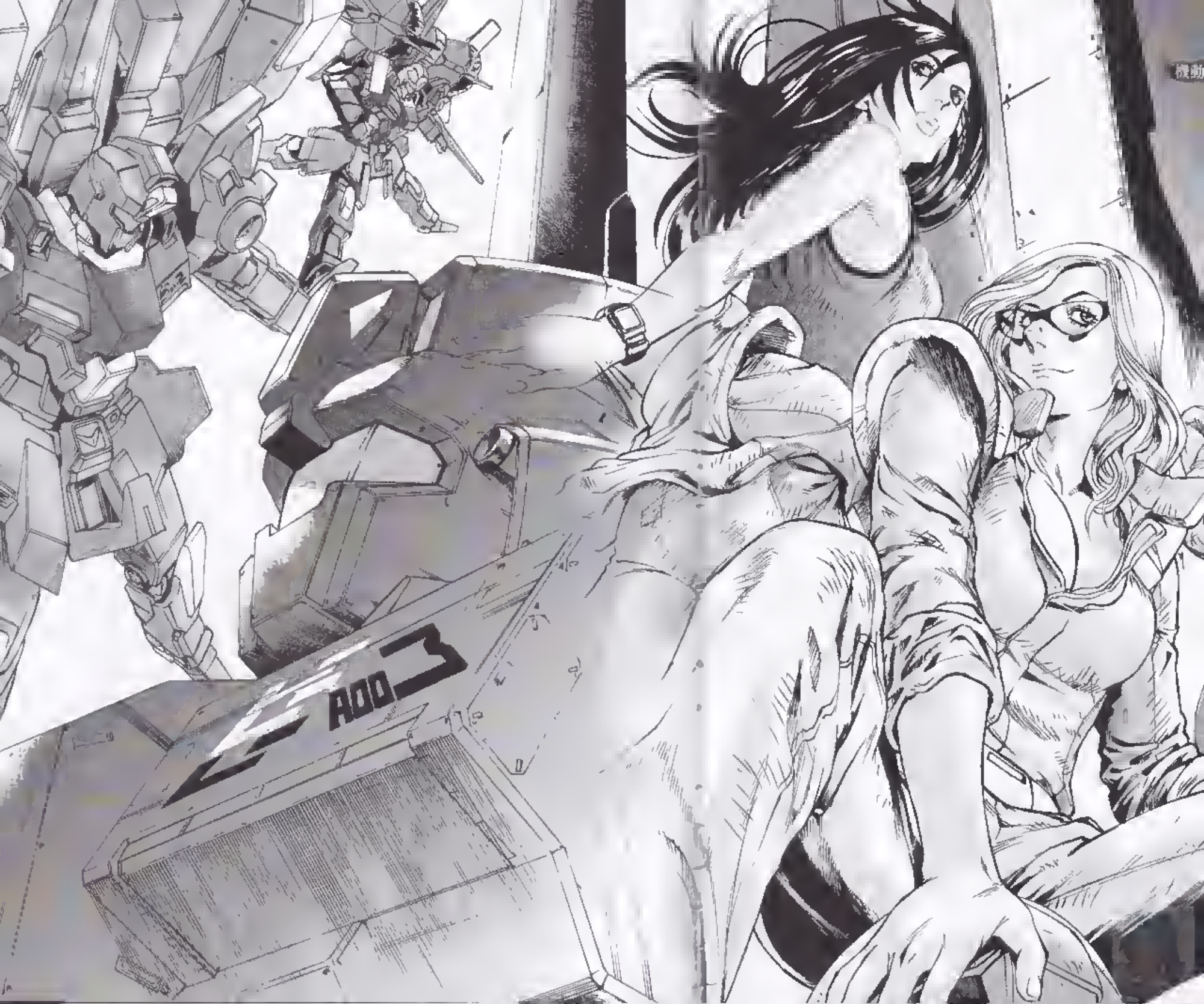
虎哉孝征
「機動戦士ガンダムUC テスタメント」

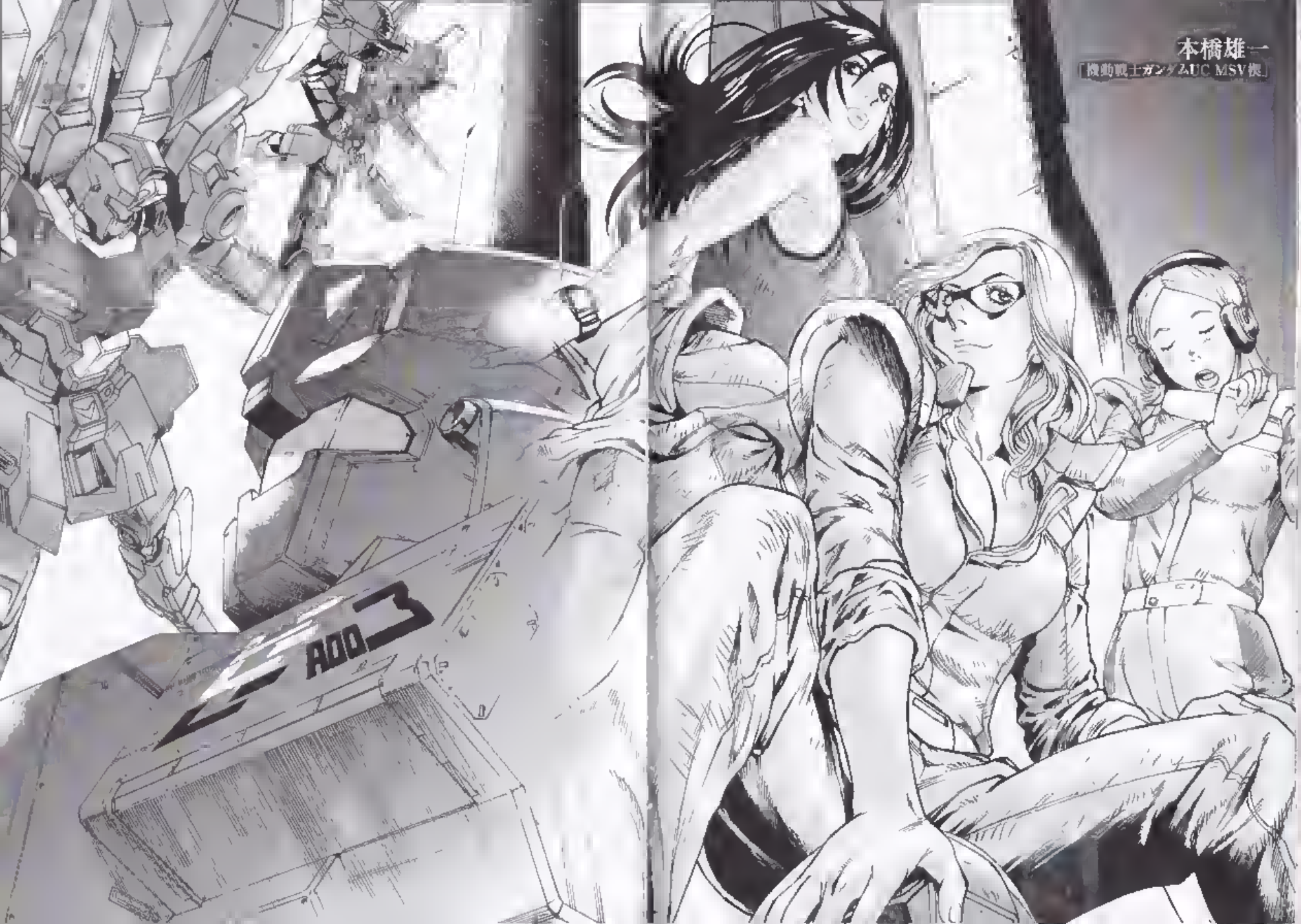




虎哉孝征
「機動戦士ガンダムUC テスタメント」


本橋雄一
「機動戦士ガンダムUC MSV傑」
ADD 3

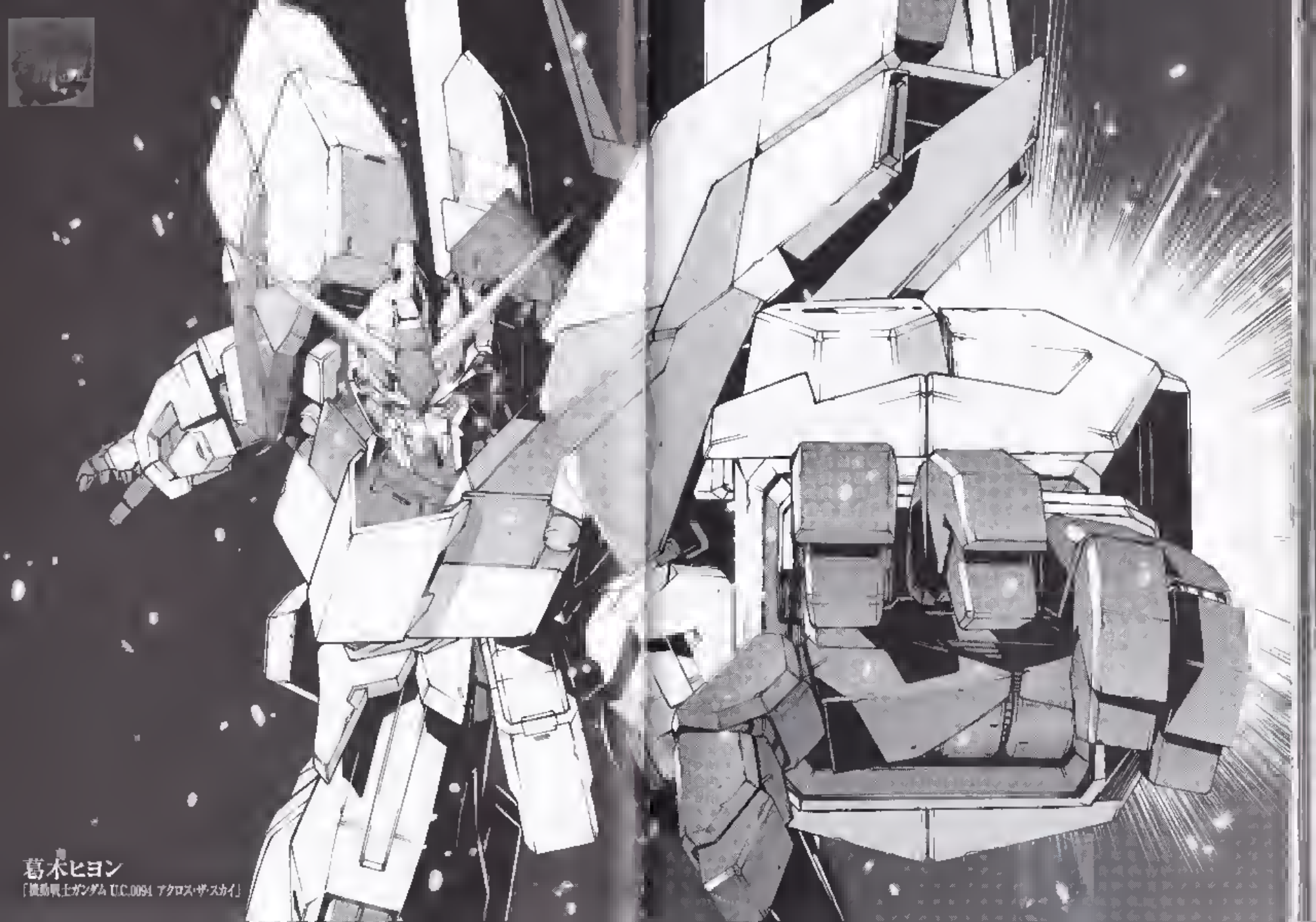

A00 3


本橋雄一
「機動戦士ガンダムUC MSV検」
ADD 3





葛木ヒヨン
「機動戦士ガンダム U.C.0094 アクロス・ザ・スカイ」



葛木ヒヨン
「機動戦士ガンダム U.C.0094 アクロス・ザ・スカイ」



対談 乾雄介（サンライズ）×関西リョウジ

UC世界は精細化していく

小説を原点とし、広がりを見せ続けるガンダムUCの世界。その流れ様は、ある一体のMSから始まったと言える。

名も無きMS

関西　今でこそ色んな展開を行えてはいるけど、アニメ初期は「ガンダムUC」自体が外伝的な雰囲気が強く、そういうものは憚られていたように感じます。

乾　展開の広がりを見せた発端は、やっぱりコミカライズの「バンデシネ」でしたね。福井（晴敏）さんの方から、小説第1巻でもアニメでも描かれていないオリジナルの内容を入れようというご提案を頂きまして、検討した結果、ユニコーンの機動実験のシーンを追加して、既存ガンダムタイプのMSと対戦させるというアイデアが出ました。そのお話をカトキ（ハジメ）さんに打診したところ、既存のガンダムには既に固定ファンがいらっしゃるだろうから、対戦MSには向いていない。ならば新しい別のMSがいいんじゃないかと逆に提案があって。描き上げて頂いたのがガンダム顔とジム顔のドーベン・ウルフだったんですよ。

関西　当時私はその打ち合わせには参加していなかったのですが、乾さんからその新MSの名前をどうしましょうかという相談があって。こちらとしては、それ以前にジオンMSに連邦ヘッドという特殊な機体に何も説明無く登場させるのはどうにも居心地が悪かった。そこでシルヴァ・バレトという名前を含めた設定を作り、ガンダムエースに掲載して頂いたんです。そこから色んな動き出しが始まったとも言えなくはないかな。

乾　アニメも好調なすべり出しとなり、当初はシルヴァ・バレト一体のみの予定だったのですが、引き続き「バンデシネ」用のオリジナル機体を登場させることになりました。

関西　リゼルディフェンサーユニットですね。そこからは私も参加させて頂くようになって。どうにもリゼルは格好いいMSの割に、量産機という立ち位置のお陰で本編では不遇な扱われ方をされていた。ep2でもシナンジュにビーム・サーベルで競り負けるなど、個人的に好きなMSだったので悔しいな、と。ならばハイパー・ビーム・サーベルならどうなっていたか……という妄想が入口になったんです。前衛と後衛というアイデアは福井さんからいただいて、基本ユニットが2種類あり、より強くなった記号としてステイメンのテール・バインダーを付けてはどうでしょうという発注で、カトキさんから出てきた答えはスーパーガンダムのようなシルエット。これ強くなりすぎてないですか、と思いましたが（笑）、自



乾雄介（いぬい ゆうすけ）
サンライズ　ガンダム事業部
ライツプロモートチーム

然とディフェンサーという名称が浮かんできました。

乾　そのときはUC・MSVという言葉はまだなかったんですよね。

電脳でバリエーションは華開く

乾　MSVとして機能し始めたのが、PS3ゲーム「機動戦士ガンダムUC」の企画からです。ゲームで一番やりたかったのはナンジュの強奪事件。特装版には福井さんに小説まで書いていただきました。ゲームの主役として考えていたのがシナンジュ・スタインで、連邦側の主役級のMSとして関西さんとカトキさんで考案したのが、ガンダム・アルタカイだった。

関西　「ガンダムUC」のMS配色は現代兵器然とした単色が多く、この時代でもガンダムの基本配色ともいえる鮮やかなトリコロールの機体もあるべきだろうと考えてはいたんです。

乾　カトキさんもアクションゲームで使用される機体ですので、武装がたくさんあればそれだけお客さんが楽しめるように色々な武装追加を考案して頂いて。

関西　いつもながらカトキさんは想定の上を行くデザインを提示されるので、こちらも送り手ながら受け手側の驚きを毎度味わわせてくれるという。デザインから生まれていった設定も数多く存在します。

乾　独特なトリコロール配色もカトキさんらしいですよね。

関西　最初はあくまでゲームのダウンロードコンテンツとして必要だからという部分が大きかった。だからと言って、ゲームだけで完結させてしまうのは勿体ないでしょう。ひとつひとつのMSを設定するときは、「ガンダムUC」本編に登場させてもおかしくないものにということも勿論、サイドストーリーとして、横に広がっていける……それこそ私がやらせて頂いているコミカライズですとか、その他のコンテンツにも意識的に使えるようにしたい。そのMSが単体で個性を出せるものになるように心がけています。

乾　ゲームスタッフからの要望を元に、こちらから「ガンダムUC」に沿ったものを提案しつつ、数自体は当初の3分の1くらいに減らしたんですよ。

関西　プロト・クシャトリヤとか、いろいろありましたね。

乾　実はこのタイミングでサンライズとして作りたかったのはデルタガンダムの方で、本来は「GUNDAM MS・GRAPHICA」というムック本企画で生まれたMSです。当時はカトキさんが描いた完全な設定画は存在しなかった。以前から商品化の要望は高かったので、きちんと設定化したかったんですね。UC・MSVにカテゴライズされているのはそういう理由があったからなんですよ。

「昇華」と「リンク」

関西　MS的観点からすれば「ガンダムUC」本編は往年のMSたちが登場するのが話題になり易い。それとは別にリゼルやギラ・ズールをはじめとする「ガンダムUC」由来のMSたち、それぞれの機体が持つ魅力を引き出して、きちんと昇華させることも大事でしょう。あとはリンクですね、同時期に生み出されたMSは技術的な伏線があり、それらが絶妙に繋がっているはずですから。

乾　クラーケ・ズールなんてバリエーションの分岐点として、今後登場する色々なMSの伏線になっています。そういう意味でもバンダイさんやバンダイナムコゲームスさんとの連携を取りつつ、1年2年先を見据えた連動感は、今までにはなかったものです。

関西　今現在もep7と並行して、色々と仕込んでいます。格好良く強いMSを、映像以外でもしっかり格好良く、そして強く見せられる舞台を絶えず提供していければ。

乾　ええ、これから先も裾野はどんどん広げていきたいですね。



関西リョウジ せきにしりょうじ
「機動戦士ガンダムUC」
設定協力



AFTERWORD

「月刊ガンダムエース」誌上で私が連載するモビルスーツ解説記事「GUNDAM UNICORN MS.I.D.T.C」をカラーで再編集、再構築したものが本書となります。

元々はep3に参戦したプロト・スタークジェガンを設定するにあたって、映像だけでは示しようのないD型ベースのスタークジェガンとの設定的な差異を伝えたいとの想いから始まった記事であり、ep4で鮮烈な登場を果たしたバイアラン・カスタムの出自なども含め、アニメーション本編で初登場した機体達、UC-MSVの設定を伝える手段として効果的に作用してくれたと感じています。

本書の情報に関しては基本的に連載時から設定内容をアップデートさせてはいますが、今となっては周知の事実であろう展開をあえて伏せた言い回しになっている箇所も残してあります。これもアニメーション本編制作と並行しての連載ゆえ、当時こちら側が伝えたかった熱量を文面から推し量ってほしいということでご容赦頂ければと。

今回はep5までに登場した機体を掲載していますが、収録されなかったモビルスーツには、月刊連載のために溢れてしまったというだけでなく、意識的にあえて選択しなかったものも存在します。

そのモビルスーツにとって、纏めるタイミングはまだ早い――要するに、いまだ公開していない設定が残されているというわけであり、こちらに関しては今後の展開を想像しつつ、存分にご期待ください。

2013年2月　関西リョウジ

Kadokawa Comics A

角川コミックス・エース

機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ①

著者
関西リョウジ

監修/サンライズ

2013年3月9日初版発行

発行者
井上伸一郎

発行　株式会社角川書店
〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3　電話／(03)3238-8453(編集)
発売　株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3　電話／(03)3238-8521(営業)
http://www.kadokawa.co.jp

装幀・デザイン
小林博明(Kプラスアートワークス)

印刷
凸版印刷株式会社

製本
凸版印刷株式会社

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
落丁・乱丁本は、ご面倒でも角川グループ受注センター読者係宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
この物語はフィクションであり、実在の人物・団体名とは関係がございません。

2013 KADOKAWA SHOTEN, Printed in Japan

©Ryoji SEKINISHI 2013
©創通・サンライズ
ISBN978-4-04-120641-6 C0979

PRISMATIC MOBILES

© 創通・サンライズ

MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN

PRISMATIC MOBILES

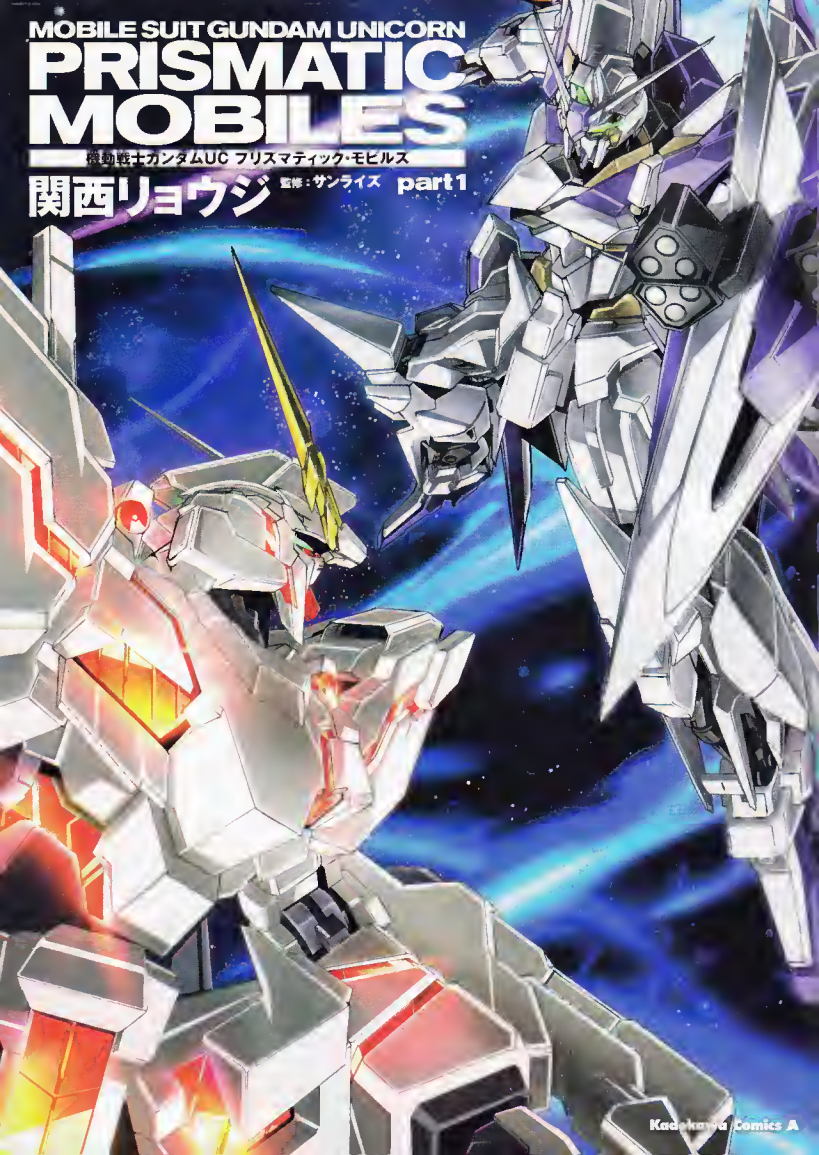
機動戦士ガンダムUC プリズマティック・モビルズ

関西リョウジ 監修：サンライズ

part1



Kadokawa Comics A


MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
機動戦士ガンダムUC プリズマティック・モビルス
関西リョウジ
監修：サンライズ
part1
Kadokawa Comics A

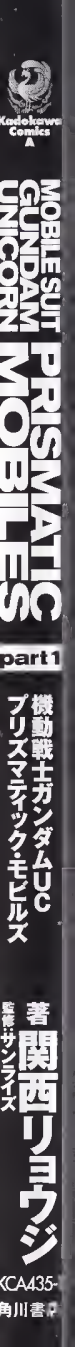




ISBN978-4-04-120641-6
C0979 ¥940E

定価:本体940円(税別)
発行:角川書店

PRISMATIC MOBILES


Kadokawa Comics A
MOBILE SUIT GUNDAM UNICORN
PRISMATIC MOBILES
part1
機動戦士ガンダムUC
プリズマティック・モビルズ
著 関西リョウジ
監修 サンライズ
KCA435-
角川書店